

岩滝山遺跡第5次発掘調査概要

1999.3

財団法人 東大阪市文化財協会



石組園池出土の菊花双雀文鏡

例 言

1. 本書は、東大阪市六万寺町1丁目780番地他において、日興建設株式会社により計画された宅地造成工事に伴って実施した岩滝山遺跡第5次発掘調査の概要を纏めた報告書である。
2. 本調査は、日興建設株式会社より委託をうけて財団法人東大阪市文化財協会が実施し、芋本隆裕を担当者として平成2年11月27日から平成3年3月30日までのあいだ現地調査を実施した。
3. 本書の執筆・編集は、芋本が行った。遺構図面は国際航業株式会社による空中写真測量図を原図とし、遺物図面は太田圭子・小川順子・多田真弓が実測したものを使用した。遺物写真は（株）G.Fプロに委託して撮影したものである。
4. 弥生土器の胎土については、八尾市立曙川小学校奥田 尚氏に多くの教示を得た。
5. 発掘調査及び整理作業には、上記の遺物実測者のほかに美並慶久・山田正輝・落葉芳宏・吉田周弘・柳瀬久美子の補助員諸氏が参加した。

本文目次

I 岩滝山遺跡の概要と調査歴	1
II 調査概要	
1 調査地の層序	4
2 弥生時代の遺構と遺物	6
1) 竪穴住居跡	6
2) 竪穴住居跡出土遺物	9
3) 包含層出土遺物	16
III 歴史時代の遺構と遺物	21
1) 奈良～平安時代の遺構と遺物	21
2) 鎌倉～室町時代の遺構と遺物	21
3) まとめ	35

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	3
第2図 岩滝山遺跡の調査地点位置図	3
第3図 第5次調査地区割図	4
第4図 土層断面実測図	5
第5図 3号竪穴住居跡実測図	7
第6図 4号竪穴住居跡実測図	7
第7図 1号・2号・5号・6号竪穴住居跡実測図	8
第8図 4号竪穴住居跡出土土器実測図	10
第9図 4号竪穴住居跡出土土器実測図	11
第10図 4号竪穴住居跡出土土器実測図	12
第11図 4号竪穴住居跡及びD2地区ピット39出土土器実測図	13
第12図 1号・3号・6号・7号竪穴住居跡出土土器実測図	15
第13図 B・C地区包含層出土弥生土器実測図	17
第14図 C地区包含層出土土器実測図	18
第15図 C地区包含層出土土器実測図	19
第16図 C地区包含層出土土器実測図	20
第17図 D地区包含層出土土器実測図	21
第18図 石組園池実測図	24

第19図	D 1 地区石垣 1・D 2 地区石垣 3 立面実測図	25
第20図	井戸 1・井戸 2・井戸 3 実測図	27
第21図	B 地区出土土器実測図	28
第22図	C 地区出土土器実測図	29
第23図	C 地区出土土器実測図	30
第24図	D 地区出土土器実測図	31
第25図	D 地区出土土器実測図	32
第26図	D 地区出土土器実測図	33
第27図	D 地区出土土器実測図	34
第28図	D 地区石組園池出土土器実測図	34
第29図	軒丸瓦・軒平瓦拓影	35
第30図	鉄器実測図	36
第31図	菊花双雀文鏡拓影	36
第32図	第 5 次調査地平面図	折り込み

図 版 目 次

図版 1	岩滝山遺跡第 5 次調査遺構	1	調査地南半部全景 (東より)
		2	調査地北半部全景 (東より)
図版 2	岩滝山遺跡第 5 次調査遺構	1	A 地区の遺構 (西より)
		2	同 上 (東より)
図版 3	岩滝山遺跡第 5 次調査遺構	1	B 1 地区の遺構 (東より)
		2	同 上 (北より)
図版 4	岩滝山遺跡第 5 次調査遺構	1	B 2 地区の遺構 (東より)
		2	同 上 (南より)
図版 5	岩滝山遺跡第 5 次調査遺構	1	C 1 地区の遺構 (東より)
		2	同 上 (北より)
図版 6	岩滝山遺跡第 5 次調査遺構	1	C 2 地区の遺構 (東より)
		2	同 上 (南より)
図版 7	岩滝山遺跡第 5 次調査遺構	1	D 1 地区の遺構 (東より)
		2	同 上 (北より)
図版 8	岩滝山遺跡第 5 次調査遺構	1	D 2 地区の遺構 (東より)
		2	D 2 地区の石垣 3 (北より)
図版 9	岩滝山遺跡第 5 次調査遺構	1	D 2 地区検出の 4 号竪穴住居跡 (東より)

		2	同上	(南より)
図版10	岩滝山遺跡第5次調査遺構	1	D2地区検出の4号竪穴住居跡	(西より)
		2	4号竪穴住居跡南壁沿いの弥生土器出土状況	
図版11	岩滝山遺跡第5次調査遺構	1	B2地区検出の5号竪穴住居跡	(南より)
		2	B1地区検出の2号竪穴住居跡	(西より)
図版12	岩滝山遺跡第5次調査遺構	1	B2地区検出の6号住居跡	(南より)
		2	C2地区検出の3号住居跡	(西より)
図版13	岩滝山遺跡第5次調査遺構	1	C2地区の井戸2	検出状況(東より)
		2	C1地区の石敷きの道	(南より)
図版14	岩滝山遺跡第5次調査遺構	1	D2地区井戸3内遺物	出土状況
		2	B2地区の石組遺構	
図版15	岩滝山遺跡第5次調査遺構	1	D1地区の石組園池	(北より)
		2	D1地区石組園池底の銅鏡	出土状況(東より)
図版16	岩滝山遺跡第5次調査遺構	1	D1地区の石垣1	(西より)
		2	同上	(北より)
図版17	岩滝山遺跡第5次調査遺構	1	D2地区の石垣1・2	(西より)
		2	同上	(南より)
図版18	岩滝山遺跡第5次調査遺物		4号竪穴住居跡出土弥生土器	
図版19	岩滝山遺跡第5次調査遺物		4号竪穴住居跡・D2地区ピット39・1号竪穴住居跡 出土弥生土器	
図版20	岩滝山遺跡第5次調査遺物		3号・7号竪穴住居跡・C地区包含層	出土弥生土器
図版21	岩滝山遺跡第5次調査遺物		C地区包含層	出土弥生土器
図版22	岩滝山遺跡第5次調査遺物		B地区・C地区包含層	出土弥生土器
図版23	岩滝山遺跡第5次調査遺物		A地区・B地区	出土瓦器・土師器・灰釉陶器
図版24	岩滝山遺跡第5次調査遺物		A地区・B地区	出土瓦器・土師器・白磁
図版25	岩滝山遺跡第5次調査遺物		B地区・C地区	出土土師器
図版26	岩滝山遺跡第5次調査遺物		C地区・D地区	出土瓦器・土師器
図版27	岩滝山遺跡第5次調査遺物		C地区	出土瓦器・土師器
図版28	岩滝山遺跡第5次調査遺物		D地区	出土瓦器・土師器
図版29	岩滝山遺跡第5次調査遺物		D地区	出土土師器
図版30	岩滝山遺跡第5次調査遺物		D地区	出土備前焼・東播系・瓦器・土師器・韃羽口・ 鉄鏃・銭貨
図版31	岩滝山遺跡第5次調査遺物		軒丸瓦・軒平瓦	
図版32	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	4号竪穴住居跡	出土弥生土器
		2	同上	

図版33	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	4号竪穴住居跡出土弥生土器
		2	4号竪穴住居跡出土弥生土器
図版34	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	4号竪穴住居跡出土弥生土器・土製品
		2	1号・7号竪穴住居跡出土弥生土器
図版35	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	1号・7号竪穴住居跡出土弥生土器
		2	B地区・C地区包含層出土弥生土器
図版36	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	C地区包含層出土弥生土器
		2	同上
図版37	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	C地区包含層出土弥生土器
		2	同上
図版38	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	C地区包含層出土弥生土器
		2	同上
図版39	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	D地区包含層出土弥生土器
		2	C地区出土瓦器・備前焼
図版40	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	C地区出土東播系・瓦器
		2	同上
図版41	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	D地区出土瓦器・土師器
		2	D地区出土瓦器・土師器・石鍋
図版42	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	D地区出土備前焼・瓦器
		2	D地区出土瓦器
図版43	岩滝山遺跡第5次調査遺物	1	各地区出土サヌカイト片
		2	同上

I 岩滝山遺跡の概要と調査歴

岩滝山遺跡は東大阪市六万寺町の東方、生駒山地より派生する尾根の末端及びこれより流れ出た花崗岩起源の風化礫が堆積した斜面地に所在する。遺跡付近の標高は60～100m。遺跡北部に東から西にのびる谷があり、遺跡はこの谷の南側を中心に北側にも一部ひろがっている。本遺跡は、昭和44年「こうぎり自動車道」建設工事の際に発見され、昭和45年に工事と並行して行われた第1次調査により弥生時代後期の竪穴住居跡2棟が見つかったことから、弥生時代のいわゆる高地性集落跡として周知されるようになった。また、その後行われた発掘調査により、13～15世紀を中心とする建物・石垣・園池等の遺構と多量の遺物が広い範囲よりみつきり、中世遺跡としても注目されるようになった。これらの中世遺構は、『捨遺往生伝』に平安時代長暦の頃（1037～40年）安助上人によって建立されたとされる往生院に関係するものと、『東大寺寺社雑事記』のなかの『尋尊大僧正記』に文明九年（1477）畠山政長と義就のあいだで戦いが行われたとされる往生院城に関係するものと考えられている。

ところで、現在の往生院の東方山中には、大阪府より「河内往生院伝承地」として史跡指定されている遺構の存在が古くより知られていた。この遺構は、南北約18m・東西12mの土壇とその上に合計11個の礎石を遺し、出土瓦の様式により平安後期～室町初期頃の中世往生院の堂宇の基壇と考えられており、岩滝山遺跡の中世遺構とともに中世往生院の範囲と規模の大きさを示すものである。このほか、岩滝山遺跡内には古墳の墳丘と横穴式石室の上部石組が削平され、石組下部だけを残す遺構も発見されている（第6次・第7次調査）が、これは本遺跡の北に分布の中心をもつ六万寺古墳群の一部が重なるものと考えられる。

次に、これまでの調査歴を概観しておく。

第1次調査 前記した「こうぎり自動車道」建設工事の際に弥生後期の土器が発見され、緊急調査の結果、谷を挟んで南北に200m離れた2地点で後期の竪穴住居跡が1棟づつ検出された。南側のA地点の住居跡は直径約5mの円形プランに復原できるもの、北側のB地点の住居跡は工事で削られているが一辺5mの隅丸方形のプランと推定されるものであった。住居跡出土土器は共に第V様式前半の西ノ辻I地点式・E地点式に比定されている。このほかA地点で6世紀後半の幅25mを測る溝、その上層で中世の遺物包含層がそれぞれ検出されている。

第2次調査 昭和54年8月、遺跡北部を東西に分断する谷の南、「こうぎり自動車道」西側の宅地造成地（六万寺町1丁目1571番地他）において東大阪市遺跡保護調査会により発掘調査が実施された。その結果、6カ所の調査トレンチのうち、第3及び第5トレンチにおいて柱通りを示す掘立柱の柱穴が検出された。このうち第3トレンチでは南北3間・東西1間以上の建物プランが復原され、第5トレンチでは南北4間の柱通りに対応する東西の柱列が不揃いであるが、第3トレンチと同様かすこし大きい建物が想定される。これらの建物の時期は、柱穴内の土器片が細片のため限定出来ないが、上部を覆う地層に瓦器碗の終末型式や土師器のいわ

ゆるへソ皿が含まれていることから、14世紀中頃～15世紀と考えられる。

第3次調査 昭和61年1月、現在の往生院西隣の老人ホーム予定地（六万寺町1丁目818番地他）において東大阪市教育委員会による調査が実施された。その結果、敷地内に設置された3カ所のトレンチのうち、最も東に位置する第1トレンチにおいて、南北に並行する石列が検出された。二つの石列は共に西側面と上面を揃えたもので、西側の石列の方が約20cm低く据えられている。二つの石列間は約1mを測り、そのあいだは整地土によりほぼ水平にされていることから、この整地土上の東側石列以東に建物があり、その西側庇縁が石列間に張り出していたものと推定される。整地土の上に焼土が一面にみとめられることから建物は火災に遭ったとみられ、その時期は焼土面出土土器より14世紀中頃～後半と考えられる。

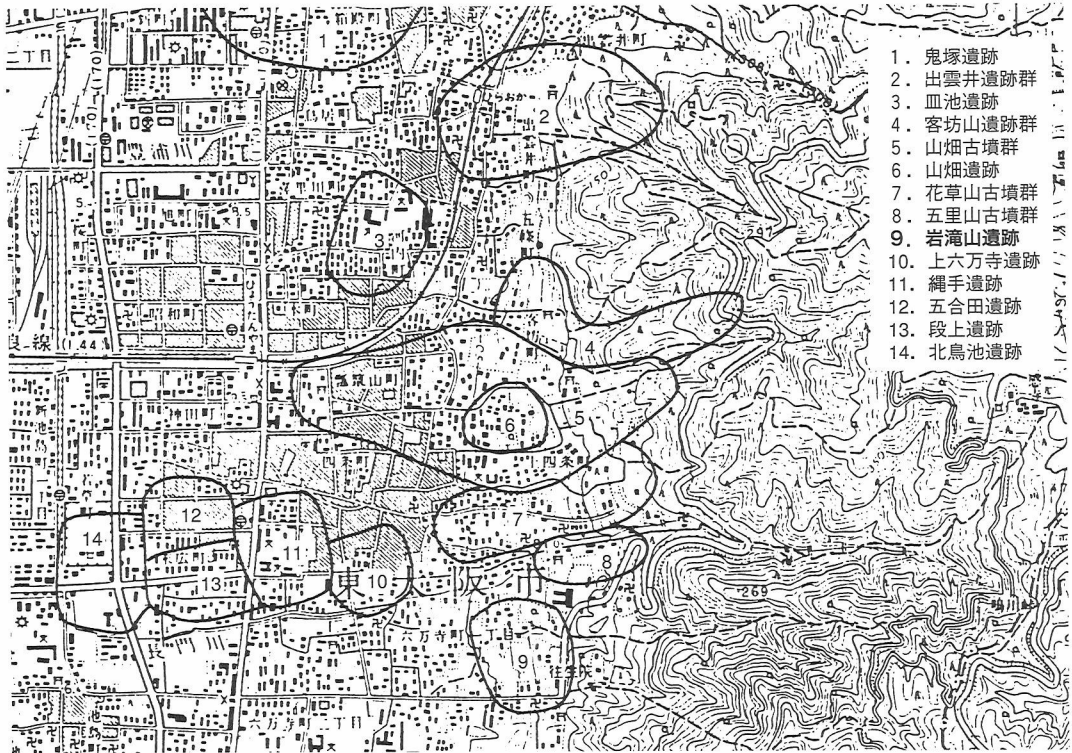
第4次調査 「こうごり自動車道」南端より西80m程の宅地造成地（六万寺町1丁目780番地他）において、昭和62年10月～12月に財団法人東大阪市文化財協会により発掘調査が実施された。南北約35m・東西約15mの調査地の東半部はすでに削平されていたが、西半部は東から西に下降する斜面上に上下二枚の遺物包含層と三面の遺構面とが検出された。最下面の遺構は、13世紀前半頃のもので、溝・掘立柱の柱穴・土坑などがみられる。このうち土坑には一辺約0.8m・深さ約0.15mの方形で、四壁が強く焼け、多量の灰や焼土を含むものがあって、火葬施設ではないかと考えられている。第2面では、方形の土壙墓が検出され、人骨の一部と13世紀前半の土師器皿7枚が出土した。最上面では、人頭大かやや大きい石を組み合わせた石室をもつ13世紀中頃の墓が検出された。石室は南を奥壁とする長さ約1.3m・幅約0.8mを測るもので、東側壁1段、西側壁と奥壁に4段の石積みが残る。床面の平らな自然石の上で人骨の一部が検出されている。

第5次調査 本報告に収録

第6次調査 第1次調査のB地点東側の宅地造成地（上六万寺町1605番地）において、平成6年8月～10月に財団法人東大阪市文化財協会により発掘調査が実施された。その結果、堅穴住居跡3棟、横穴式石室1基、小石室1基、中世の焼土坑2基などが検出された。堅穴住居の平面形は円形・方形・隅丸方形が各1棟あり、このうち円形と方形は弥生時代後期のもの、隅丸方形は弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられている。横穴式石室は無袖式で敷石をもつ6世紀末～7世紀前半のもの。小石室は南北4m・東西1mの規模で南に開口するもの。焼土坑は共に壁面が焼けており、火葬施設の可能性が考えられている。

第7次調査 第5次調査地の北側隣接地（六万寺町1丁目861番地他）で住宅建設中に横穴式石室の下部石組が発見され、平成6年11月に石室の確認調査が東大阪市教育委員会により実施された。その結果、石室は右片袖式と確認され、上層より中世の柱穴・溝も検出された。

第8次調査 第6次調査地の南に隣接する宅地造成地（上六万寺町1607番地他）において平成7年3月～5月に財団法人東大阪市文化財協会により発掘調査が実施された。その結果、円形堅穴住居跡1棟と第6次調査で検出した円形堅穴住居の南半部、中世の石垣・柱穴・溝・土坑などが検出された。堅穴住居は弥生時代後期のもの、その他は室町時代のものである。



第1図 周辺遺跡分布図



第2図 岩滝山遺跡の調査地点位置図

II 調査概要

平成元年4月、岩滝山遺跡内において宅地造成計画の届出があり、予定地（東大阪市六万寺町1丁目780番地他）において東大阪市教育委員会が試掘調査を実施した。この調査により中世の溝と遺物が検出されたため、市教育委員会文化財課と事業者である日興建設株式会社とが工事の取り扱いについて協議を行った結果、宅地造成による掘削等により遺跡の破壊は避けられないとの判断により、予定地全面の発掘調査を行うこととなった。調査は宅地造成予定地内の4段の棚田を対象として財団法人東大阪市文化財協会の担当で行われることとなったが、調査地内で排土置場を確保するため、一度に全面を発掘するのではなく、2回に分けて調査をすすめることとした。

本調査地は、標高70～90mの4段の棚田からなり（面積約3000㎡）、北東部に第2次調査地、北に第7次調査地、南に第4次調査地がそれぞれ隣接している。発掘調査を実施するにあたっては4段の棚田を東から西にA～D地区と呼称すると共にB～D地区をさらに南北に分けて、B1・2、C1・2、D1・2と呼称し、先に南側のB1・C1・D1地区を発掘したのち、調査地を埋め戻し、排土置場としたうえで、北側のA・B2・C2・D2地区へと発掘をすすめた（第3図）。調査は平成2年11月～平成3年3月に実施し、後記する弥生時代後期と中世の遺構・遺物多数が検出された。

1 調査地の層序

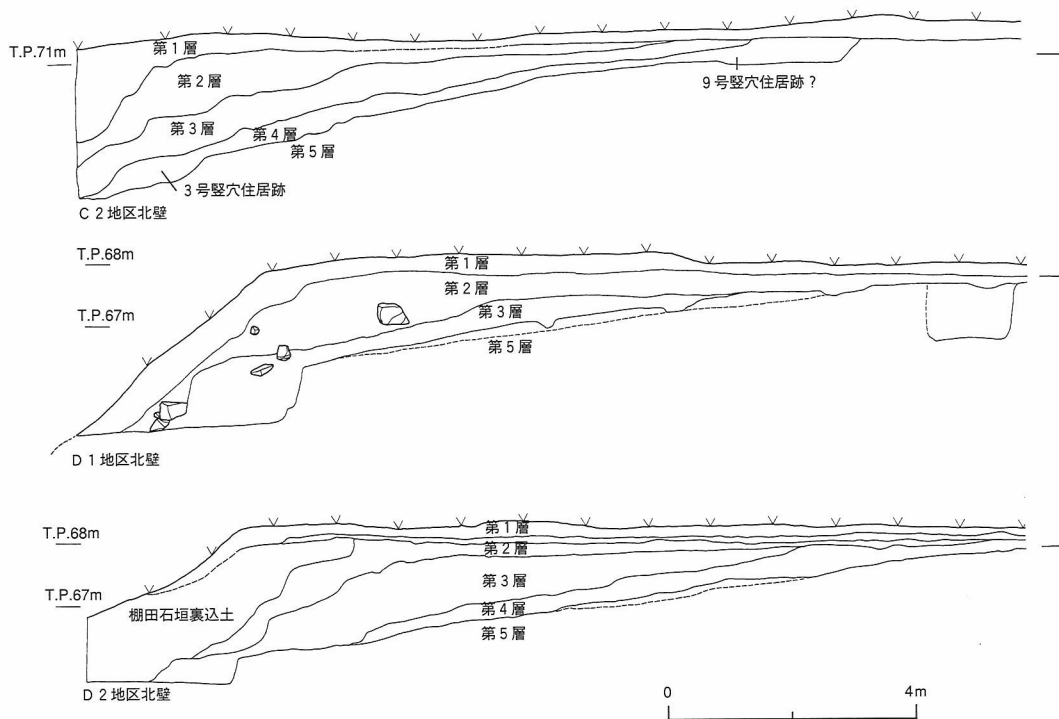
東から西に下降する自然地形を中世に一部改変しテラス状の整地面を作り出しているため、人為的な客土層と堆積層とに区分される。地表から第3層までは中世の遺物多数を含む客土層、第4層は弥生時代後期の遺物多数を含む堆積層、第5層以下は無遺物の自然堆積層である。各層の特徴は次のとおり。

第1層：旧耕作土。棚田使用時のものである。厚さ約20cm。

第2層：におい褐色（7.5YR/5/4）細礫混じり中～細粒砂・シルト混合層。土壌化した棚田造成時の客土層。各地区の西側



第3図 第5次調査地区割図（1/2,500）



第4図 土層断面実測図 (1/120)

では層厚1mを超えるが、東側では鋤床まで10cm程となる。層内より中世～近世の土器が出土した。

第3層：にぶい黄褐色（10YR4/3）細礫～粗粒砂混じりシルト＋暗褐色（10YR3/3）細礫混じりシルト質粘土。土壌化した中世の整地層で、4段の棚田の原型はこの層の形成時につくられている。各地区の西端部で厚さ0.5mを測り、東にむかって層厚が減少し、東端までに収斂する。D地区西端部では石垣を構築した際の裏込めにも使用されている。層内より鎌倉時代の瓦器・土師器等が多量に出土し、上面の遺構からは鎌倉～室町時代の遺物多数が出土している。

第4層：黒色（7.5YR2/1）粗粒砂混じりシルト質粘土。調査地の極く一部（C2・D2地区の北半部）に堆積するが、もともとは調査地全域にみられたものと思われる。中世の整地によりその多くは削平されたのであろう。弥生時代の遺物包含層であり、この層の下面より竖穴住居跡が検出されている。

第5層：明黄褐色（10YR7/6）粗粒砂混じりシルト～粘土。花崗岩の風化礫も多数含まれている。A地区・B地区の東半部は硬い地山層であるが、同地区の西半部及びC地区・D地区については風化した砂礫の二次的な堆積層となるため軟質となる。この風化礫堆積層も中世の整地以前は全域に堆積していたと考えられる。弥生時代後期の地表面はこの層の上面であろう。

2 弥生時代の遺構と遺物

1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡がA地区で1棟、B1地区で1棟、B2地区で2棟、C2地区で1棟、D2地区で1棟の合計6棟検出された。このほか竪穴上部は削平されているが柱穴と炉穴が残るものがC1・C2地区境で1棟、出土土器より竪穴に伴うものかとみられる柱穴数個がB1地区で、竪穴の可能性がある落ち込みがC2地区北壁でそれぞれ検出された。

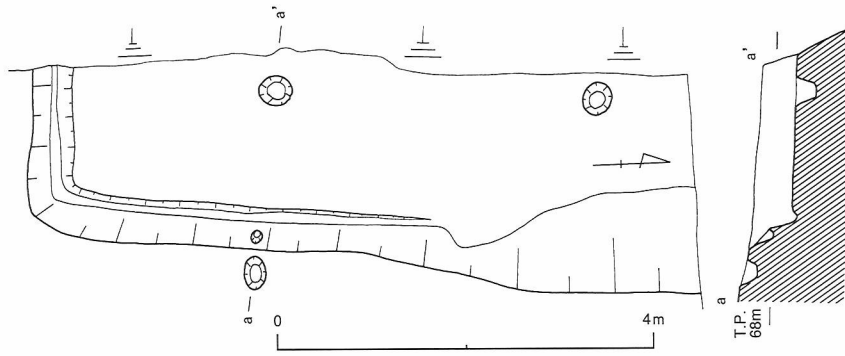
竪穴住居跡の平面形は竪穴が遺存する6棟のうち、円形が1棟、方形あるいは長方形が5棟であり、削平されているが柱穴の分布より円形とみられる1棟を加えても円形2棟に対して方形または長方形が5棟となり方形プランが主体を占めている。これらの竪穴住居は出土土器からいずれも弥生時代後期のものと考えられる。以下に各住居跡毎にその特徴を記述する。

1号竪穴住居跡 A地区南部で検出された隅丸長方形の竪穴住居跡。竪穴の上部はかなり削平を受けており、床面の一部と南及び東側の壁溝を残すだけの状態で検出された床面の大半は中世の整地の際に削平されて失われている。住居跡内の南壁溝内より第V様式初頭の器台1点が完形の状態で出土した。

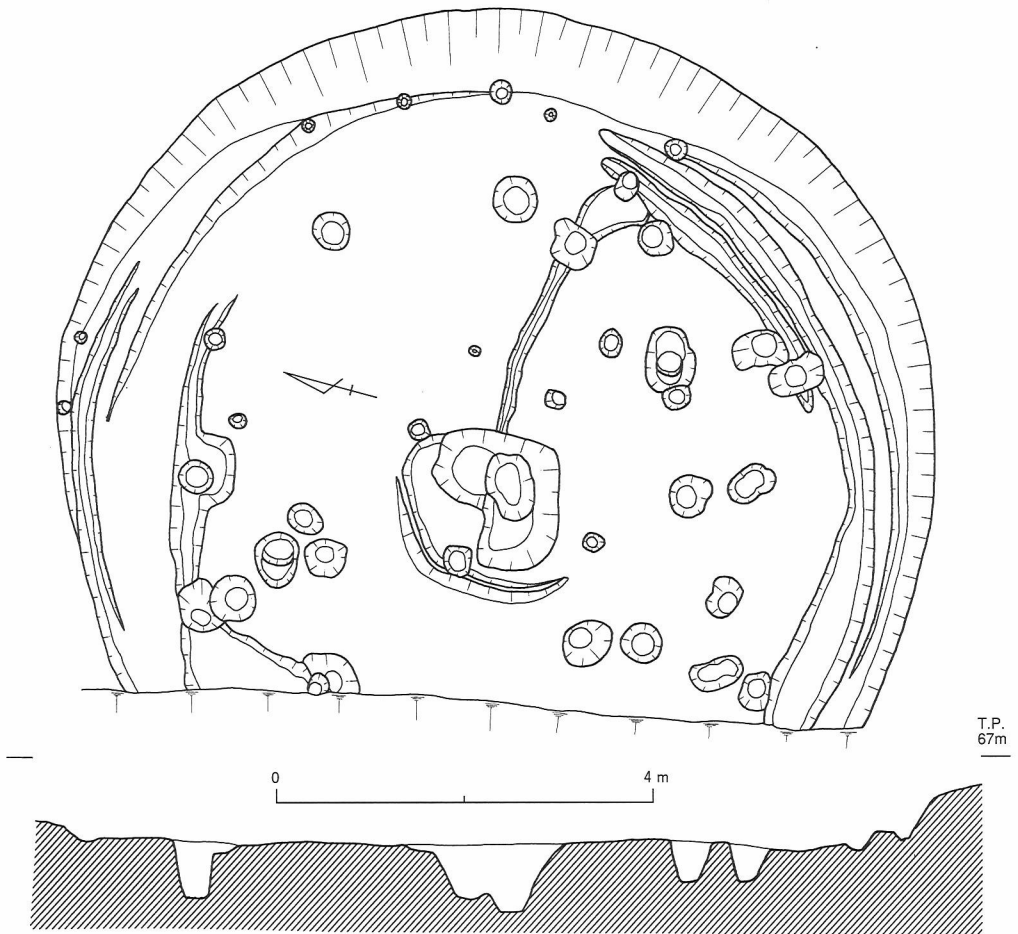
2号竪穴住居跡 B1地区で検出された方形あるいは長方形の竪穴住居跡。住居の西半部は中世の整地によってすでに削平され、東側の壁面と北・南の壁面の一部が残る。完存する東壁は長さ3.6m・深さ0.2m、壁溝は幅10cm・深さ5cmを測る。出土遺物は少数の第V様式土器片のみであり、時期限定の決め手を欠いている。

3号竪穴住居跡 C2地区の西端部で検出された長方形プランの竪穴住居跡。西半部は中世の整地の際に削平されて失われている。東壁は検出された長さは7mであるが、床面の柱穴の配置からみて長さ8mを超えるものと考えられる。東壁での竪穴の深さは0.7m。東壁沿いの床面に幅10cm・深さ5cmの溝がめぐらされている。出土遺物は竪穴内より第V様式土器片が少数出土し、床面の支柱穴の一つより第V様式中頃の小型甕が1点出土した。

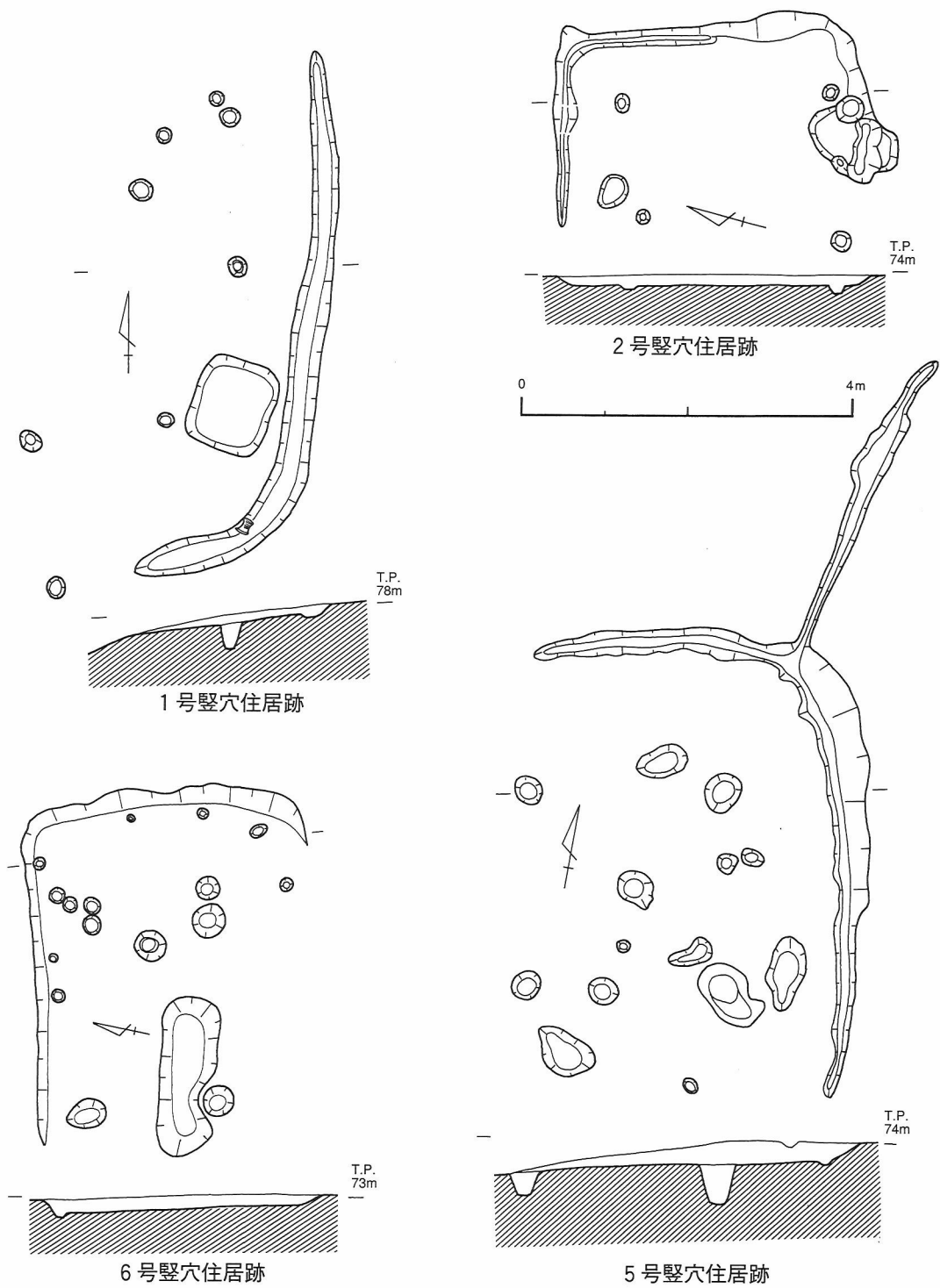
4号竪穴住居跡 D2地区で検出された直径9.2mを測る大型の円形住居跡。この住居跡は、西側の一部を鎌倉時代の石垣によって切られているものの住居跡の約80%が依存する。この竪穴は、他の住居跡が中世の整地により削平されているのに対して、弥生時代の遺物包含層と共にそのままの状態で遺存している。このため竪穴は東壁において0.7mの深さを残している。床面は、中央に炉穴があり、その上面は焼土で覆われている。竪穴の壁際には壁材を支える杭穴とみられるものが東壁際で3個・北壁際で2個検出された。周壁より1.5m前後内側の床面には、直径40cm前後・深さ40～60cmを測る柱穴が円形に並んで検出された。また、この並びのさらに内側にも柱穴がみられることや壁溝が2重にめぐることなどから、この住居跡は建替えと拡張が行われたものと考えられる。南壁沿いのテラス部分より完形の高杯・甕・鉢・把手付鉢（第8図25、第10図51、第11図88）および土器製作素材とみられる粘土塊が出土した。これらの土器は住居内での使用されていたものとみられ、その型式より住居が営まれた時期は弥生時代後期初頭であることが知られる。



第5図 3号豎穴住居跡実測図 (1/80)



第6図 4号豎穴住居跡実測図 (1/80)



第7图 1号・2号・5号・6号 豎穴住居跡実測図 (1/80)

5号竪穴住居跡 B2地区の中央南部で検出された。1号住居跡と同じく周壁はすでに削平されているが、北と東に残る壁溝によって竪穴住居跡と確認できる。平面形は東壁が5m以上の隅丸方形プランとみられる。支柱穴は4本であろう。出土遺物は少数の第V様式土器片のみである。

6号竪穴住居跡 B2地区の西部で検出された長方形プランの竪穴住居跡。西壁はすでに削平されているが、東壁は約3mを測る小型の竪穴住居跡であって、その規模は2号住居跡に類似する。壁際に壁材の支えとみられる杭穴が8個検出された。竪穴内より第V様式初頭の甕が1点出土し、弥生時代後期初頭の住居跡と考えられる。

上記の確認された竪穴住居跡の他に、C1地区とC2地区にまたがって柱穴多数が円形に分布する箇所がある。中心部分には焼土をもつ炉穴とみられるピットも検出されたことから、これらは竪穴上部が削平され、住居の床面以下だけが残る遺構と判断される(7号住居跡)。この住居跡の平面形は、柱穴の分布より円形とみられ、残りのよい4号住居跡の柱穴分布との比較から、竪穴規模は直径8～9mの大型住居であったと推定される。この住居跡の時期は、炉穴内より出土した完形の短頸壺の型式より弥生時代後期初頭と考えられる。

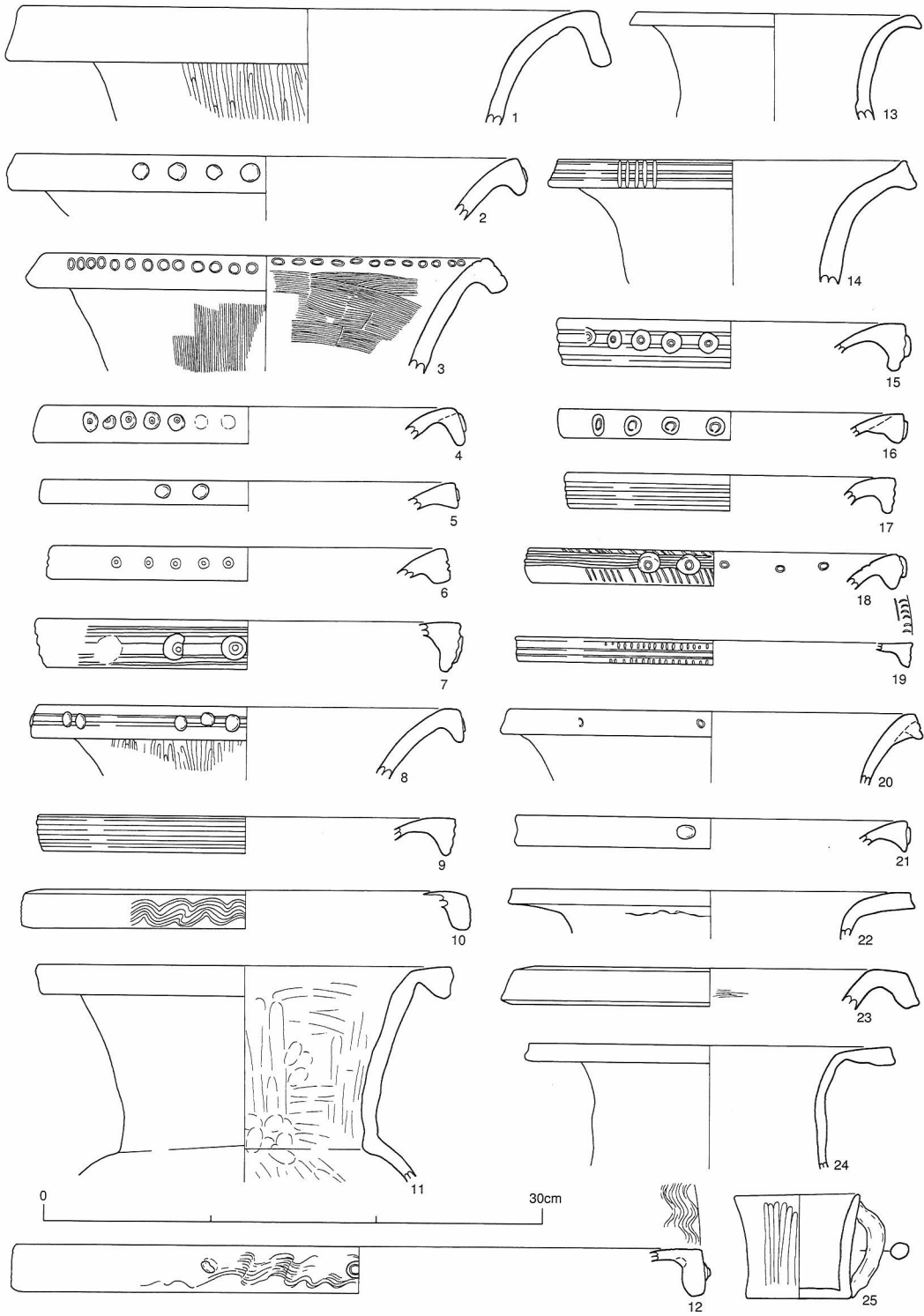
このほか、B1地区南部で第V様式の土器片を含む柱穴が分布する範囲があり、その分布から平面円形の竪穴住居跡の上部が削平された可能性が考えられる。また、C2地区の北壁に深さ0.3mの竪穴壁面の一部かとみられる落ち込みも検出されている。落ち込み内より第V様式土器片が出土。

2) 竪穴住居跡出土遺物

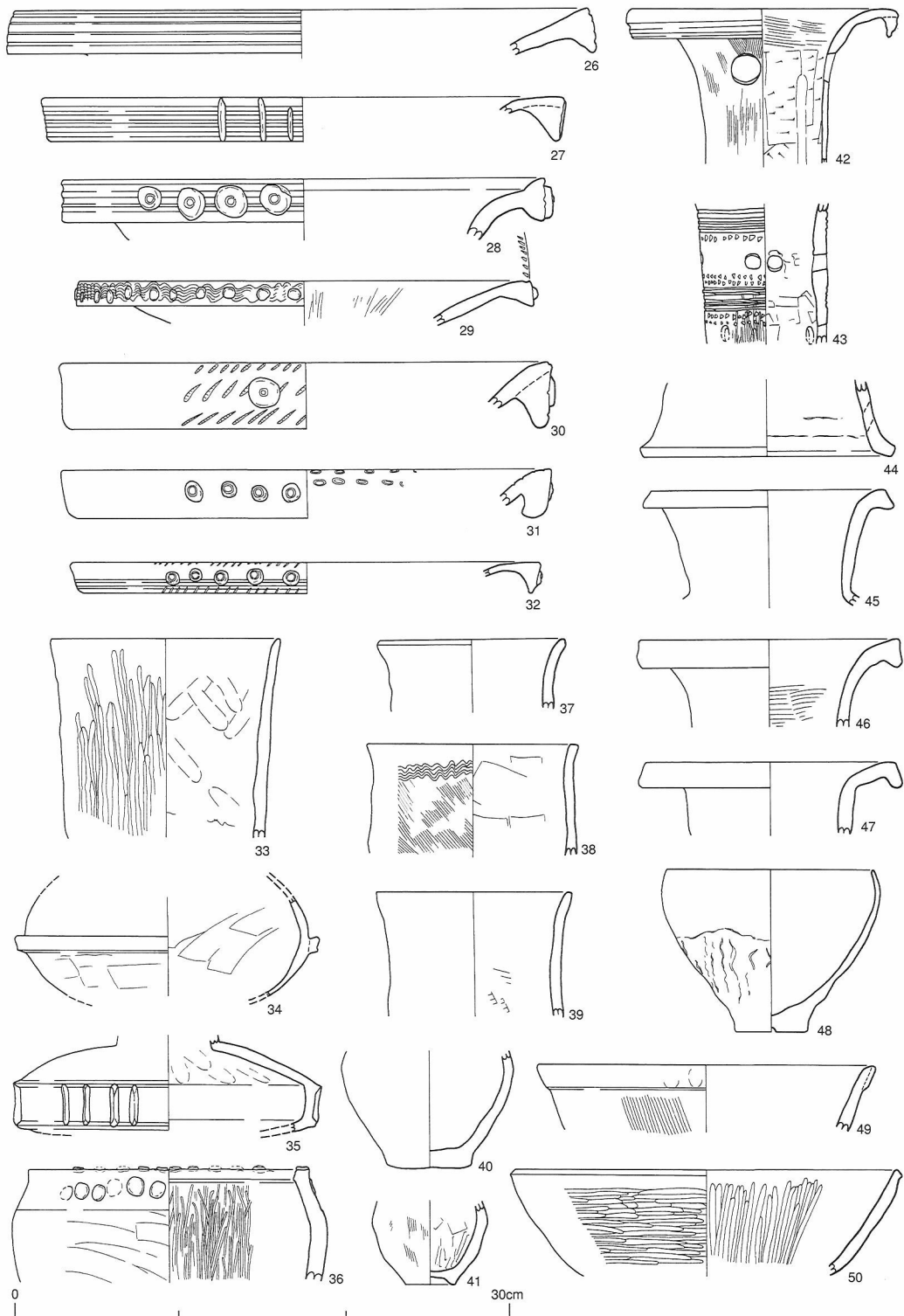
4号竪穴住居跡内出土土器(第8図～第11図) 広口壺・長頸壺・鉢・高杯・台付鉢・器台・甕などの器種がみとめられる。

広口壺は、筒状あるいは漏斗状の頸部から口縁部が外反し、口縁端部を下方に拡張する器形を呈する。口縁端の拡張部分に円形浮紋・竹管押捺紋・擬凹線紋・櫛描き波状紋・ヘラ刺突紋あるいは沈線紋などを施すものと、無紋様のものがある。有紋の広口壺のうち、2・4・5・16・21・31は口縁端部に円形浮紋を貼りつけ、31は口縁内面に竹管押捺紋を併せもつ。6・20は口縁端面に竹管押捺紋、3は口縁端面と内面に竹管押捺紋を施す。口縁端面に9・17・26は擬凹線、10は櫛描き波状紋、7・8・15・18・28は擬凹線+円形浮紋、32は擬凹線+円形浮紋+刺突紋、12は擬凹線+波状紋、14は擬凹線+縦位の沈線紋、27は擬凹線+棒状浮紋、19は擬凹線+刺突紋、12・29は波状紋+円形浮紋、30は刺突紋+円形浮紋をそれぞれ施紋する。また、口縁内面にも12は波状紋、18は竹管押捺紋、19は半截竹管押捺紋が施されている。これらに対して、1・11・13・23・45～47は口縁端部を拡張するが無紋様のもの、22・24は頸部から外折する口縁の端部を拡張せずにおわるものである。

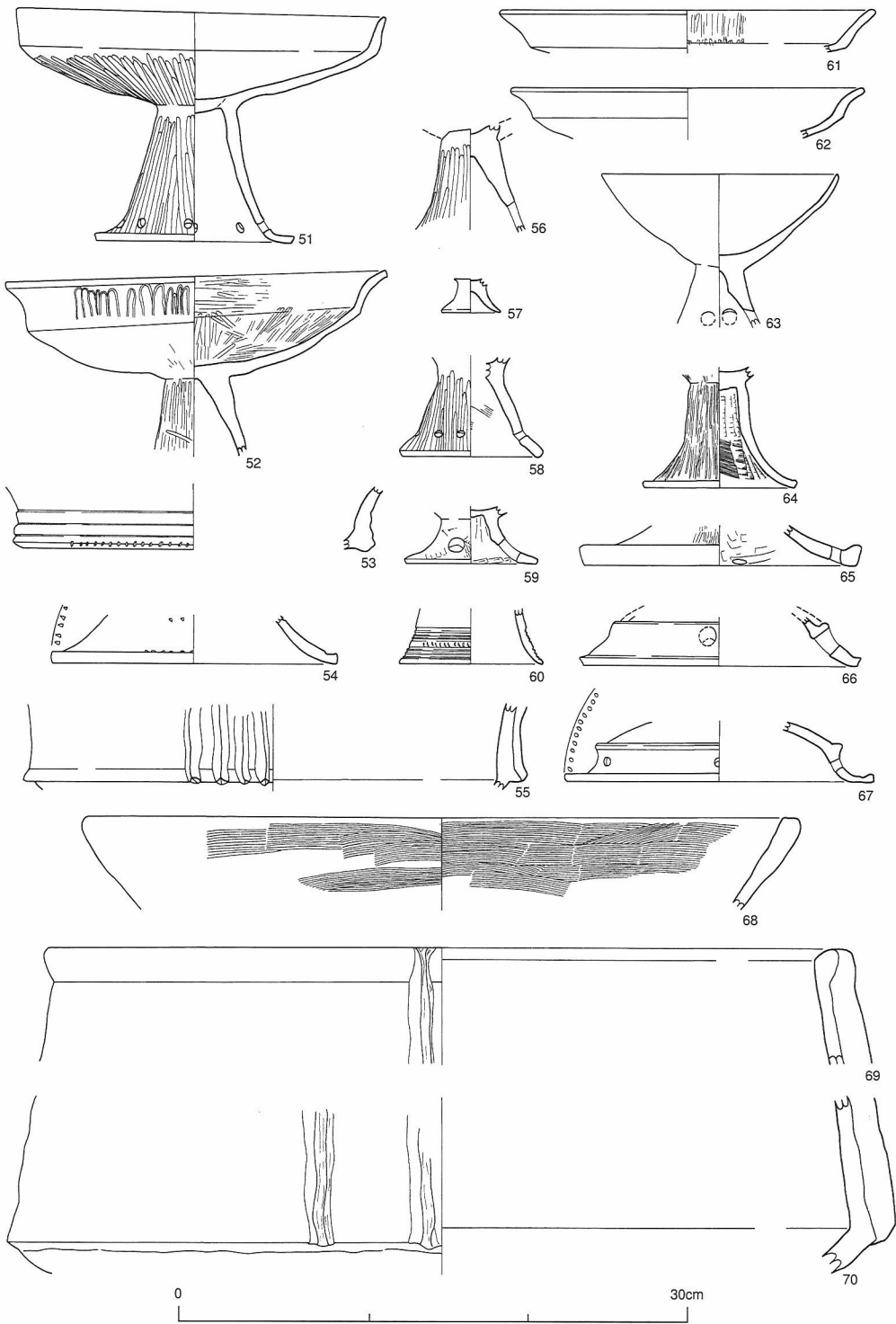
33・37～39は長頸壺で、いずれも口縁端部は外反せずにおわるもの。38の口縁下外面に櫛描き波状紋がみられる。34・35は細頸の長頸壺胴部。34は胴部中位に一条の凸帯を貼りつける。



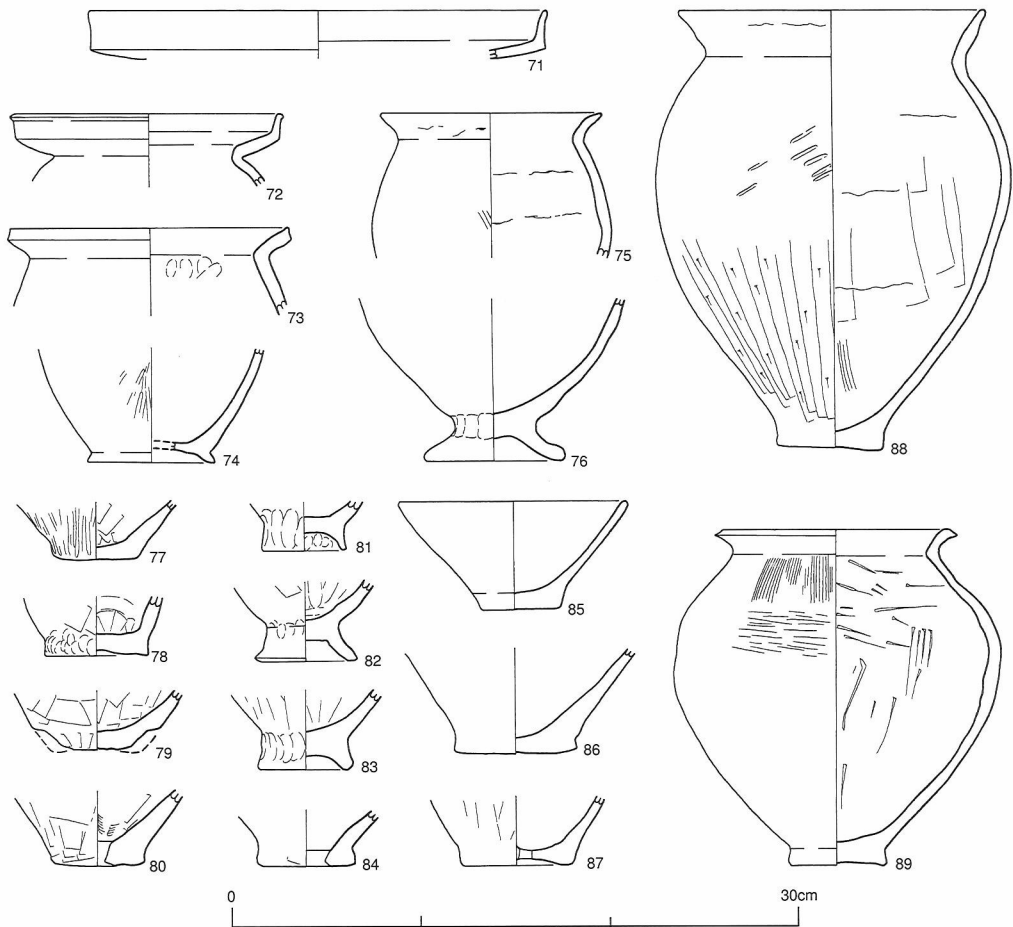
第8图 4号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4) 広口壺・把手付鉢



第9図 4号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4) 広口壺・長頸壺・無頸壺・鉢・器台



第10図 4号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)鉢・台付鉢・高杯



第11図 4号竪穴住居跡及びD2地区ピット39 出土土器実測図(1/4) 高坏・甕・鉢・底部
 35は扁球形の胴中位が上下を凸帯で区切られた垂直面となる器形を呈し、垂直面に棒状浮紋を
 4個一対で貼りつけた非河内産の土器である。

36は口縁端部がわずかに上方に立ち上がり、その上面および外面に連続する多数の円形浮紋
 を貼り付ける無頸壺。

鉢には大型品がある。69・70は同一個体とみられるもので、腰部が低く張り出したのち屈曲
 してやや内傾しつつ口縁部が立ち上がる器形。口縁端部は外側に粘土帯を貼り付けて肥厚し、
 その上に断面三角形の棒状浮紋を口縁端部から腰部まで貼り付けているが、このほかに紋様は
 みとめられない。体部下半を欠くが、脚台が付く可能性がある。55は同様の器形でやや小型の
 もの。この土器も、口縁部から腰部に4本一対の棒状浮紋を貼り付けるほかに紋様はみとめら
 れない。49・50・68・85は逆円錐台形の鉢。49は口縁端部が外側に肥厚する非河内産の土器。
 把手付鉢25はコップ形を呈する完形品。把手は体部外面への貼り付けによる。

高杯は杯部の器形によって5種類に分けられる。51は杯口縁部が上方に立ちあがる完形品。
 脚との境は円板充填により成形し、脚は裾部が短く外側に開くものが付く。52・61・62は杯口

縁部が外上方に外反するもの。52の脚部との接続は、先に製作した脚の上縁に杯部を成形する方法による。52の口縁部外面に波状紋崩れの暗線紋ヘラミガキがみられる。53は杯底部と口縁部の境に段をもつもので、段の外面に擬凹線3条と刻目が施されている。63は逆円錐台形の杯部をもつもの。71は杯口縁部が短く上方に立ち上がり、杯底部との境は外面に鋭い稜線がめぐるもの。脚部の器形には、裾部がゆるやかにひろがるもの54・64、柱状の脚柱部より屈曲して裾部が開くもの65、裾部が二段に屈曲して開くもの66・67などがみられる。このほか低脚台58・59、ミニチュア脚台57、裾部に沈線紋と半截竹管押捺紋を施す脚台60などがある。

甕は、外反口縁をもつほぼ完形の88は口縁部が立ちぎみの器形。口縁外面に残る接合痕により、口縁部の成形は胴上部を折り返したのち、さらに粘土を継ぎ足したことが知られる。胴部の調整は、上半部外面が右上りの目の粗いタタキメ、下半部外面が下から上のケズリ、内面は全体に下から上のヘラ掻きにより行われている。89は肩の張った胴部と鋭く外反する口縁部からなる。胴上半部外面に縦のハケメ+横ヘラミガキ、胴内面は上半に横、下半に縦のケズリがみとめられる。

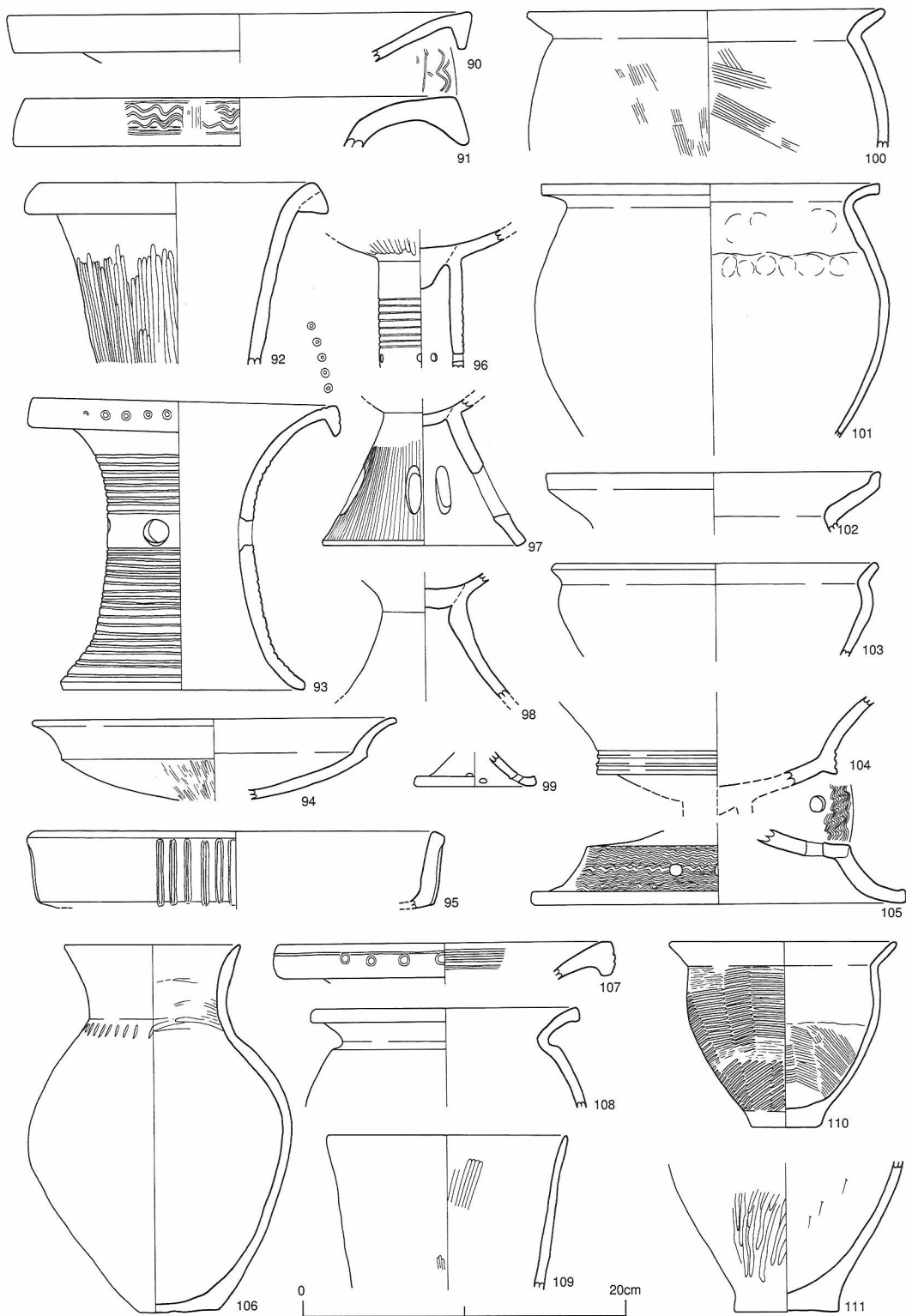
以上、図示した4号住居跡出土土器の編年上の位置は、第V様式初頭と考えられる。

1号・3号・6号・7号竪穴住居跡出土土器（第12図） 90～93・95～97・100・102～105・111は1号竪穴住居跡出土。90～92は口縁端部を下方に拡張する広口壺で、90・92は無紋様。91は口縁拡張部に櫛描き波状紋と直線紋、口縁内面にも同様の施紋を行う非河内産の土器。ほぼ完形の器台93は、ゆるく外反する口縁部とあまり開かない裾部をもつ円筒形の器台。口縁端の拡張部と口縁内面に竹管押捺紋を施し、体部から裾部には透し孔の部位を除いて竹管による擬凹線が密に施されている。同様の擬凹線は柱状の脚柱部をもつ高杯96にもみられる。高杯95は杯口縁部が直立ぎみに立ち上がり、外面に棒状浮紋を貼り付けたもの。高杯104は杯口縁部が大きく外反し、杯底部との境に段をもつもの。段の外面に3条の沈線をひく。二段に裾が広がり、裾部に細かな櫛描き波状紋を施す脚部105は、この種の高杯につく可能性がある。他に楕円形の透し孔をもつ円錐形の脚台97も出土した。甕100・102・103には外反口縁をもつものと受口状口縁をもつものがある。いずれも磨滅しているがタタキメの痕はみられない。1号竪穴住居跡出土土器は第V様式初頭を主体とするものである。

小型甕110は3号竪穴住居跡の柱穴より出土した。胴上部を折り返して口縁部を成形し、口径が胴部最大径より大きいこの甕は、胴外面に比較的目の細かいタタキメ（3.5条/cm）を残す特徴より第V様式中頃に下るものと考えられる。

94・98・99・101は6号竪穴住居跡より出土した。高杯94は口縁部が外反する器形。脚台98には円板充填がみとめられる。甕101は口縁部が水平にちかい外反を呈し、胴外面にタタキメがみとめられない特徴がある。これらの土器は第V様式前半に比定できるものである。

106～109は7号住居跡の炉穴とみられるピット内より出土した。106は完形の短頸壺。全体に磨滅が著しいが、頸胴部境にヘラによる刺突列点がみられる。突出しない底部や縦長の胴部形状、直立したのち僅かに外反する口頸部などの器形は第IV様式の短頸壺の系譜を引くもので



第12図 1号・3号・6号・7号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4) 広口壺・短頸壺・長頸壺・鉢・高杯・器台・甕

あり、刺突列点も刻みをもつ貼り付け凸帯の名残りと考えられる。107は口縁拡張部に竹管押捺紋と擬凹線をもつ広口壺。109は長い口頸部が直線的に立ち上がる長頸壺。108は口縁部が水平にちかい外反を呈し、胴外面にタタキメのみられない甕である。これらは第V様式初頭に位置付けられるものである。

3) 包含層出土遺物

A～D各地区より弥生時代の遺物は出土したが、A地区は竪穴住居跡を除くとほとんど出土がなく、B地区においても出土量はそれほど多くはなかった。出土量が最も多かったのはC地区で、次いでD地区が多かった。

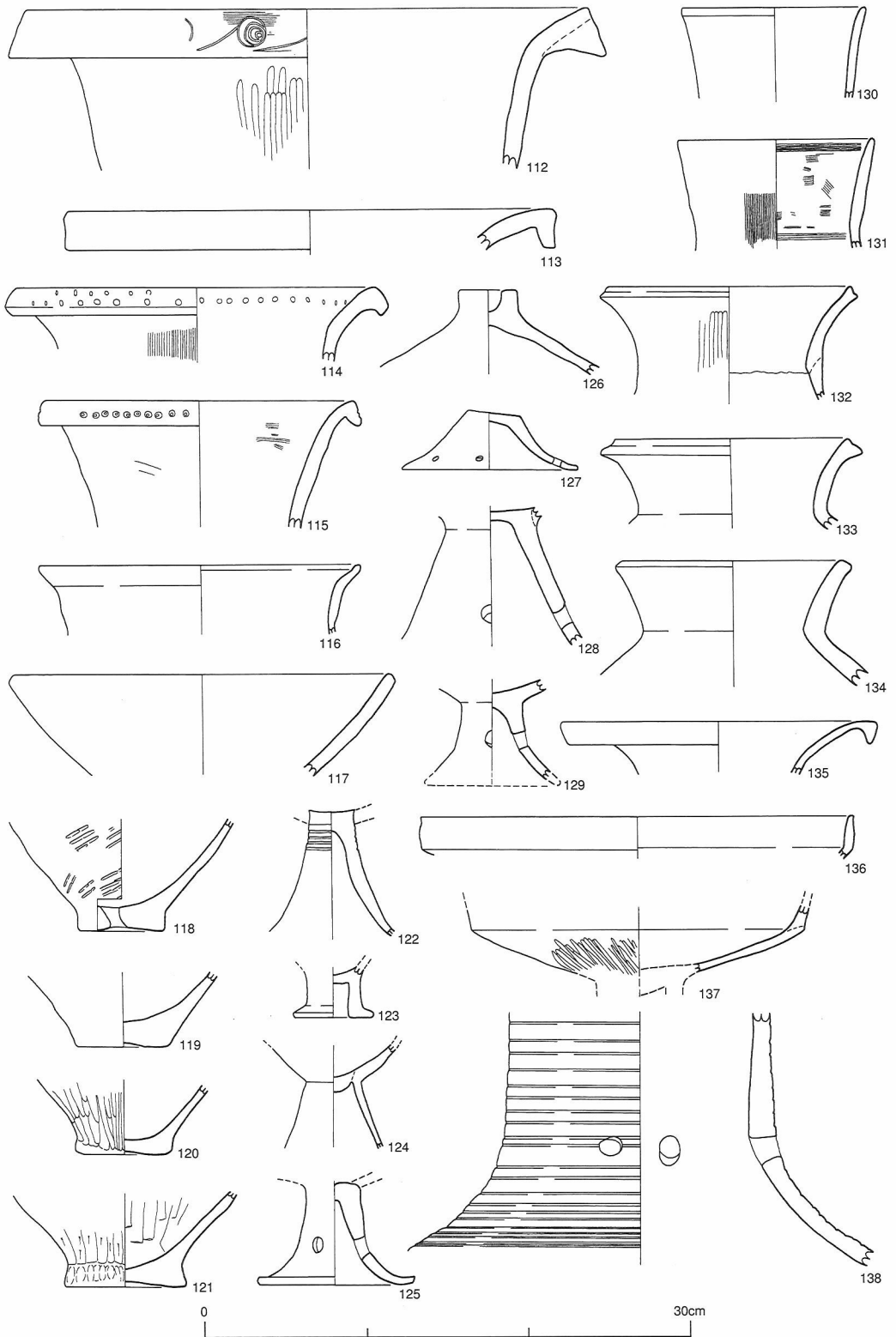
B地区出土遺物(第13図) 広口壺112～115、短頸壺131、壺蓋126、高杯137、器台138、脚台128・122～125などがみとめられる。大型広口壺112は口縁拡張部に竹管による同心円紋を押し、ヘラによって同心円を斜めに結んだ紋様を施す。この紋様は第IV様式のスタンプ紋の系譜を引くものと考えられる。広口壺114は口縁拡張部に細棒による刺突を二段に施し、口縁内面にも刺突列点を施す。広口壺115は口縁拡張部に竹管押捺紋を施すもの。高杯137は口縁部の立ち上がり直立ぎみの器形。大型の器台は筒状部より裾が大きく広がる器形を呈し、外面に擬凹線を密に施した非河内産の土器である。

C地区出土遺物(第13～16図) 広口壺132～135・145～148・150～161、長頸壺139～144、無頸壺149・162、台付無頸壺179、壺蓋127、鉢117・168・172・181・197～199・206、高杯136・163～167・171・173～178、器台180・182、脚台122・129・183～187、甕188～196・200～205・207～210などがみとめられる。

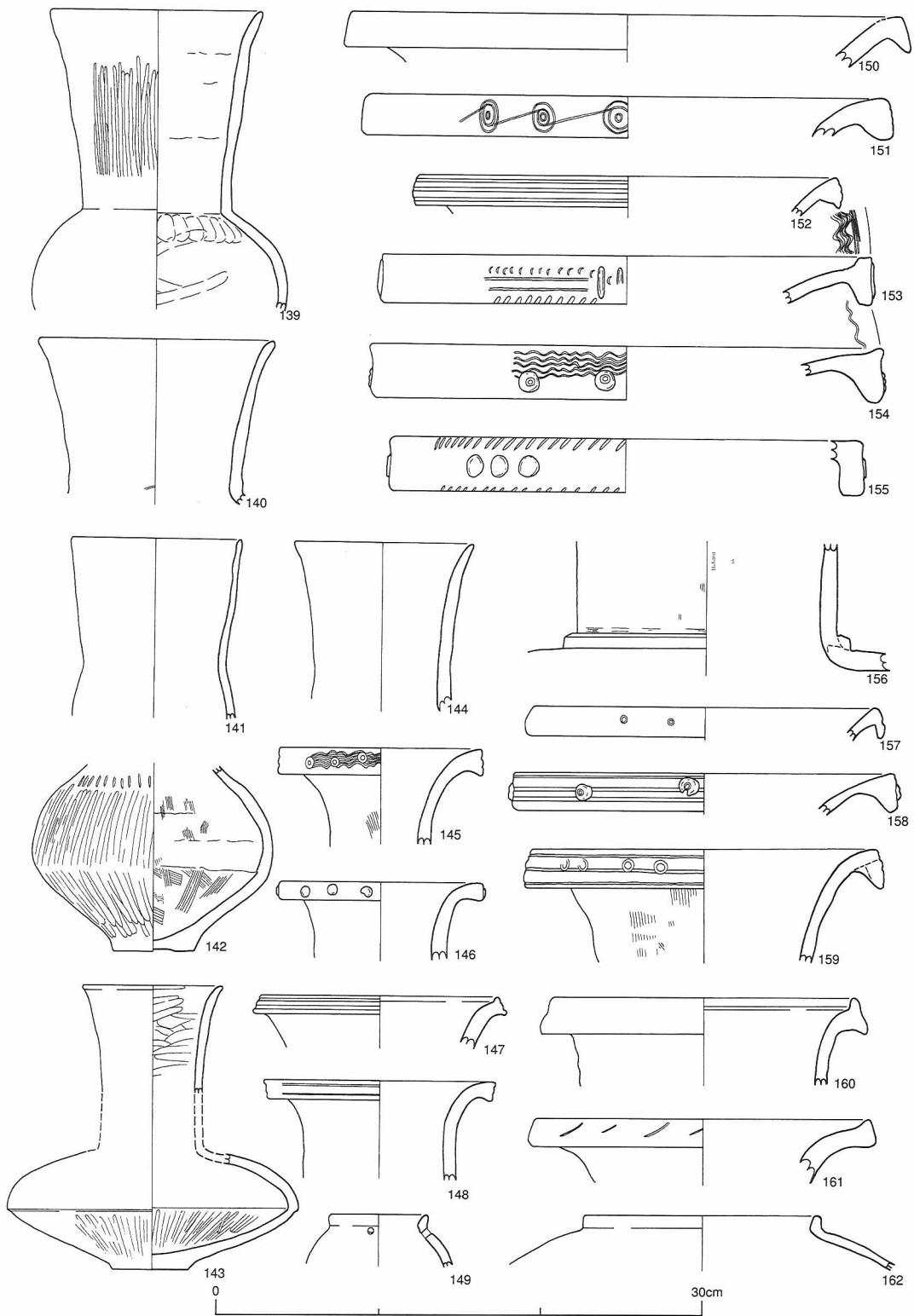
広口壺には、口縁拡張部に擬凹線・竹管押捺紋・円形浮紋・波状紋・刺突紋などを組み合わせた紋様をもつものが多数みられる。このうち151の竹管による同心円紋をヘラ沈線で結んだ紋様はスタンプ紋の系譜を引くと考えられる。153は口縁拡張部に擬凹線+棒状浮紋+半截竹管押捺紋+刻目紋を施し、口縁内面も波状紋と直線紋で飾るもので、広口壺または器台口縁部の可能性が考えられるものである。頸胴部156は大きく肩の張った胴部の上縁の粘土が乾燥したのちに頸部を成形しており、その接合部には補強を兼ねて凸帯を貼り付けている。無紋様の広口壺には、有紋壺と同様の器形を呈するもの135・150のほかに、口縁部がそれほど外反しない中小型壺132～134が含まれる。

長頸壺には、口頸部がゆるく外反するものに混じって、口頸部がほぼ直立し、その高さが胴部高を凌ぐ第V様式初頭の器形を呈するもの139がみとめられる。胴部には上部にヘラ刺突列点がめぐるもの142があり、6号竪穴住居跡出土の短頸壺と共通する施紋として時期を示すものと考えられる。このほか143は扁球形の胴部と細長い口頸部をもち、灰白色を呈する非河内産の土器である。

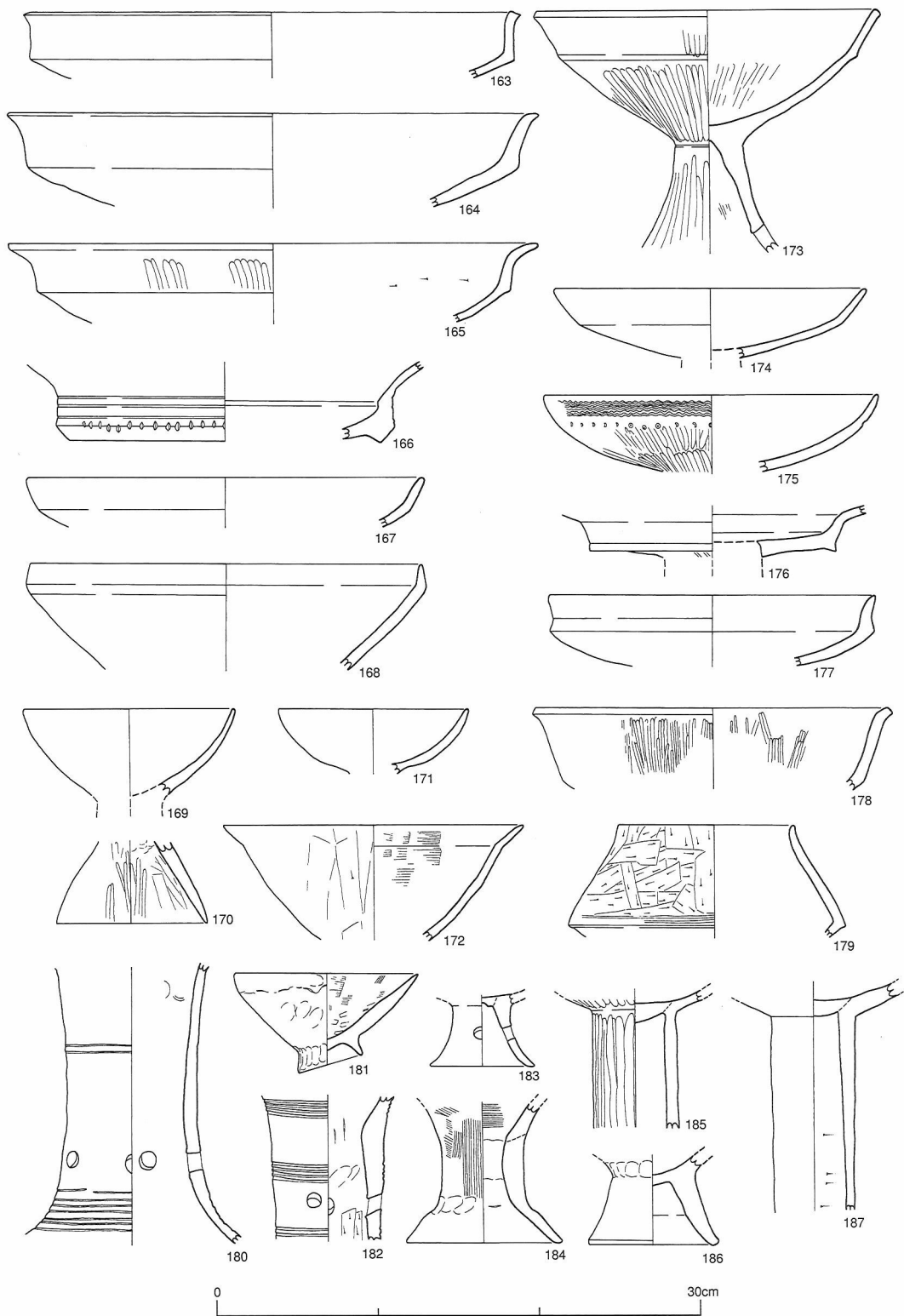
無頸壺には中型162と小型149がみられるが、ともに胴上縁から上方にわずかに口縁が立つ器形を呈するものである。179は算盤玉形の胴部上縁をそのまま口縁としたもので、最大径のや



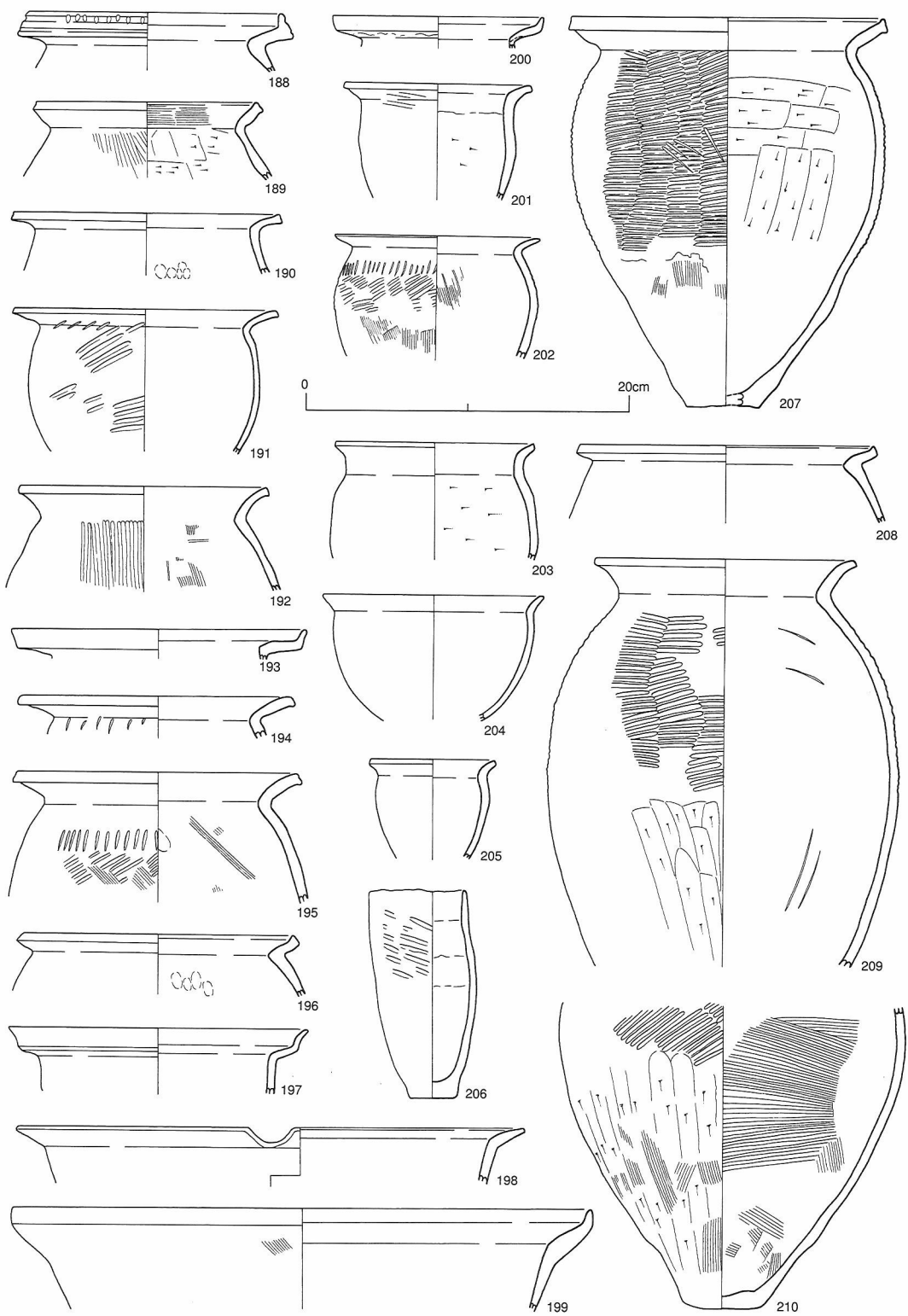
第13图 B·C地区包含層出土弥生土器実測図(1/4) 広口壺・蓋・鉢・高杯・器台・底部



第14图 C地区包含層出土弥生土器实测图(1/4) 广口壺・長頸壺・無頸壺



第15图 C地区包含層出土弥生土器实测图(1/4)鉢・台付鉢・高杯・器台



第16图 C地区包含層出土弥生土器実測图(1/4)鉢・甕

や上に直線紋が施されている。その器形より脚台がつくものと思われる。

鉢には逆円錐台形で直口のもの117・181、口縁をつまみ上げたもの168、外反口縁をもつもの172・198、外反口縁の端部をつまみ上げたもの197・199などがみられる。198は片口としたものである。グラス形を呈する206は、外面に比較的目の粗いタタキメ（2.5条/cm）をみるが、内面には約2cm幅で粘土紐接合痕を残している。

高杯には、杯口縁部が外反せずに立つもの163・164・178、杯口縁部が外反するもの165、杯口縁部と底部の境に鈍い稜がめぐる椀状杯部をもつもの167・173・174、杯口縁部と底部の境がない椀状を呈するもの169・171・175、杯口縁部が大きく外反し杯底部との境に段を有するもの166・176、杯口縁部が短く外反するもの177などがみられる。施紋は杯部に段をもつ166に擬凹線と刻目を施し、椀状杯部の口縁下に細かい波状紋と細棒による刺突がめぐる。176は非河内産の土器。脚部には脚柱部内面にケズリを行い、杯部との境を円板で充填したもの185・187がある。

器台は、筒状部に数条一組の擬凹線と円形透孔をもち、その上下に口縁部と裾部が広がる器形の中小型品180・182がみられる。

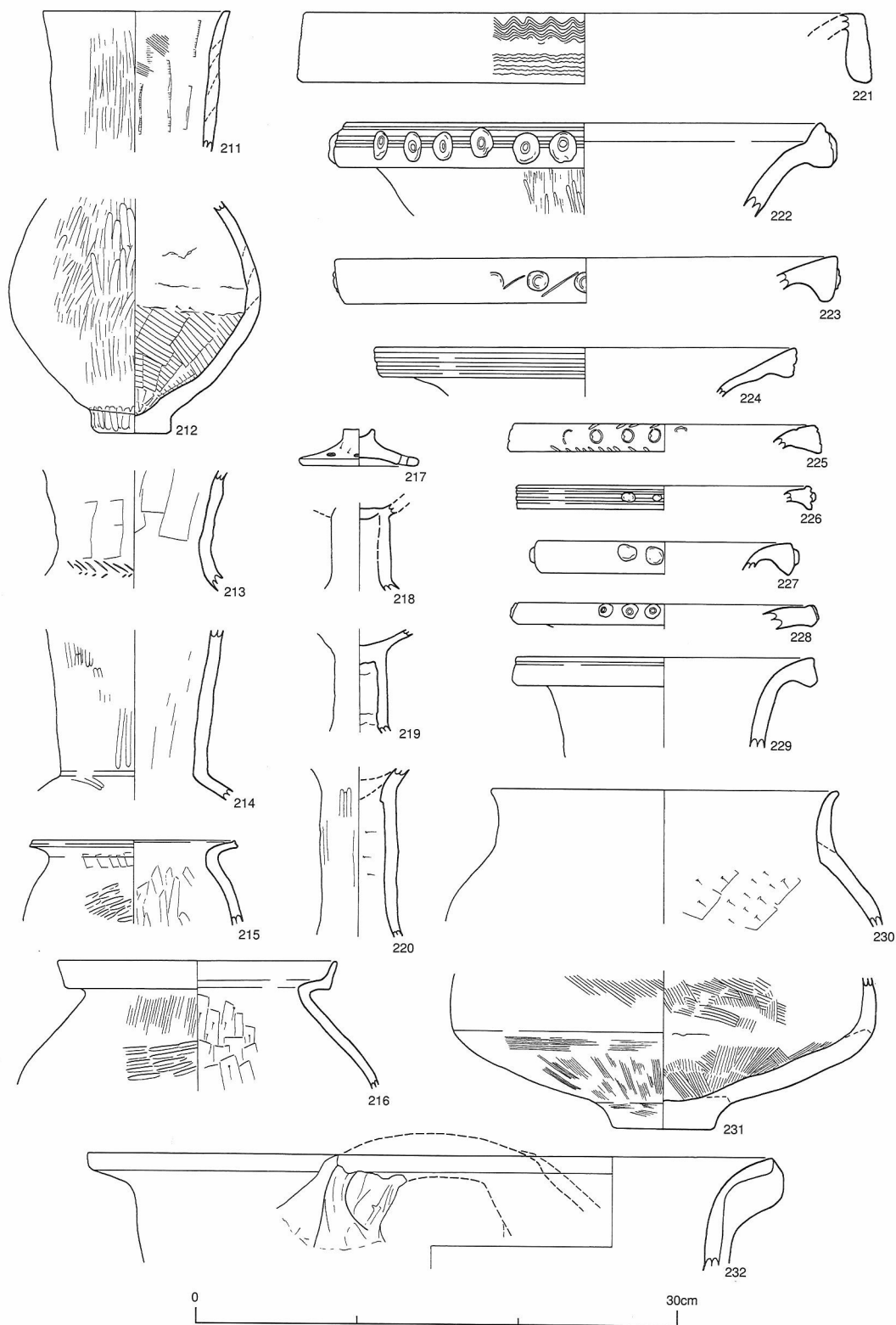
甕には、口縁端部を上方につまみ上げ、凹線と細棒による刺突を施すもの188が含まれる。この甕の胴内面にはケズリ痕もみとめられる。他に193・200の口縁部に端部つまみ上げの特徴がみられる。外反口縁をもつ完形の甕207は、底部が突出しない第Ⅳ様式甕の形態をとどめるもので、胴下位の接合部より上の外面にタタキメ（3条/cm）、内面にケズリ痕がみとめられる。同様の底部をもつ甕210は、胴上半外面にタタキメ、以下を下から上のケズリで調整している。209も同様の調整によるもの。他に外反口縁の甕189・201・203の胴内面にケズリの痕がみとめられる。また、194・195・202の胴上部あるいは口縁との境には、ヘラによる刺突が施されている。甕胴部のヘラ刺突列点は第Ⅳ様式にもみられるものであるが、最大径部付近に行う点で195など今回出土例との違いがある。

D地区出土遺物（第17図） 広口壺221～229、長頸壺211～214、壺蓋217、鉢232、高杯脚部218～220、甕215・216・230などがみられる。

広口壺の口縁拡張部には、円形浮紋・擬凹線・刺突列点・波状紋などが施されている。無紋様のものもある。胴部231は腰が低く張り出した第Ⅳ様式に通有の器形をとどめている。長頸壺には、直立する長い口縁部をもつもの214、頸胴部境にヘラ刺突列点がめぐるもの213が含まれている。

甕は胴部内面にケズリを行う特徴がみとめられる。このうち230は灰白色を呈し、砂粒を多く含む非河内産。鉢232は、外反する口縁部の外側に半円形の把手を貼り付けた第Ⅴ様式初頭に特有のものである。高杯脚部には脚柱内面にケズリと円板充填がみとめられる。

このほか各地区でサヌカイト片が出土したが、表面が風化したものも含まれ、すべてが上記した弥生土器に伴うものかどうか判断し難い（図版43）。



第17图 D地区包含層出土弥生土器実測図(1/4) 広口壺・長頸壺・蓋・鉢・甕・脚部

3 歴史時代の遺構と遺物

1) 奈良・平安時代の遺構と遺物

B2地区において、1.2m×0.9mの土坑内に人頭大の自然石による「コ」の字形の囲いをつくった石組遺構が検出された(図版14-2)。石組内に灰や炭混じりの焼土が詰まっており、そのなかから完形の土師器埴273～275と杯238が出土した。人骨は出土しなかったが、火葬施設ではないかと考えられる。出土した土師器埴3個体は、いずれも小型尖底の球形胴にゆるく外反する口頸部が付き、頸胴部境を強くヨコナデする特徴を有し、平安時代初めの土器と考えられるものである。このほかにB地区包含層より、奈良時代の杯390が出土している。総じて奈良・平安時代の遺物の出土はごく僅かである。

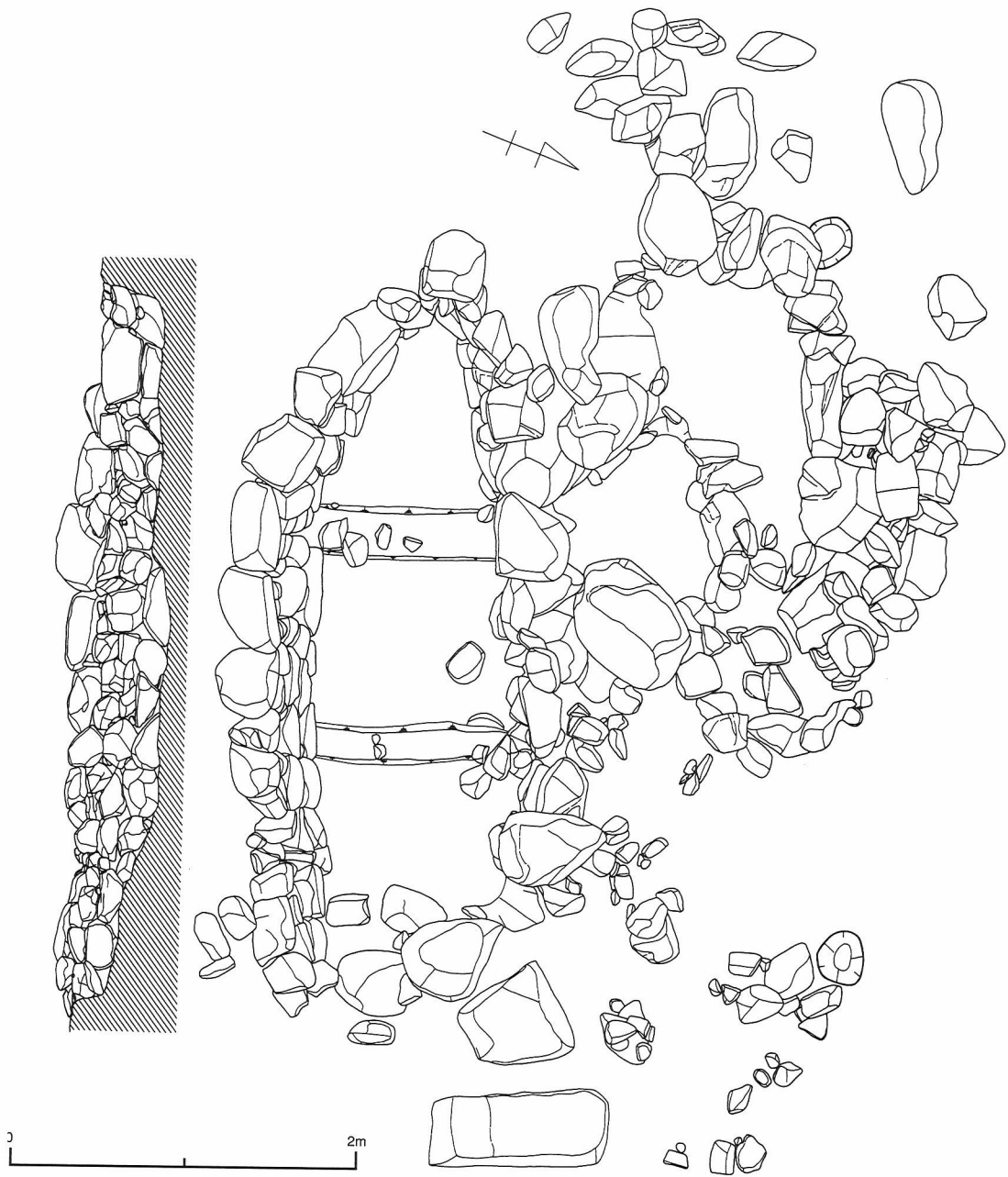
2) 鎌倉～室町時代の遺構と遺物

建物跡 各地区より、掘立柱建物の柱穴多数が検出された。礎石や基壇は未検出であり、また瓦も少数が出土しただけである。このため本調査地の建物の大半は板葺きや茅葺きの掘立柱建物であったと推定される。掘立柱建物は、柱穴内出土土器により12世紀末～14世紀後半に何度も建て替えながら存在したとみられる。しかしながら、遺構面が15世紀頃に一度整地され、また後世の棚田造成時に各整地面の東半部が再び削平されたとみられることなどから、建物プランが復原できるものはすくない。建て替えを含めて、D1地区で4棟、B2地区で3棟があげうる程度である。

ところで、D地区では西端部に南北方向の石垣が残り、D2地区中央部にも東西方向の石垣がみとめられる。この二つの石垣によって囲まれた範囲のなかに後記する石組園池が位置している。石組園池を伴う建物は、石垣の範囲から石組園池を除いた空間の大きさよりみて、一辺10m以上のものであったと推定される。また建物プランが復原できる柱穴の一つが石組園池の下で検出されたことから、平面図上で園池の北側に復原できる掘立柱建物とは別のより規模の大きい建物が存在したと考えられる。この建物は掘立柱の柱穴が検出されないことから、礎石建物であった可能性がある。

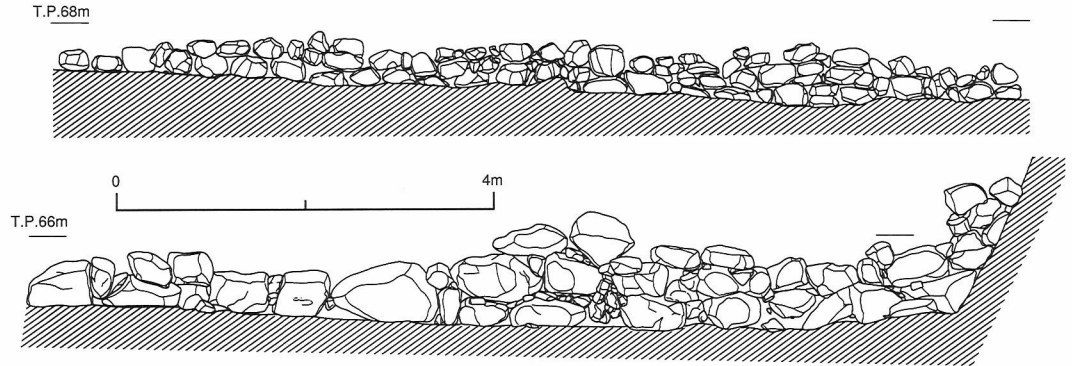
石組園池 建物1の南で検出された石組の池は、舟形を呈する長さ3.7m・幅1.4m・深さ0.8mの池とその北側に接続する長さ約2.5m・幅約1mの張出し部からなる。この石組池の底及び石壁の隙間には粘土が貼られ、水漏れを防いでいる。池底の形状は、舟形部分は中央がやや深い舟底形であるが、張出し部分については北半部が一段浅く、南半部との境は段をなす。この段は石で縁取りされている。石組の池の西側には、築山が設けられていたとみられる空間が存在する。おそらく石組の池のまわりに洲浜や築山を配していたと考えられるが、整地によって池以外にはその痕跡は残されていない。

この園池が築かれた時期については、張出し部分の池肩の石下の3間×3間の掘立柱建物の南西隅柱穴が検出され、この柱穴より14世紀中頃の土師器皿片が出土したことから、この建物より後であることは間違いなく、おそらく石垣の構築時期直後の15世紀頃と考えられる。池



第18図 石組園池実測図 (1/40)

底より出土した土師器小皿397や池内出土の瓦質摺鉢403の型式はこのことを示す資料となるものである。いっぽう、池の廃絶時期については、舟形部分の池埋土内より受口状口縁に沈線をもつ16世紀中頃の備前焼摺鉢401が出土したことから、16世紀後半に埋められたとみられる。ところで、この池の舟形部分の中央やや西の池底より、遺存状態のきわめて良好な銅鏡が一面出土した。鏡背一面に菊花・双雀・洲浜・岩・松などの精緻な紋様を鑄出した菊花双雀文鏡とされるもので、鏡面径9.45cm・背面径9.55cm・外縁厚0.65cmの円鏡である（第31図412）。池底



第19図 D1地区石垣1(下)・D2地区石垣3立面実測図(1/80)

に一部埋もれた状態で検出され、空気に触れていなかったため、表面に錆が生じなかったとみられ、出土当初は還元状態により灰色を呈していた。出土後は表面が灰色からしだいに銅鏡特有の緑がかった色調に変化したが、鏡面以外は赤銅色の色調がそのまま保たれている。分析は行っていないが、青銅というよりも純銅にちかい材質と思われる。和鏡に詳しい大阪市立博物館学芸員前田洋子氏の教示によれば、この鏡は鏡背一杯に紋様を施し、鈕にも花芯文様を描くこと、鏡面の厚さや縁の高さと形状などの特徴により、鎌倉時代後期の作と考えられるものである。また、和鏡の所有は一代かざりが普通であり、所有者が亡くなれば社寺に奉納されるか墓に副葬されることが多く、出羽国羽黒山鏡池出土の銅鏡のように池底からの出土例も少なくないとの教示も得た。羽黒山と同じく、今回の出土例も水にかかわる願いなどを込めて池の構築時かまたは水を張ったのちに池に沈められたのであろう。いずれにしてもその時期は、池の構築時期よりみて鏡の製作後50年以上は経過した段階であったと考えられる。

このほか、舟形部分の池内から他に瓦質の摺鉢403が出土し、張出し部分の池内から土師器小皿399・備前焼摺鉢底部402・小壺400などが出土し、張出し部分の縁石の脇から土師器小皿398が出土した。

石垣 南北方向の石垣がD地区西端で2列検出された。最も残りの良い石垣1は、0.3～1mの自然石を用いて西側に面を揃えた石積みが高さ1mほど残されている。この石積みは整地面の高さよりみて高さ2m前後は存在したと思われる。石垣1は、D地区南端から北に約17m程つづき、その先は石が抜き取られて姿を消している。いっぽう、石垣1の裏側には、一部並行する別の石垣があり(石垣2)、さらに北にのびている。この二つの石垣は新旧の関係にあって、西側の石垣1の方が新しいことを示すものと考えられる。石垣1の築かれた時期は、裏込め出土土器より15世紀頃とみられ、石垣2はこれより古いものであるが出土土器により時期差を判別することはできなかった。南北方向の石垣としては、このほかにA地区西端に石垣の残欠とみられる石2個が検出された(石垣5)。このことから、4段の整地面の西側にはそれぞれ南北方向の石垣が存在したことが伺われる。

石垣1の裏込めからは、土師器小皿380～382・385～387、片口389、摺鉢394、石鍋392、羽釜373～375などが出土し、石垣5裏込めからは瓦器椀239～241、土師器皿263～266、備前焼甕

268、青磁碗272、羽釜270などが出土した。

東西方向の石垣は、D 2 地区において2列検出された。このうち残りの良い南側の石垣3は0.2~0.4mの比較的小さい自然石を使用し、東から西に緩やかに下降する斜面に1~5段の石積みを行って石垣上面が水平となるよう築かれている。この石垣の規模は、残存状態で東西に約10m、高さは西端で0.7mを測る。この石垣は北側の面を揃えていることや石垣北面に沿って排水溝とみられる溝がはしることなどから、石垣3より南に平坦な整地地面を造成するために築かれたものと考えられる。石垣3の北約6mに平行して築かれた石垣4は、石積みは崩れているが南面するものである。この石垣は、石垣3とは対面する格好で、石垣以北に水平な整地地面を造成する目的で築かれたものと考えられる。これら二つの石垣に挟まれた幅約6mの空間は遺構がみとめられないことから、おそらく道であったと思われる。石垣の築かれた時期は、石垣裏側の整地土および石垣前面の排水溝内より出土した土器の型式より、前記した石垣1と同じく15世紀頃であろう。

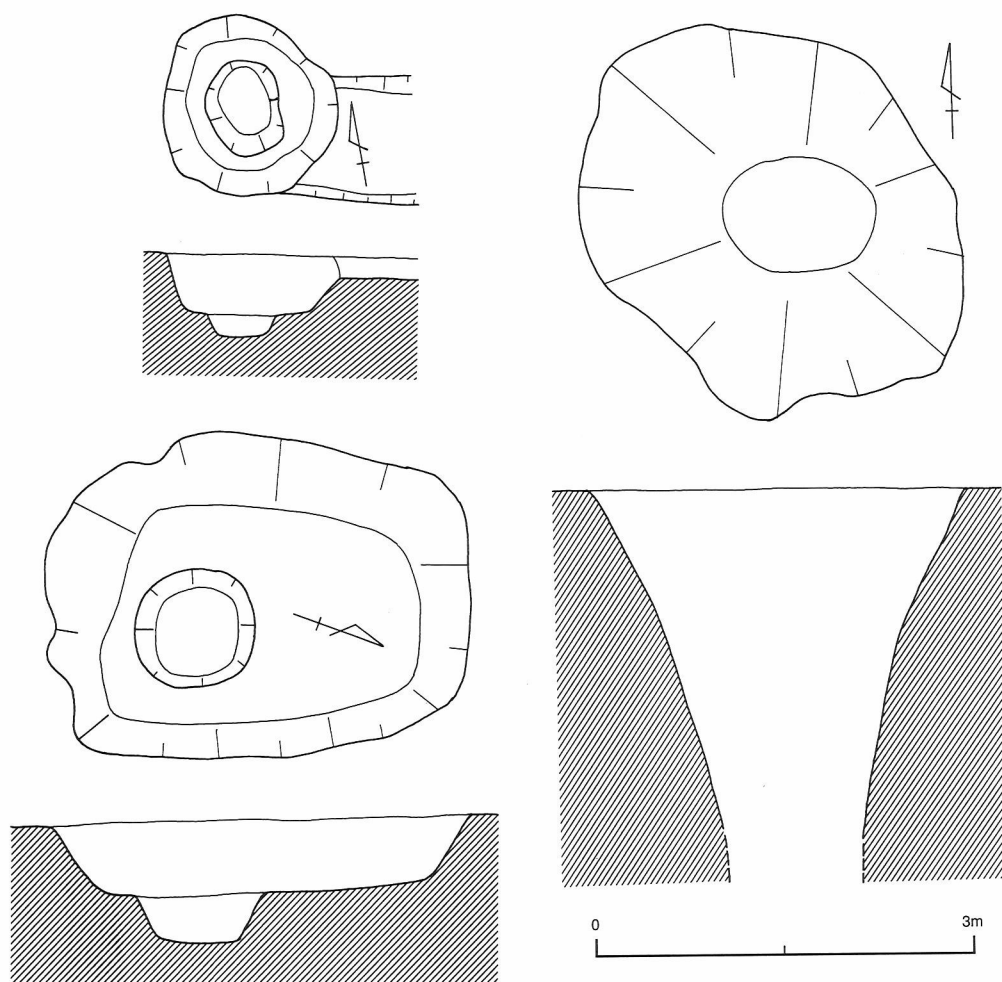
石垣3北側の溝より土師器皿378・379・383~385、羽釜376、火舎395などが出土し、石垣4南側の溝より常滑焼大甕377、石鍋391が出土した。

このほか、B 2 地区では0.3m程の自然石を用いて西側の面を揃えた石列が検出された。この石列は南北方向に約3m残存していただけであるが、前記した石垣同様、緩やかな傾斜地に小規模な平坦面を造り出すためのものであろう。

石敷きの道 C 1 地区南部において、地山層が北から南に緩やかに下降し、東西方向の浅い谷状を呈する地形が検出され、この谷に堆積した粘土層の上に小石を敷いて幅約2mの道とした遺構が検出された。道の両側は0.3~0.4mの自然石を並べて縁石としている。道とみられる部分は東西に約4mを測り、東はB地区の崖面で行き止まり、西は侵蝕により石が流失しているがおそらく石段によってD地区と結ばれていたものと思われる。石敷きの道が敷設された時期は、敷石下面より出土した土器により15世紀頃と考えられる。敷石下面からは羽釜293、東播系甕297、備前焼摺鉢302、瓦質摺鉢306・308などが出土した。

井戸・水溜め穴 井戸あるいは井戸状を呈する円形土坑は合計4基検出された。このうちB 1 地区に所在する井戸1は、直径1.4m、二段掘りで深さ0. mを測る。井戸としては浅く、湧水もすくないため、井戸よりも水溜め穴の可能性が高い。この穴に向かって東からのびる幅1.1mの溝より水を引いて貯えたと考えられる。遺構内からは年代を決定できる土器は出土しなかった。

C 2 地区では、上面が3.5×3mの楕円形を呈し、深さ3m以上の井戸2が検出された。井筒内は地山層が露出し、井戸枠が存在した痕跡は残されていないが、あるいは枠材が転用のため抜き取られたのかもしれない。湧水により壁面崩落の危険があるため、この井戸の底は確認できなかった。井戸の使用された時期は、井戸内埋土より出土した瓦器碗と土師器小皿の型式により14世紀後半~15世紀頃とみられる。井戸2からは土師器皿277~285、瓦器碗288~290、ミニチュア壺286、ミニチュア羽釜291・292、羽釜294・295、東播系甕298・299、摺鉢303・



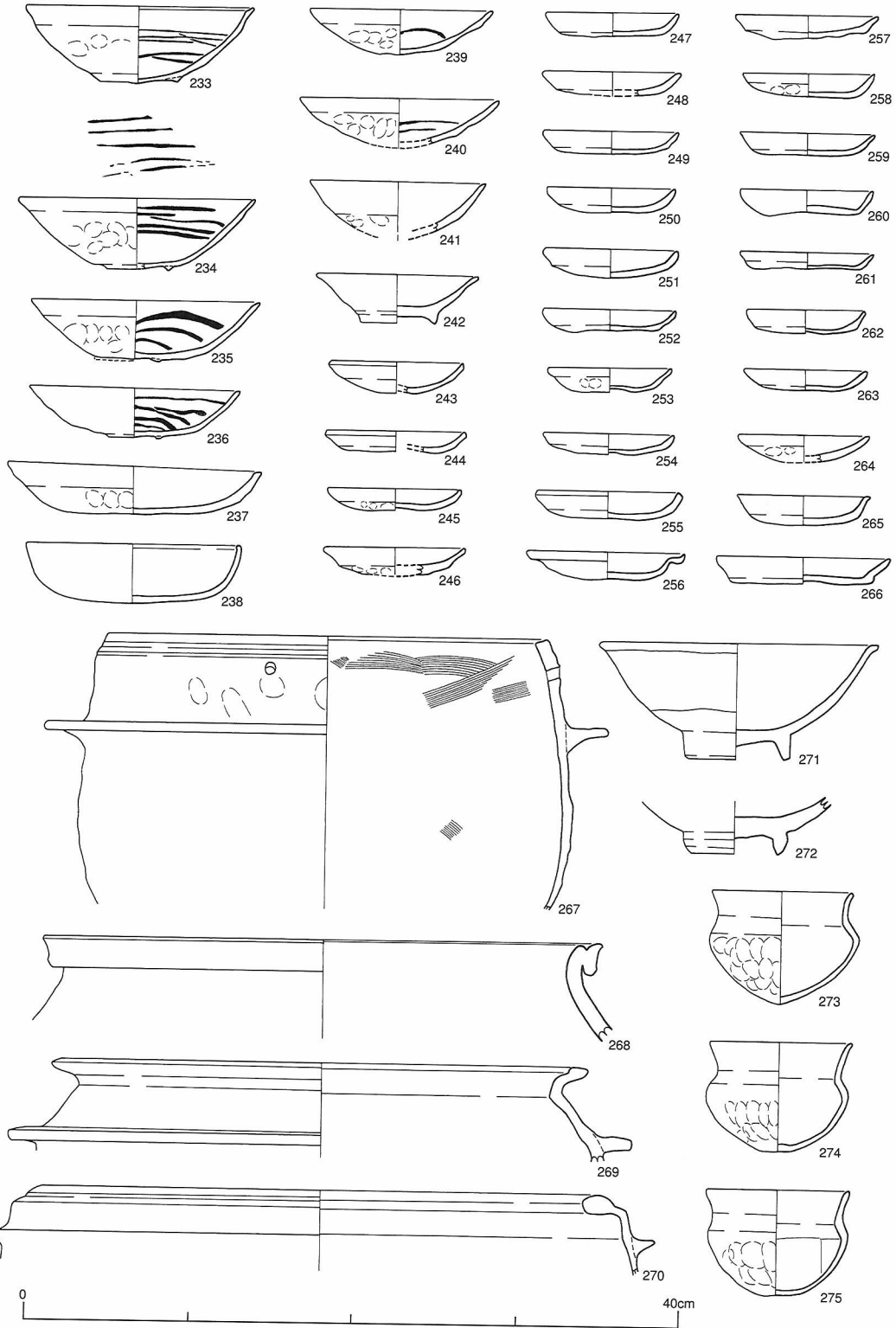
第20図 井戸1・井戸2・井戸3実測図(1/60)

304・307・309、火舎310などが出土した。

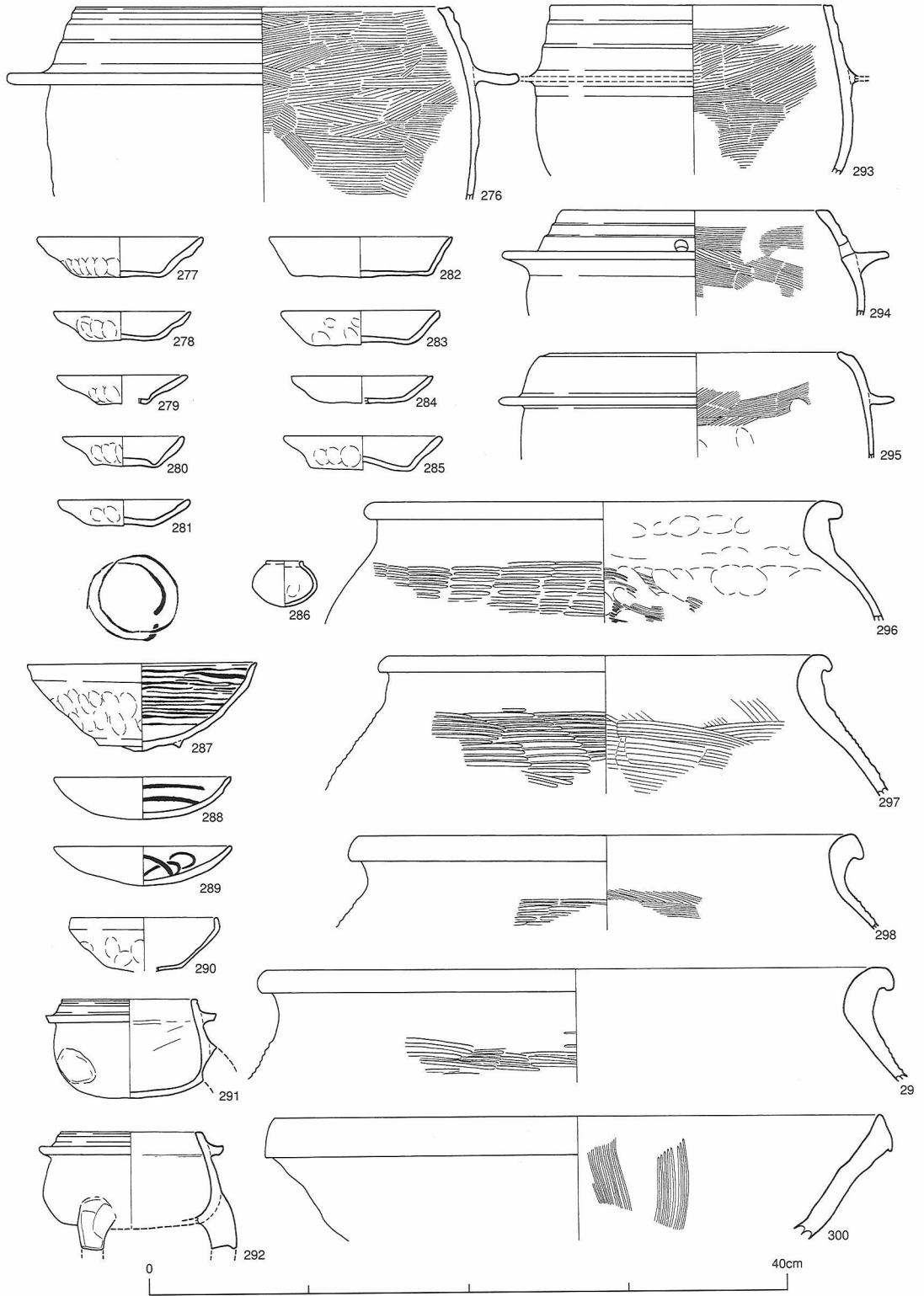
D2地区で検出された井戸3・4は共にC2地区の崖面下で検出された。南側の井戸3は3.4×2.5mの長方形の掘方の下面より直径1mの井筒部分が掘り込れており、掘方上面より底までの深さは約1mを測る。深さはあまりないが底より湧水がみられるため井戸であろう。この井戸も井戸枠は残されていなかった。井戸の井筒内および掘方内より完形多数を含む多量の瓦器・土師器等の土器が出土した。出土土器の型式は13世紀前半～14世紀中頃の幅をもつ。100年もの使用期間は考えにくいことから、13世紀前半に廃絶された井戸とみなしたい。井戸3の井筒部分および掘方からは瓦器椀312～330、白磁碗335、瓦器皿370、土師器皿350～358、羽釜337・339～341、捏鉢343などが出土した。

井戸4は直径2.3m・深さ3m以上を測る。井戸2と同じく井戸枠は存在せず、湧水のため底まで発掘できなかった。井戸埋土より瓦器碗334、土師器小皿364が出土した。井戸の使用された時期は、14世紀中頃～15世紀初めとみられる。

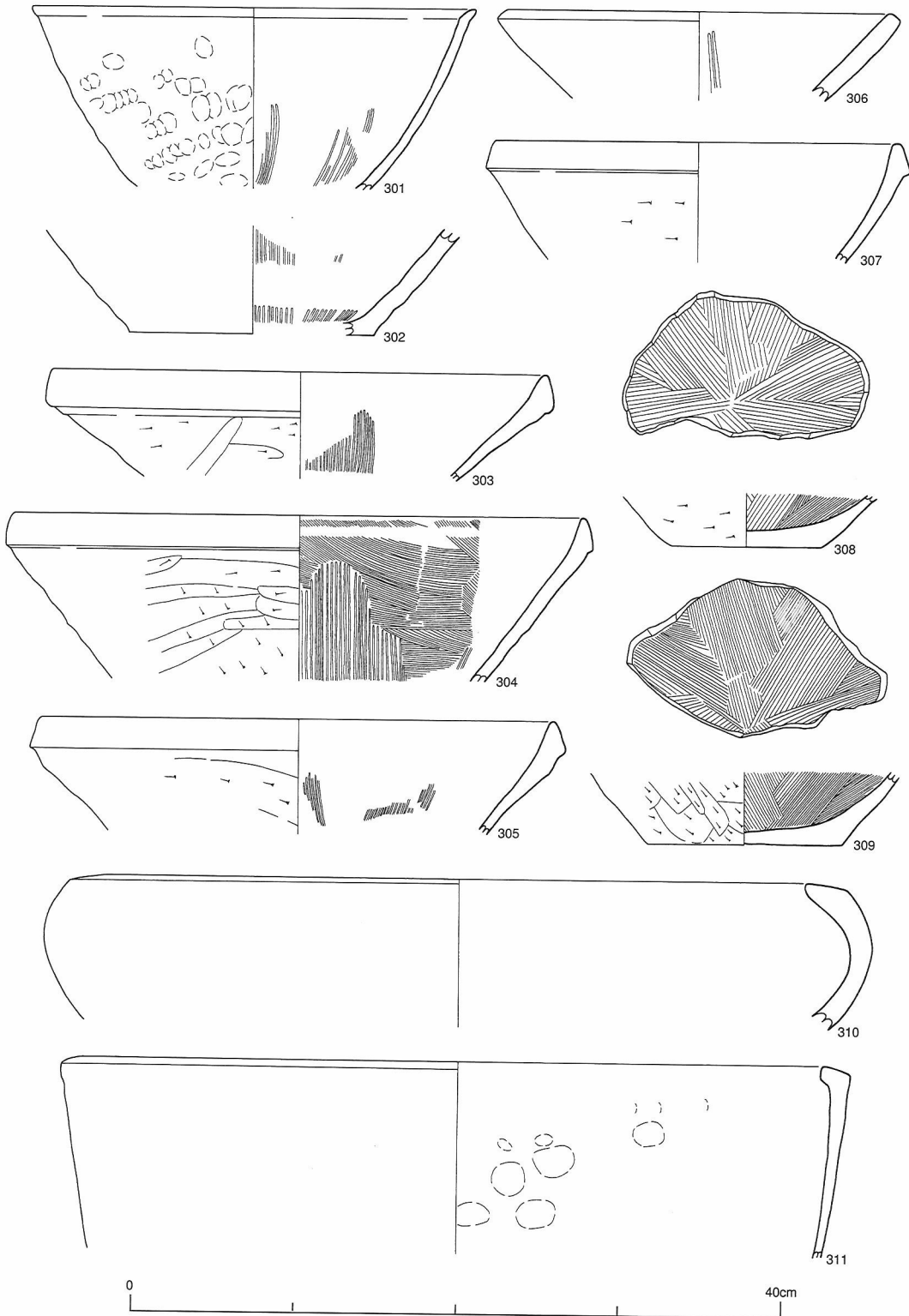
その他の遺構 各地区より円形や方形あるいは不整形の土坑が多数検出された。これらの



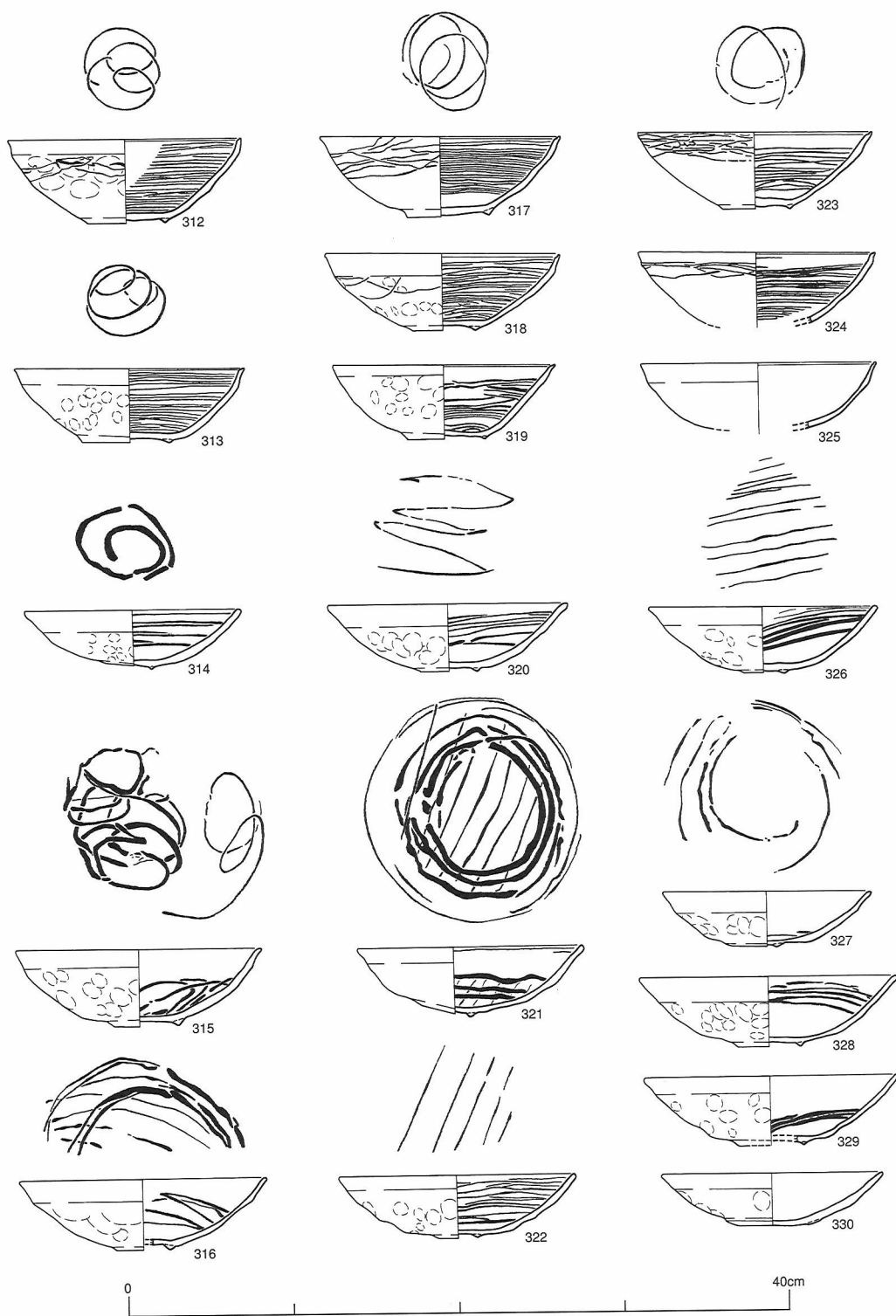
第21図 B地区出土土器実測図(1/4) 233~236・239~241瓦器椀・238土師器杯、237・243~266土師器皿、267・269・270羽釜、268備前焼甕、271白磁碗、272青磁碗、273~275土師器埴(233・234・243~254・269溝1、239~241・263~266・268・270・272石垣5裏込め、238・273~275石組火葬施設)



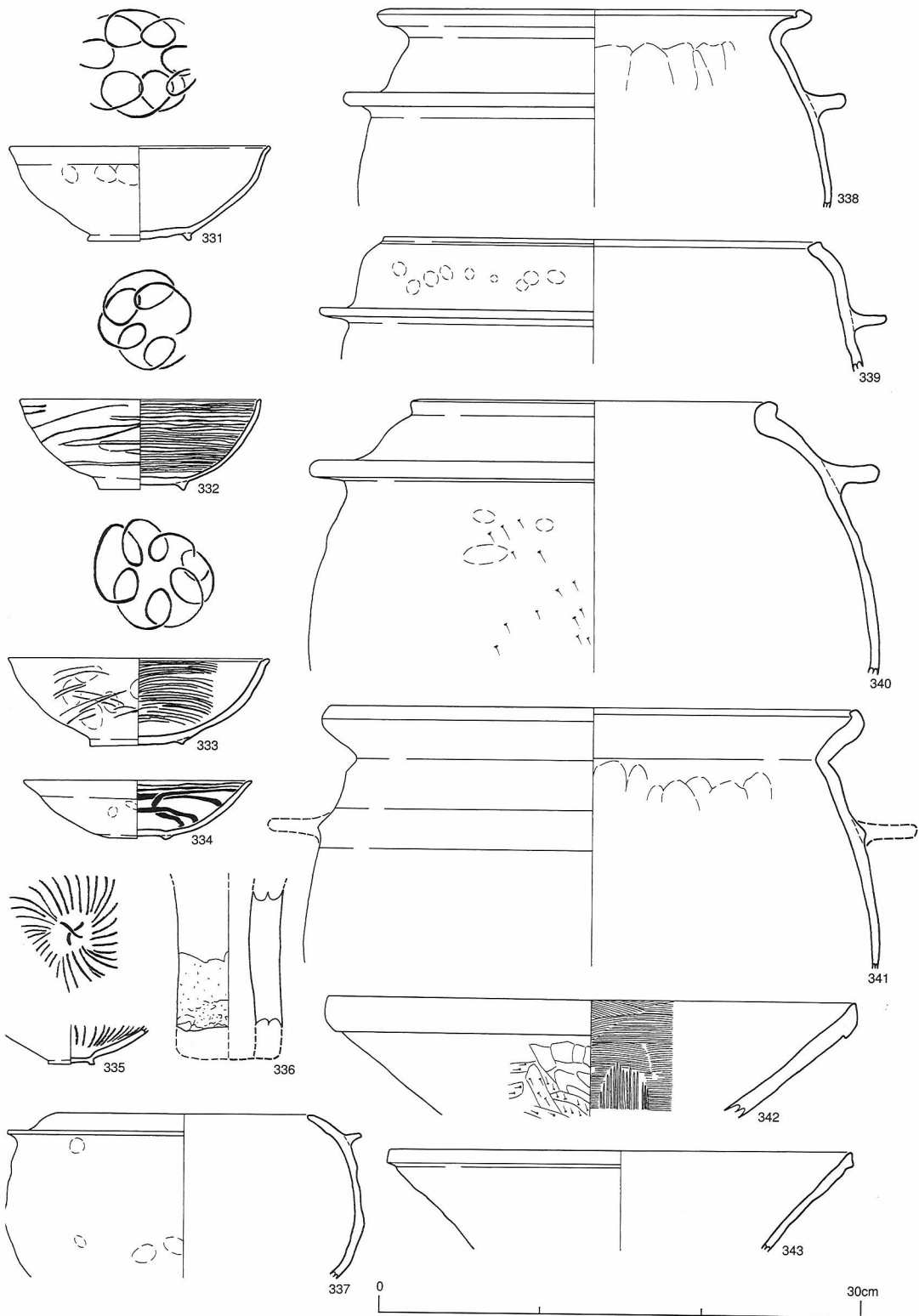
第22図 C地区出土土器実測図(1/4) 276・293~295羽釜、277~285土師器皿、286ミニチュア壺、287~290瓦器椀、291・292ミニチュア足釜、296~299東播系甕、300備前焼摺鉢(276~286・288~292・294・295・298・299井戸2、287溝2、293・297石敷きの道、296・300溝状落ち込み)



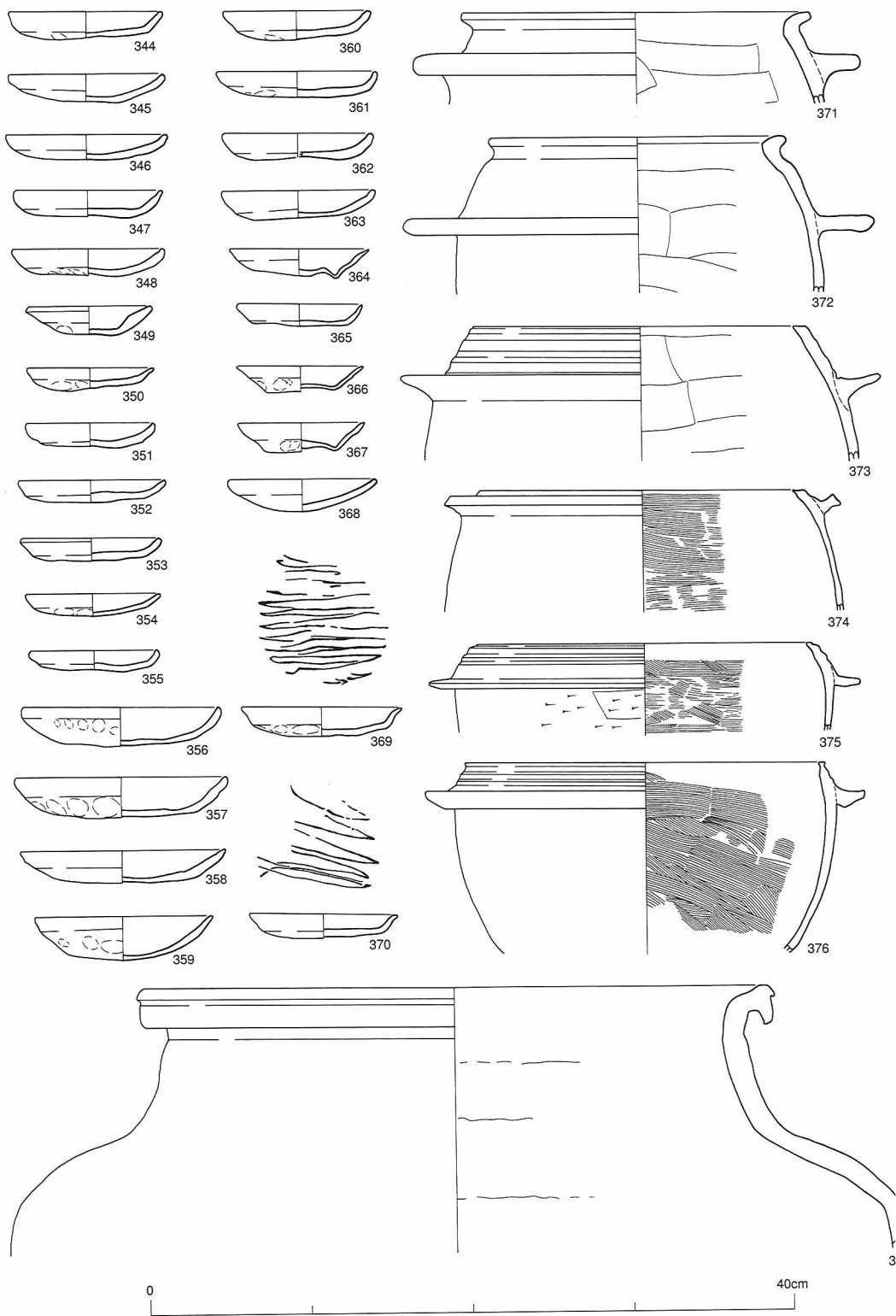
第23図 C地区出土土器実測図(1/4) 301・303~309瓦質摺鉢、302備前焼摺鉢、310・311火舎
 (301・305・311溝状落ち込み、302・306・308石敷きの道、303・304・307・309・310井戸2)



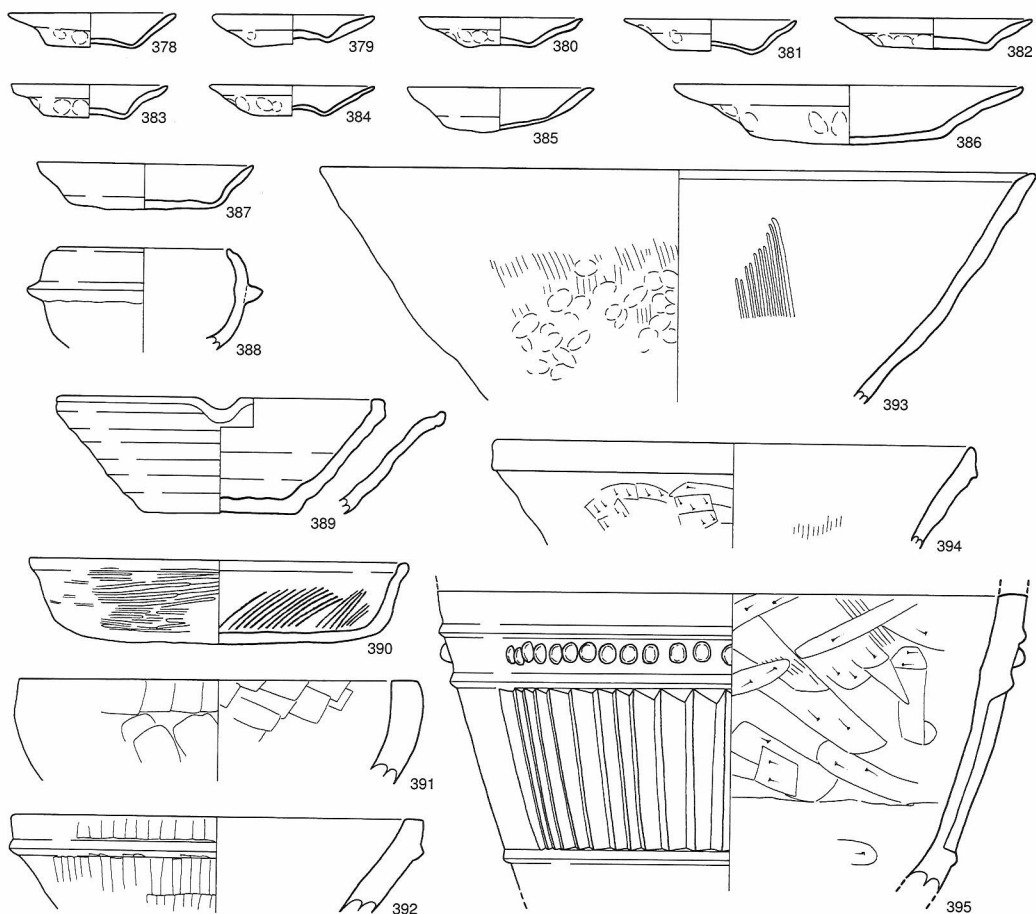
第24图 D地区出土土器实测图(1/4) 312~330瓦器碗(井戸3)



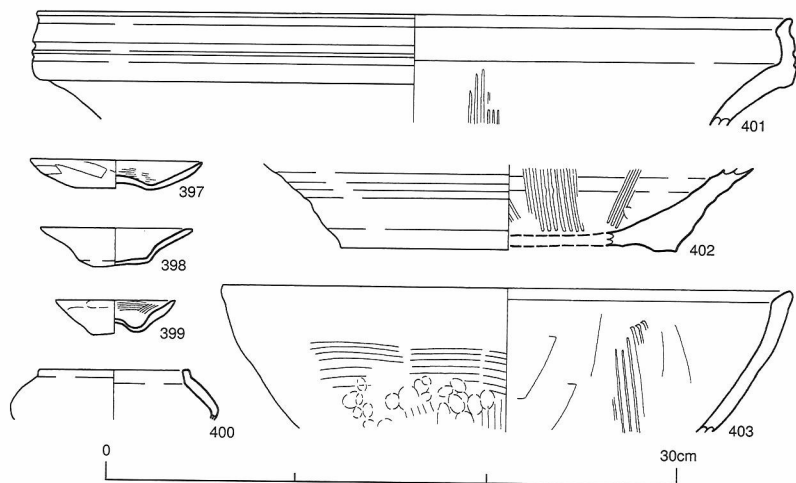
第25图 D地区出土土器实测图(1/4) 331~334瓦器碗、335白磁、336鞆羽口、337~341羽釜、342・343摺鉢(331~333・338土坑14、334井戸4、335・337・339~341・343井戸3、336土坑10、342土坑13)



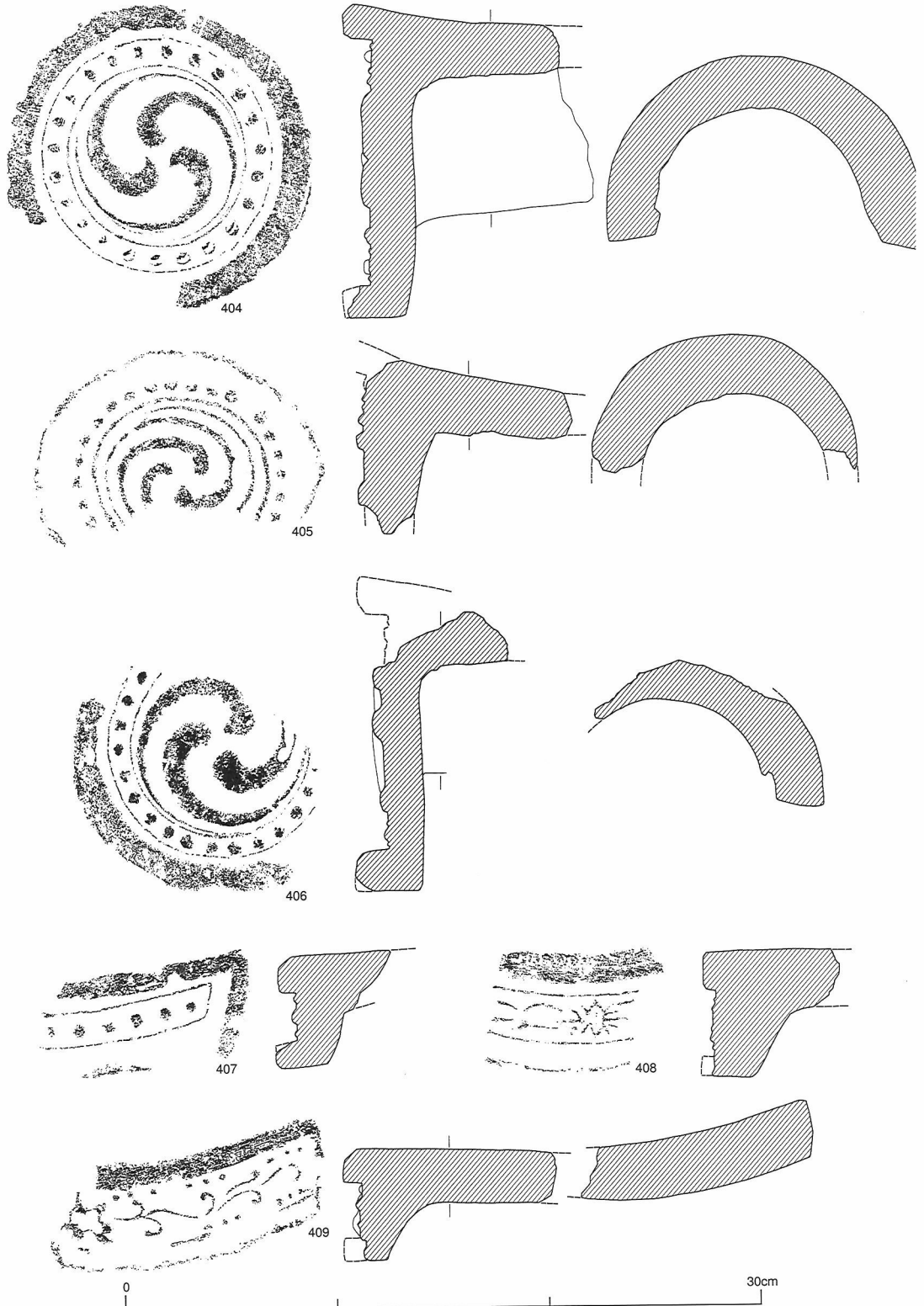
第26図 D地区出土土器実測図(1/4) 344~358・360~368土師器皿、369・370瓦器皿、371~376羽釜、377常滑焼甕(344~348・360~363土坑14、349土坑10、350~358・370井戸3、364井戸4、365~369土坑15、359ピット26、371土坑13、372ピット27、373~375石垣1裏込め、376石垣3排水溝、377石垣4下層溝)



第27図 D地区出土土器実測図(1/4) 378~387土師器皿、388ミニチュア羽釜、389片口、390土師器杯、391・392石鍋、393・394摺鉢、395火舎(378・379・383・384・385・385・395石垣3排水溝、380~382・385~387・389・392・394石垣1・2裏込め、388土坑12、391石垣4下層溝、393土坑13)



第28図 D地区石組園池出土土器実測図(1/4) 397~399土師器皿、400瓦質壺、401・402備前烧摺鉢、403瓦質摺鉢



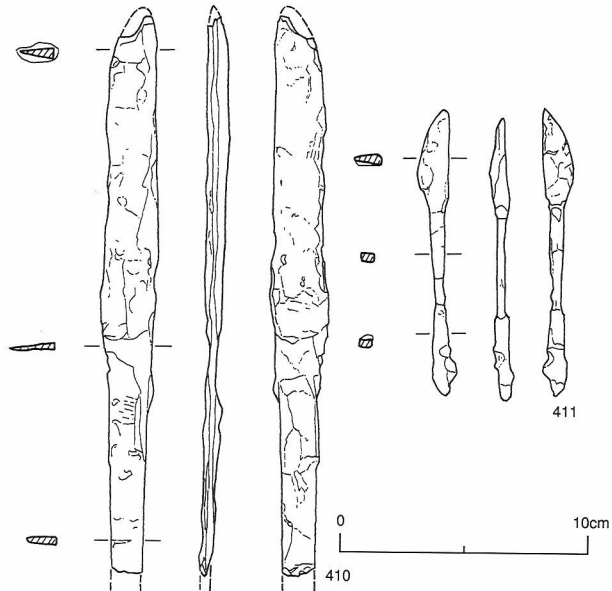
第29图 軒丸瓦・軒平瓦拓影 (1/3)

性格は不明であるが、D 1 地区の土坑のなかに12世紀後半の瓦器椀と土師器小皿とともに鉄鏃411や韃羽口336が出土した。坑内に焼土が含まれることから、鍛冶遺構と考えられる。

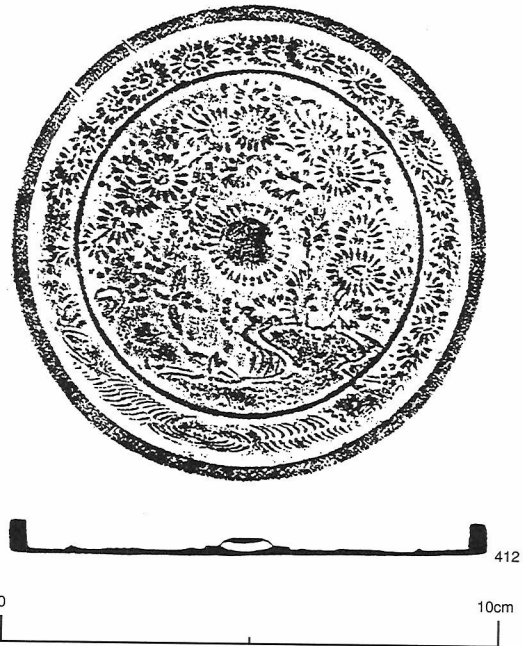
B 1 地区では幅約 2 m ・ 深さ0.3m ・ 長さ約 9 m を測る溝状の落ち込みが検出された。そのなかから瓦器椀233・234、瓦器小皿246・259、土師器小皿243～245・247～254・258・260～262、羽釜269など遺物多数が出土した。

C 1 地区では、石敷きの道の北側に平行する幅3.2m ・ 深さ0.3mを測る溝状の落ち込みが検出された。そのなかから東播系甕296、備前焼摺鉢300、瓦質の摺鉢301・305、火舎311などが出土した。

このほかに、各地区の包含層より、軒丸瓦404～406、軒平瓦407～409、刀子410、銭貨414～422などが出土した。軒丸瓦404は中央に右廻りの三巴文を配し、外側に2条の圏線を廻らせ、圏線間に連珠を施す。405は左廻りの三巴文の外側に1条の圏線と連珠を廻らせ、406は左廻りの三巴文の廻りに2条の圏線と連珠を廻らす。いずれも丸瓦凸面はケズリ、凹面はナデで仕上げ。407は連珠文軒平瓦。段顎で界線内に連珠文を配する。408・409は唐草文軒平瓦。408は界線内に唐草文を配し、409は唐草文の廻りに連珠を配す。共に段顎。銭貨は、嘉祐通宝414、皇宋通宝415、至道元宝416、元祐通宝417、紹熙元宝419、政和通宝420、元豊通宝421・422、などがある。いずれも北宋銭。418は銭種不明。



第30図 鉄器実測図 (1/3)



第31図 菊花双雀文鏡拓影 (2/3)



第32図 第5次調査地平面図 (1/200) 朱線は弥生時代と確認できる遺構

Ⅲ まとめ

1 弥生時代の遺構と遺物について

第5次調査地内において弥生時代後期の竪穴住居跡が確実なものだけで7棟検出された。その多くは竪穴上部が削平され、1号住居跡は壁溝の一部、2号・5号・6号住居跡は竪穴東半部、7号住居跡は床面まで削られて炉穴と柱穴が残るのみである。また、竪穴上部の残りがよい3号・4号住居跡についても、中世に行われた籬壇状の整地により、竪穴西側は大きくえぐり取られて石垣が築かれている。このような状況から、本来この地に存在した竪穴住居のうちかなりの数が中世以後の整地によって失われたことが推定できる。岩滝山遺跡において、これまでに竪穴住居跡が検出された地点は、西は本調査地西端の標高65m、東は本調査地東方の標高100m付近、北は遺跡北部を東西にはしる谷筋を越えた北側の標高90mの尾根上にも拡がっている。南限は不明であるが弥生時代後期の岩滝山遺跡には後期初頭を中心とした短い期間におそらく数10棟の竪穴住居が存在したと考えられる。

今回検出された竪穴住居の平面形は、4号と7号が円形、1号と5号が隅丸の長方形または方形、2号・3号・6号が長方形または方形を呈する。このうち円形プランの4号住居跡出土土器には広口壺口縁端部の外下方への拡張、拡張部紋様の多様性、口縁内面の施紋、把手付鉢の出土、高杯口縁部の立ち上がりと脚裾部でわずかに広がる筒状脚の存在、棒状浮紋をもつ台付鉢の存在、甕胴部外面下半のケズリ、ドーナツ底の未普及などの特徴がみとめられ、第V様式の初頭=西ノ辻I地点出土土器併行期の資料と考えてよいものである。また、7号住居の炉穴からは丈高の胴部に短い直口の口頸部が付き、頸胴部境にヘラによる刻み目がめぐる短頸壺が出土しており、4号住居と同時期と考えられる。いっぽう、隅丸長方形または方形プランの1号住居からは擬凹線を密に施し、裾部の広がりやすくない器台、棒状浮紋をもつ台付鉢、円盤充填の脚台などが出土し、前記した4号・7号住居と同時期と考えられる。5号住居は時期を決定できる遺物が出土しなかったが、プランの類似する1号住居と大差ない時期と推定しておきたい。長方形または方形プランの6号住居からは甕口縁が水平にちかく、胴部にタタキメの痕がみられないことや、円盤充填の脚台を含むが、外反する高杯杯部口縁の特徴をみると第V様式前半の範疇で捉えうる。これに対して、同様な平面プランの3号住居からは、床面の柱穴内より出土した比較的細筋のタタキメをもつ小型甕が第V様式中頃から顕著となる型式であり、前記した住居よりも時期が降ると考えてよいものである。しだがついて、本調査で検出された住居跡の平面プランと時期の関係からは、円形プランと隅丸長方形または方形プランは第V様式初頭、長方形または方形は第V様式前半から中頃に営まれたことが知られる。

住居跡及び包含層から出土した土器には、第V様式初頭の特徴をみとめるものが多く、出土品大半はこの時期と考えられる。これを裏づけるものとして、住居跡出土土器で記述した特徴の他に、長頸壺の口頸部の長さや外反度の小さい器形、第IV様式の壺や甕の肩部にみられるへ

ラ先刺突列点の名残りともみられる列点の存在、前代に類例をみるグラス形土器206や算盤玉形体部の台付鉢179、腰が低く張った壺胴部231、第V様式初頭を特徴づける半円形把手を貼りつけた大型鉢や甕の胴内面のケズリ、脚台のなかに占める柱状の脚柱と内面ケズリの割合の高さ、器台や高杯脚部への擬凹線の多用など枚挙にいとわない。細筋タタキメをもつ小型甕110や二段に外反する脚裾部に細かい波状紋を密に施す高杯105など第V様式中頃以後の可能性のあるものも含まれるが、その数が少数であることも上記の推定が妥当とみる根拠となる。

岩滝山遺跡出土土器は、同様の立地環境にある山畑遺跡とともに生駒西麓産の土器胎土をもつものの割合が大ききこと、また他地域からの搬入品や非生駒西麓産の粘土を使用した土器との識別が容易なことも大きな特徴としてあげられる。今回出土した土器底部（脚柱部）622点のうち生駒西麓産は587点（94.4%）、他地域からの搬入品35点（5.6%）をかぞえる。これは山畑遺跡の土器底部（脚柱部）において90.6%が生駒西麓産、9.4%が他地域からの搬入品であるのと比較して、搬入品の比率は半分程度の数字である。器種別にみると、岩滝山遺跡出土の壺は口縁部221点のうち210点（95.0%）が生駒西麓産の胎土、11点（5.0%）が他地域からの搬入品。甕は口縁部213点のうち209点（98.1%）が生駒西麓産、4点（1.9%）が他地域からの搬入品。鉢または高杯杯部は口縁部162点のうち154点（95.1%）が生駒西麓産、8点（4.9%）が他地域からの搬入品。脚柱部171点のうち160点（93.6%）が生駒西麓産、11点（6.4%）が他地域からの搬入品である。器種別にみると、甕に生駒西麓産の割合が高いこと、他の器種では搬入率が5%前後でほぼ一定している。この傾向は山畑遺跡第15次遺跡第15調査出土土器と同様である。

以上のことから、岩滝山遺跡においては生駒西麓産土器の割合が高く、他地域の土器はあまり持ち込まれていないことが知られる。これは高地性集落という立地の特殊性よりもむしろ弥生時代後期初頭の生駒西麓地域全体が他地域と活発な交流を行う状況になかったことを示唆するとみられ、このことは同様な立地環境にある弥生中期の山畑遺跡において出土土器の1割程度が他地域からの搬入品である事実からも確かめることができる。また、土器胎土の特徴として、岩滝山遺跡出土土器は周辺の花崗岩起源の堆積土を素材とし、これに角閃石を含む閃緑石起源の砂粒を混和材として調合したと推察される。こうした混和材を採取地は、遺跡の近くでは北約500mの鳴川谷附近が候補地と考えられるが、本遺跡出土の西麓土器に含まれる角閃石の割合や他の有色鉱物の種類、色調の均質性などの特徴からは、原料となる粘土の採取地及び角閃石等の混和材の調合割合などを、一定の規範に基づいて行われたことが示唆される。生駒西麓の土器胎土は、弥生中期には簾状紋を施す壺・鉢などのように特定の器種・型式に角閃石の目立つ胎土が用いられ、また後の庄内式においては甕だけに角閃石を大量に混和材とする徹底した胎土管理が行われている。こうした土器様式と比較して第V様式の土器は、分割成形による土器生産を行うために、その基盤として器種・型式による胎土的差異をなくし全体として均質化したものといえよう。

2 歴史時代の遺構と遺物について

中世往生院に伴うとみられる遺構は、鎌倉・室町時代（13～15世紀）のものが中心であり、往生院創建前後の平安期の様子が伺われるものはすくない。わずかにB地区で検出された火葬施設とみられる石組遺構をあげうる程度であるが、こうした火葬施設の近隣に寺院が存在する例は客坊山遺跡群第2次発掘調査で平安時代の寺院地内で平安前期の火葬土坑と蔵骨器とが検出されていることから、本遺跡でも第5次調査地の近くに創建期の往生院の建物が存在する可能性はある。しかしながら、本調査において出土した瓦の量はすくないことや平安時代のものが全く含まれていないことなどから、創建期の建物の場所はすでに大阪府より河内往生院伝承地として指定されている現往生院の東方山中を中心とする可能性が高いと推定される。

今回検出された中世往生院関係の遺構としては、13～14世紀の掘立柱建物と井戸、15世紀の石垣・石組園池・石敷きの道などがあげられる。このうち13～14世紀の掘立柱の柱穴は東から西にむかって下降する地山上より掘られたものであって、石垣構築と同時に造成されたとみられる平坦面に伴う整地層の下層において検出されている。いっぽう、15世紀の遺構は斜面地の西側あるいは北側に石垣を築いて雛壇状に造成し、広い平坦面を造り出すという大規模な土木工事を伴うものである。さらに、舟形の池を中心におそらく築山も伴うとみられる石組園池を築き、石敷きの道によって建物群が結ばれるなど、景観がそれまでとは一変したことが知られ、また石垣をもつ広い平坦面上の建物はそれまでの掘立柱建物の他に礎石建物も出現したと推定される。このように、15世紀に行われた大工事によって中世往生院最盛期の本格的な伽藍が整備されたのである。文献にみえる往生院城はこれらを含む伽藍全体を指しているのかもしれない。ただし、本調査地におけるこの時期の建物は、瓦の出土量がすくないことから、板葺き屋根などが多くを占めていたものと思われる。

15世紀以後の往生院は、石組園池が16世紀後半に埋め戻され、出土遺物量も激減するなど、その隆盛は長くは続かず、江戸時代に再興されるまで寺勢は一時衰退したことが知られる。この衰退の原因となるのが河内全域を巻き込んだ畠山政長と義就の争いであり、『尋尊大僧正記』文明九年十月二日に「(中略) 畠山左衛門督政長者在京都公方御陣、手物遊佐河内守長直在若江城、仍連々合戦、誉田城、往生院城、客坊城合四ヶ所之内、客坊城は去月廿七日責落(中略)」との記事にみえる文明九年(1477)往生院城付近が巻き込まれた戦いと、その後の社会・政治状況の変化により、伽藍の維持が難しくなったことによると思われる。第3次調査で検出された建物土壇の焼土面の拡がりも、あるいはこの戦いの結果を示すものかも知れない。出土遺物で注目されるのは、石組園池内より出土した菊花双雀文鏡である。鏡出土状況の解釈については前記したように、所有者が亡くなるなどの理由により池底に沈められたと推定されるが、錆化せずに鏡背の精緻な文様まで鮮明な状態は出土鏡として驚異的な保存状態であり池に沈められて一度も空気に触れなかったことを示している。

このほか、瓦器碗において大和型と和泉型の割合をかぞえると、口縁部での比較では1853点のうち大和型515点(27.8%)に対し和泉型1338点(72.2%)で和泉型の方が多数を占めている。

これまでの東大阪市内の発掘調査では、平野部の若江遺跡では和泉型が圧倒的に多いのに対し、西麓の西ノ辻遺跡、神並遺跡、客坊山遺跡群などでは和泉型と大和型の割合が半分前後または大和型の方が多い傾向がみとめられる。今回の例は生駒西麓で最も南に位置し、平野部と生駒西麓北部との中間的な様相を示す資料となるものである。

圖 版



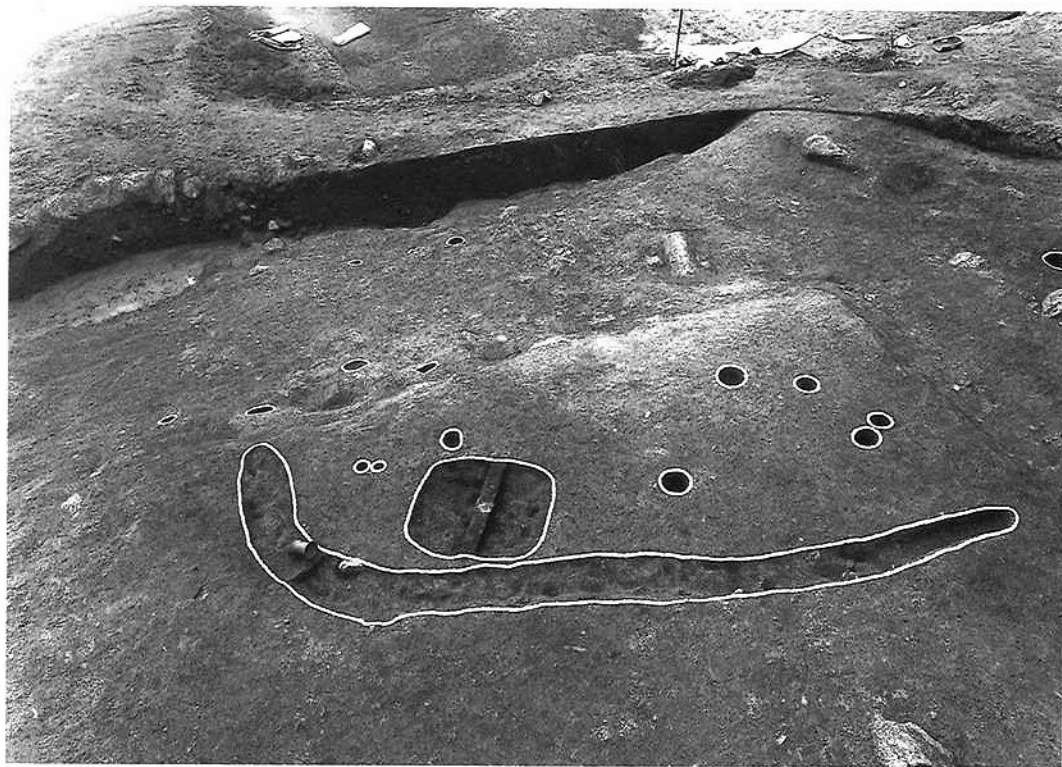
1 調査地南半部 (B1~D1地区) 全景 (東より)



2 調査地北半部 (B2~D2地区) 全景 (東より)



1 A地区の遺構（竪穴住居跡他）西より



2 同上（東より）



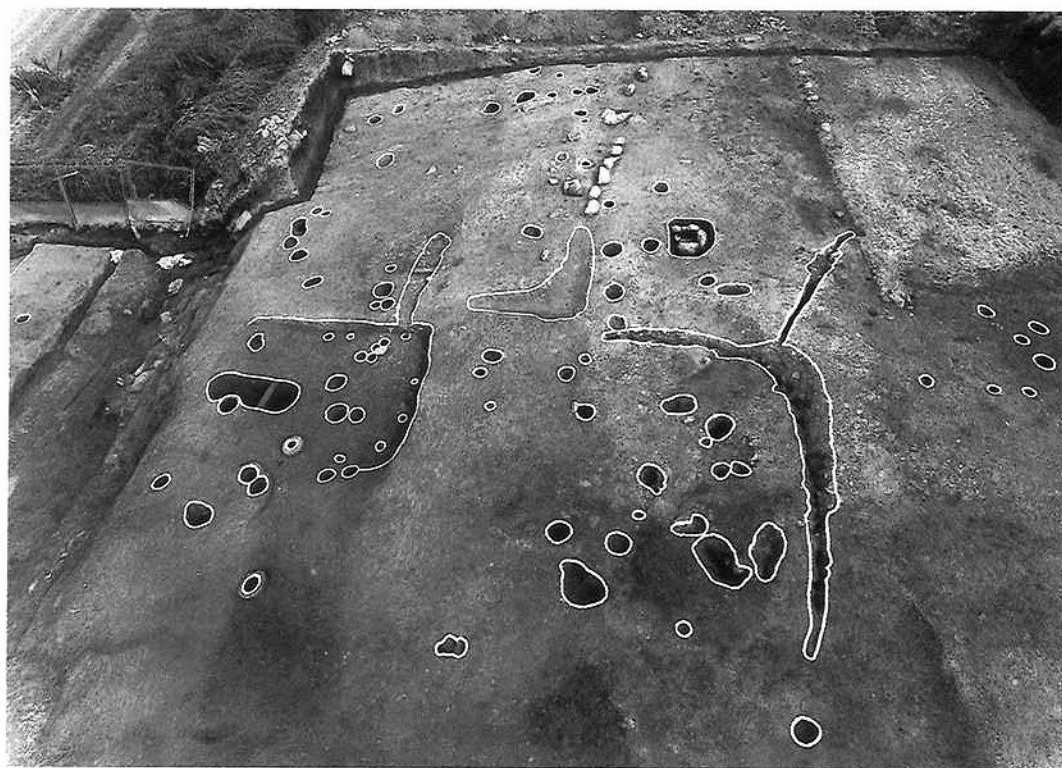
1 B1地区の遺構（東より）



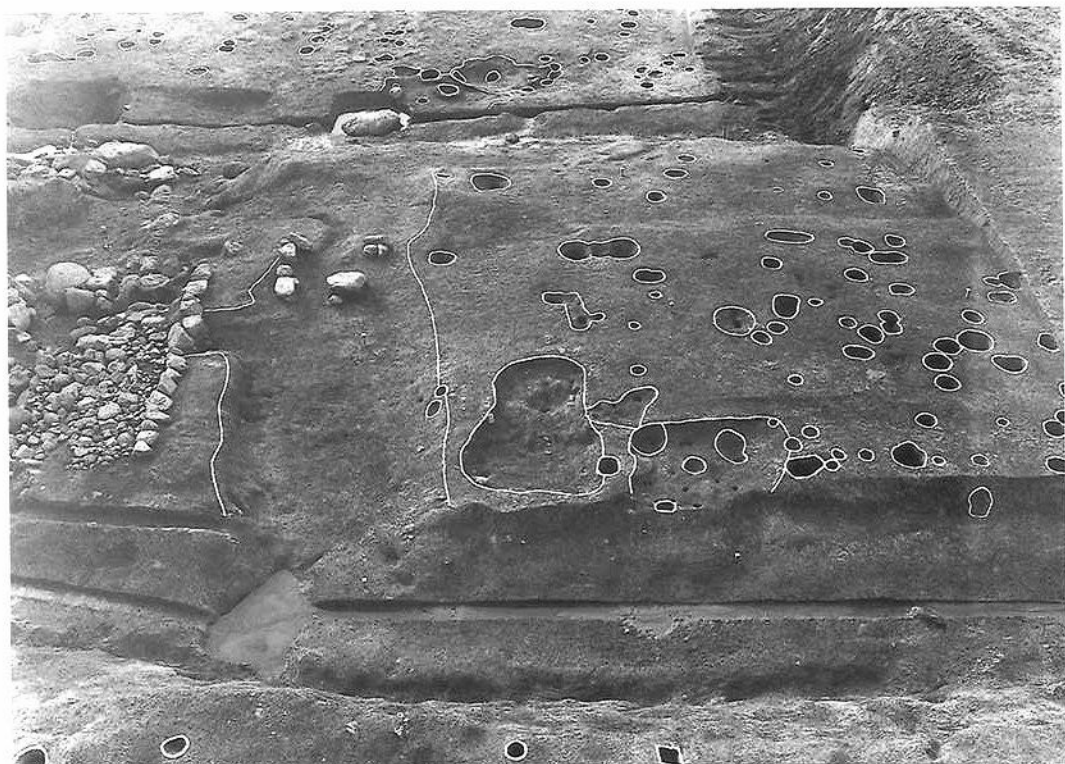
2 R1地区の遺構（北より）



1 B2地区の遺構（東より）



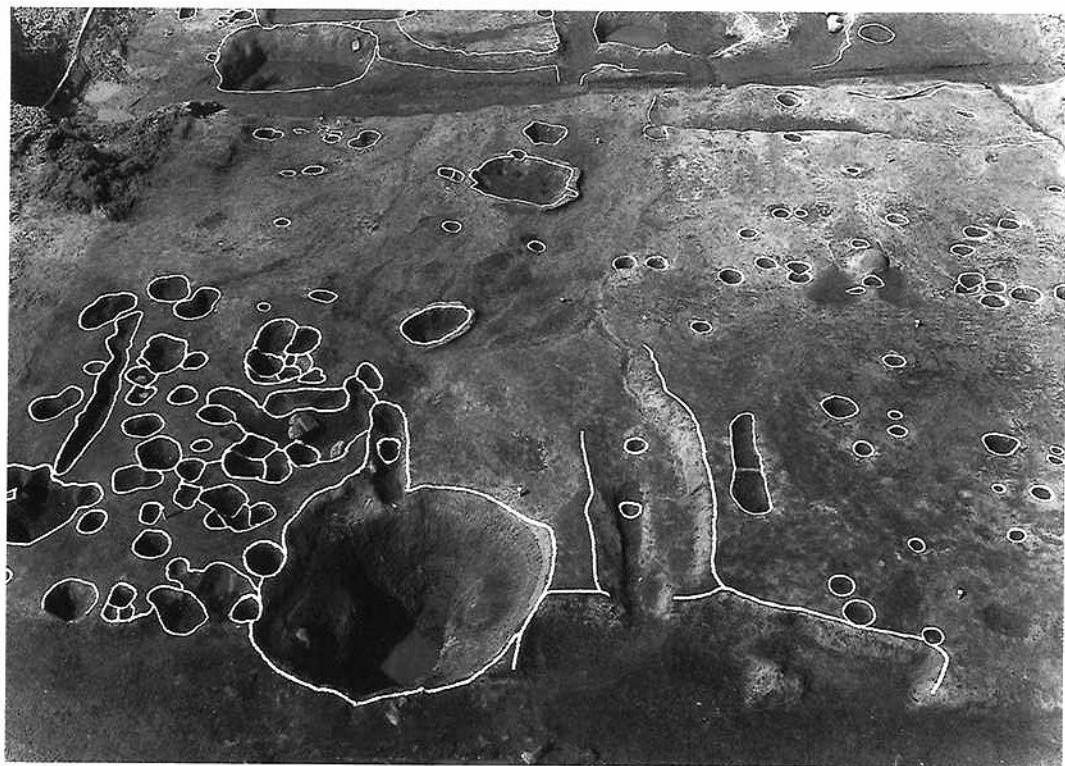
2 同 上（南より）



1 C1地区の遺構（東より）



2 同 上（北より）



1 C2地区の遺構（東より）



2 同上（南より）



1 D1地区の遺構（東より）



2 D1地区の遺構（北より）



1 D2地区の遺構（東より）



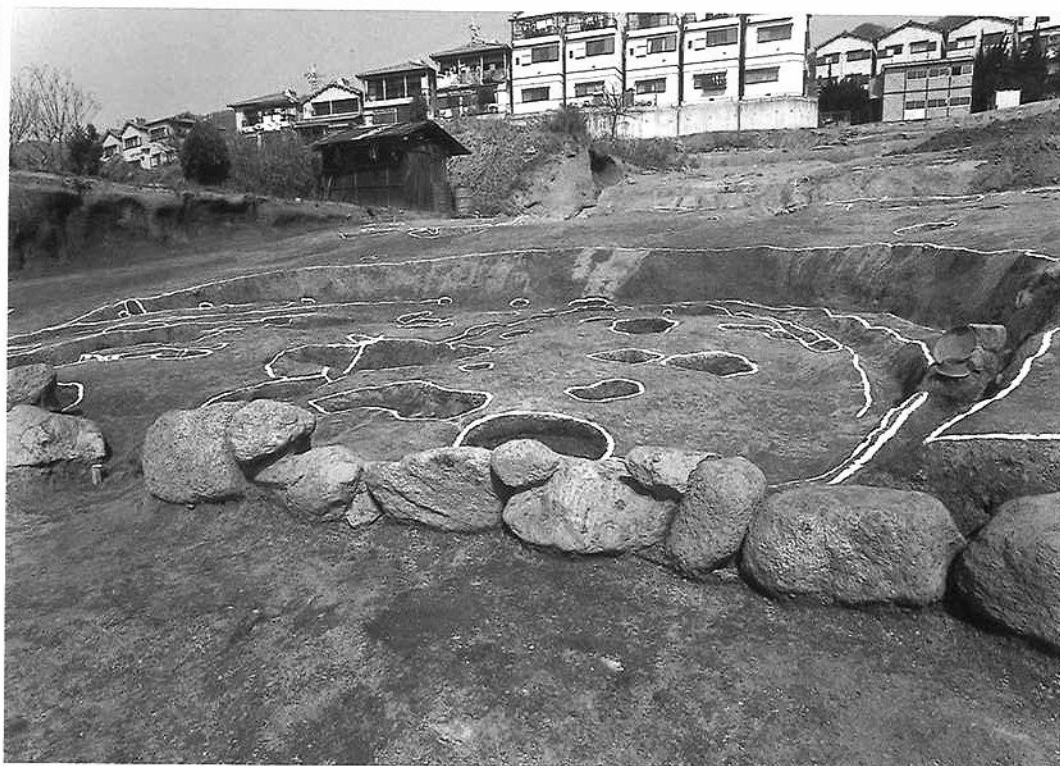
2 D2地区の石垣2（北より）



1 D2地区検出の4号竪穴住居跡（東より）



2 同 上（南より）



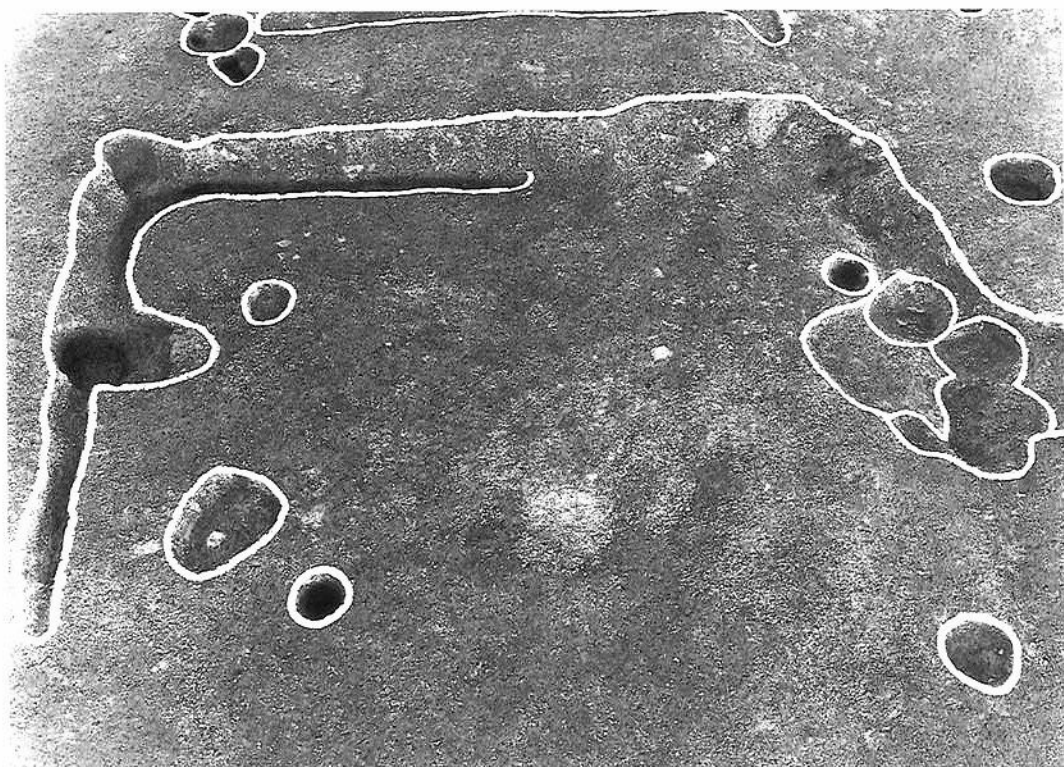
1 D2地区検出の4号竪穴住居跡(西より)



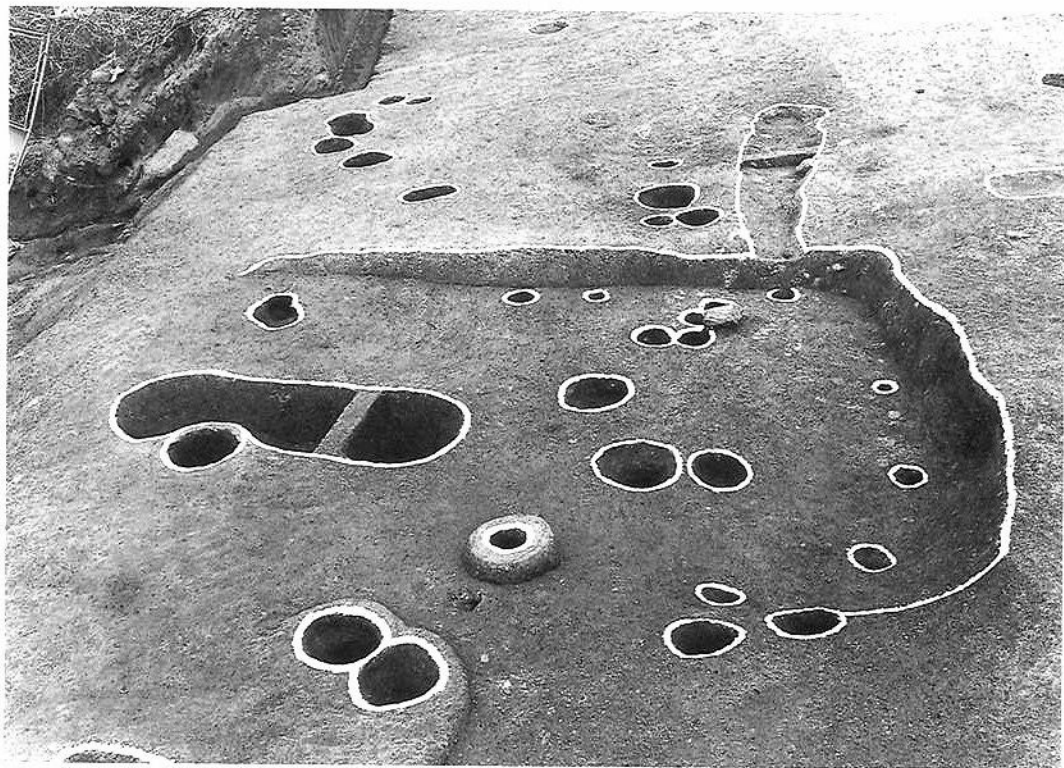
2 4号竪穴住居跡南壁沿い弥生土器出土状況



1 B2地区検出の5号竪穴住居跡（南より）



2 B1地区検出の2号竪穴住居跡（南より）



1 B2地区検出の6号竪穴住居跡（南より）



2 C2地区検出の3号竪穴住居跡（西より）



1 C2地区の井戸2 検出状況(東より)



2 C1地区の石敷の道(南より)



1 D2地区井戸3内遺物検出状況



2 B2地区の石組遺構



1 D1地区の圔池（北より）



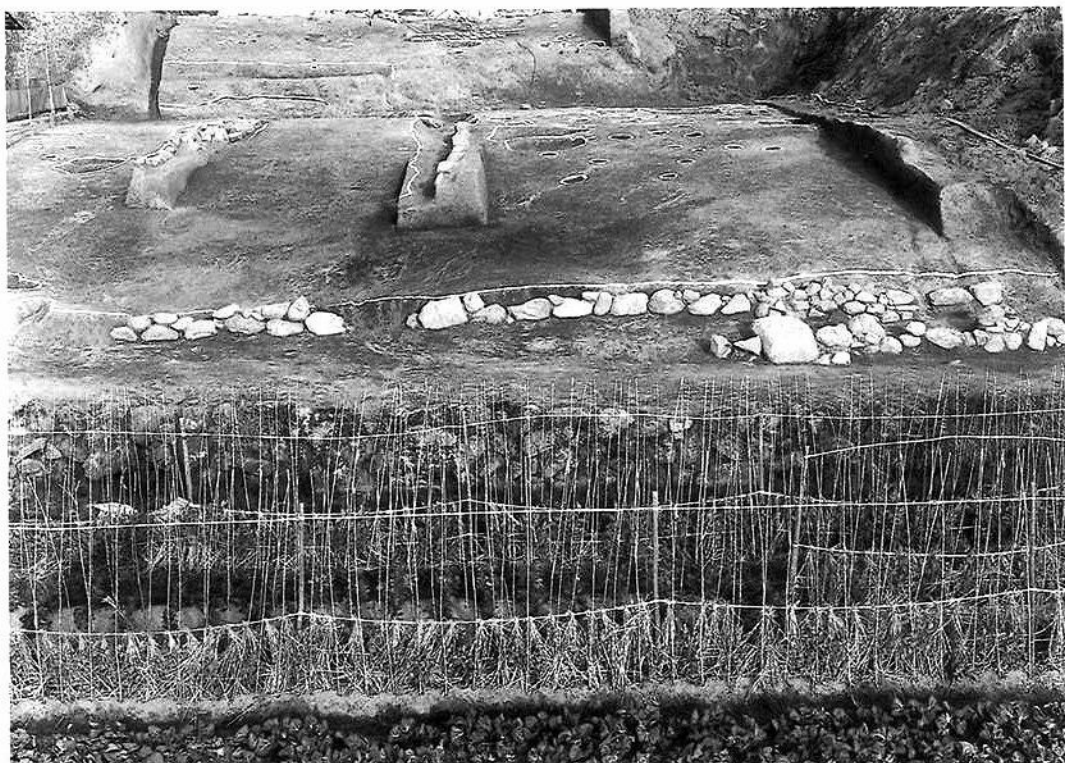
2 D1地区圔池内の銅鑄出土状況



1 D1地区の石垣1
(西より)



2 同上(北より)



1 D2地区の石垣1・2 (西より)



2 同 上 (南より)



11



45



35



42



48



51



25



63



88



89



76



75



85



93



64



106



139



105



110



143'



143



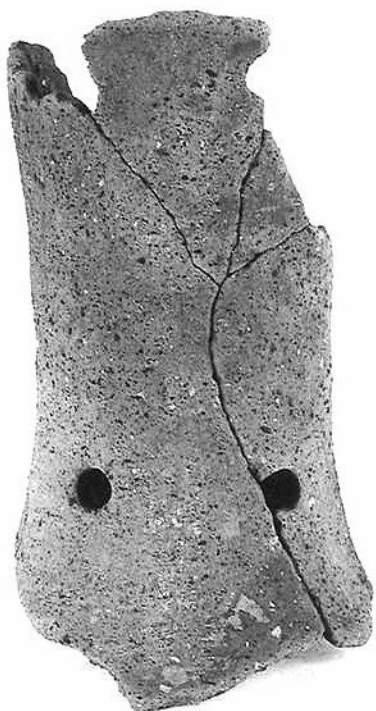
142



173



144



180



181



192



170



210



212



207



214



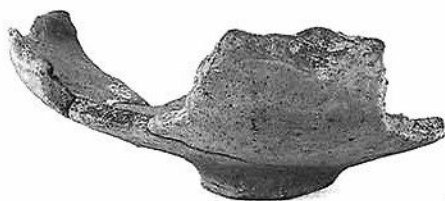
206



217



413



231



233



234



235



236



237



238



239



242



243



244



245



246



247



248



249



250



258



251



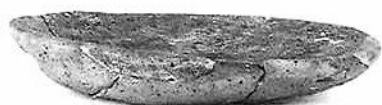
259



252



260



253



261



254



262



255



263



256



264



257



271



267



277



278



273



279



280



274



281



282



275



283



284



285



287



286



312



288



313



289



314



290



315



291



316



317



326



318



327



319



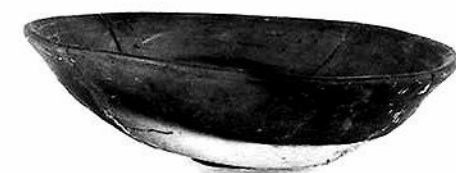
332



320



344



321



345



322



346



347



348



349



350



351



352



353



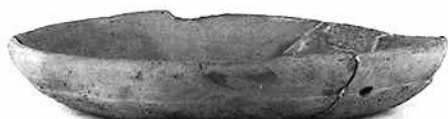
354



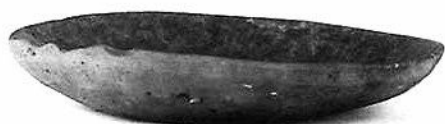
355



356



357



358



359



360



361



362



363



364



379



365



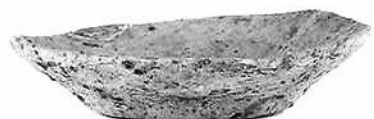
380



366



381



367



382



368



383



369



384



370



385



378



386



377



397



398



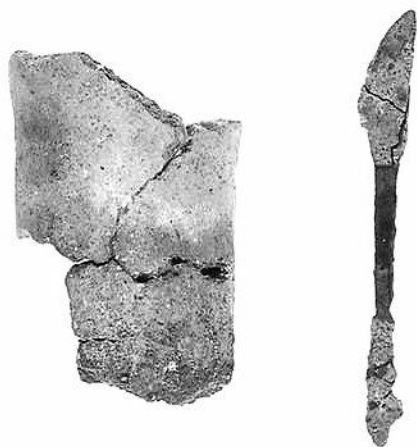
387



399



388



336

411



389



414

415

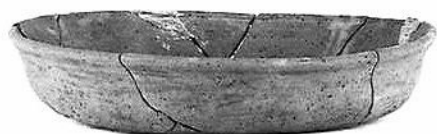
416



417

418

419



390



420

421

422



404



406



423



405



409



424



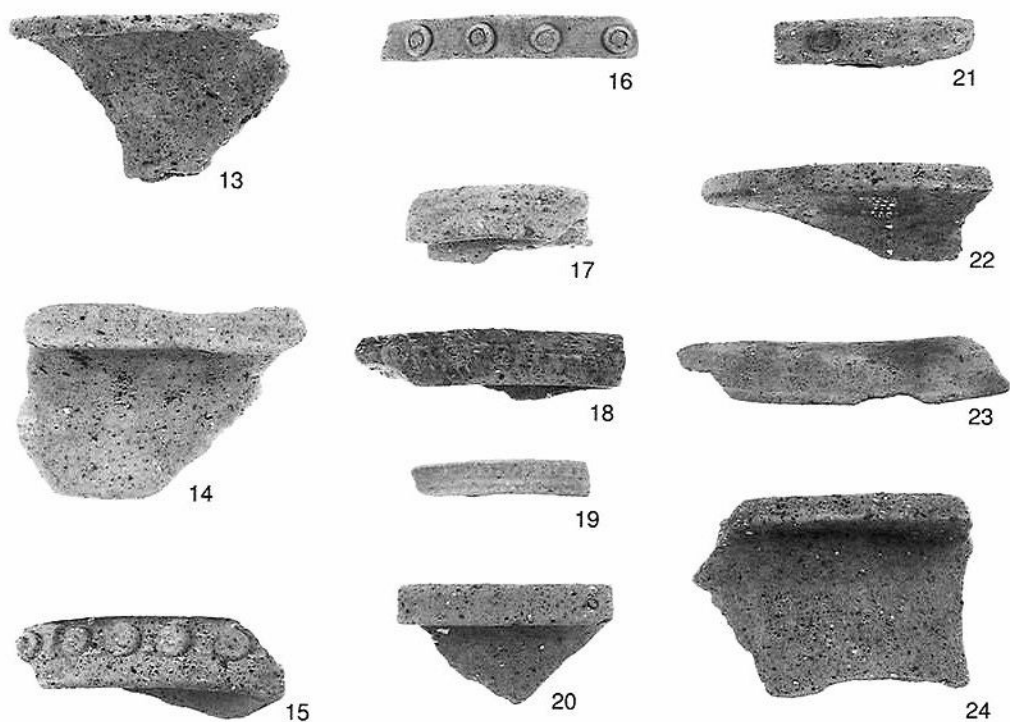
407



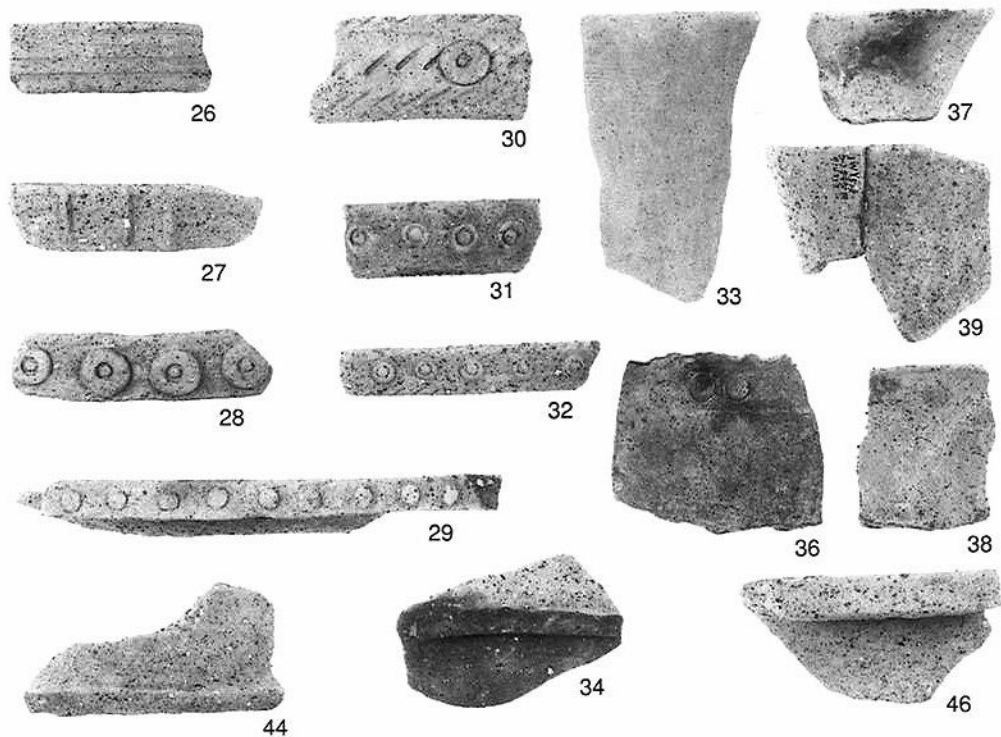
408



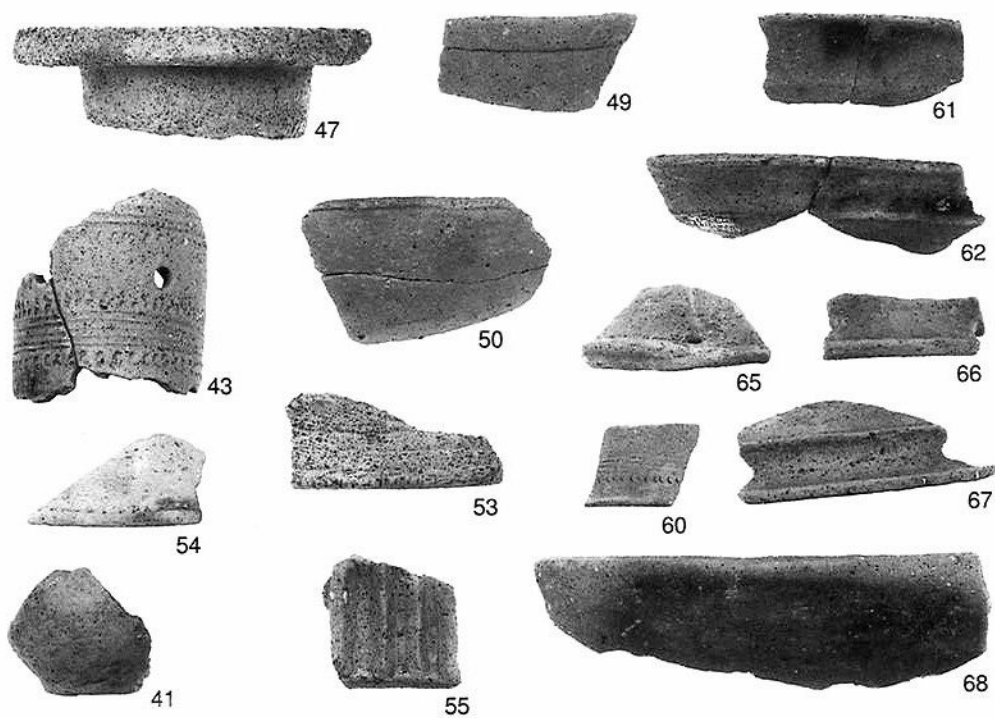
1 4号竖穴住居跡出土弥生土器



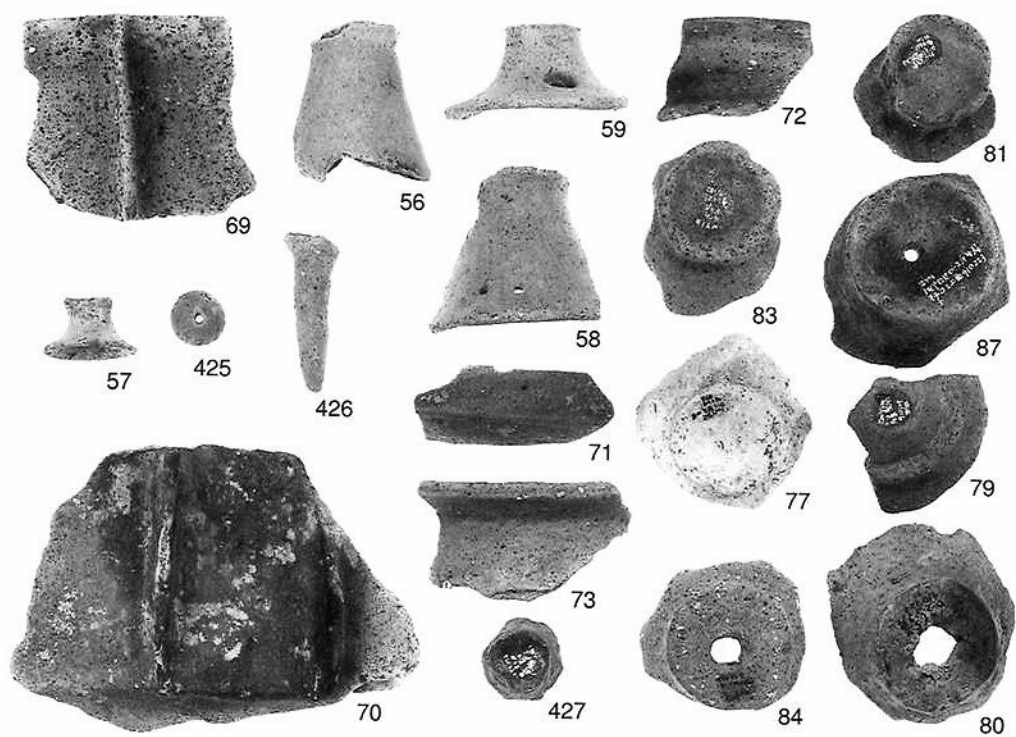
2 4号竖穴住居跡出土弥生土器



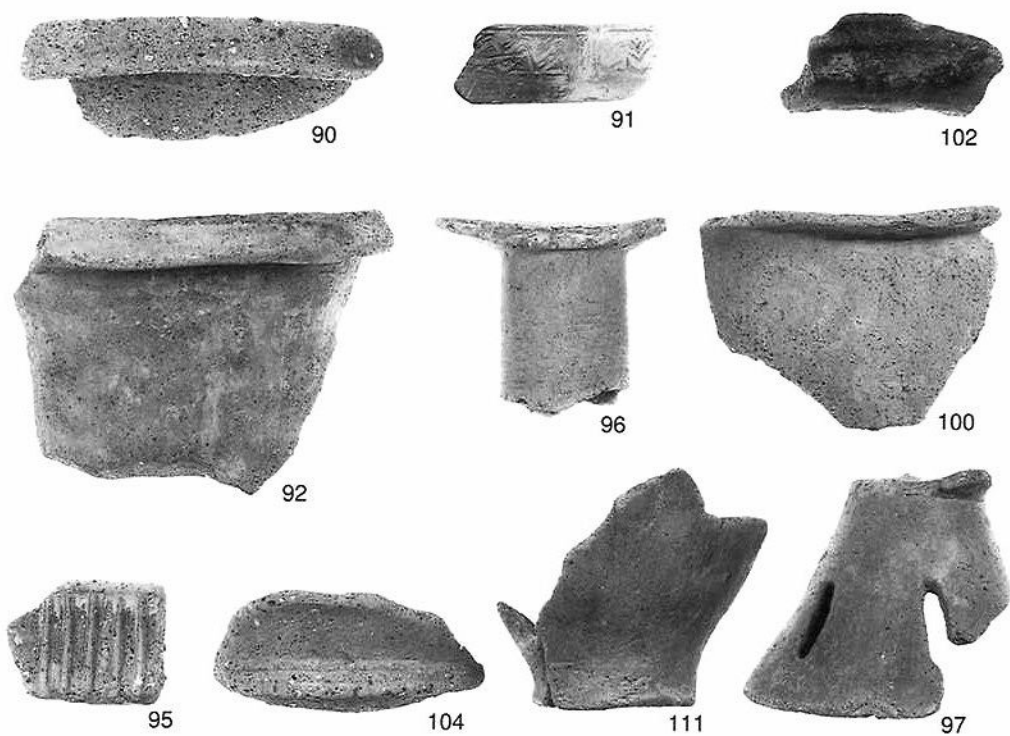
1 4号竖穴住居跡出土弥生土器



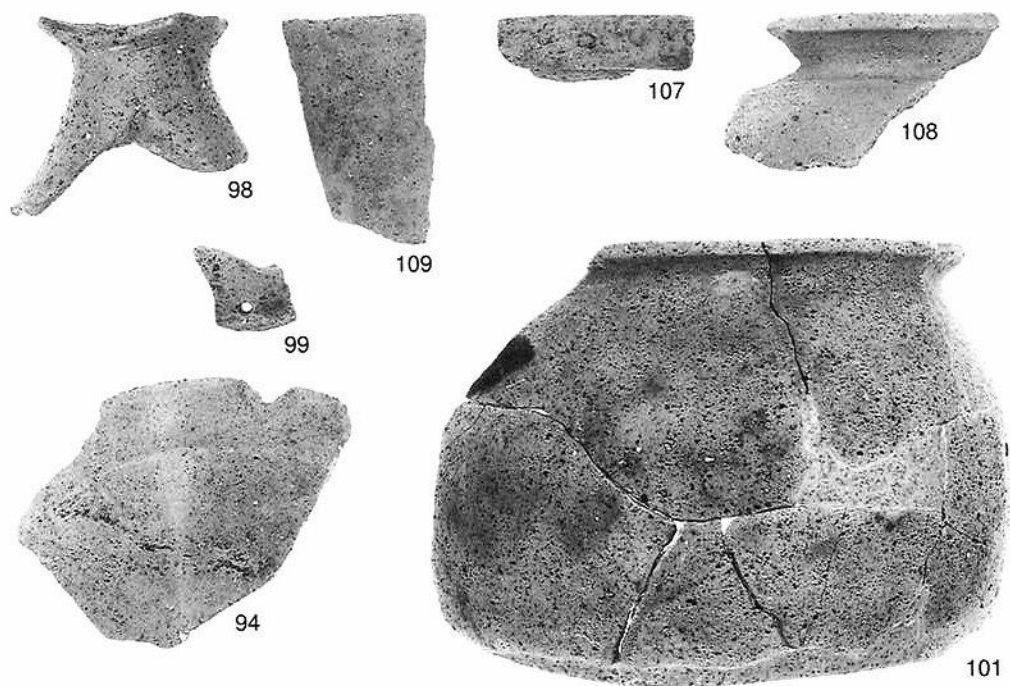
2 4号竖穴住居跡出土弥生土器



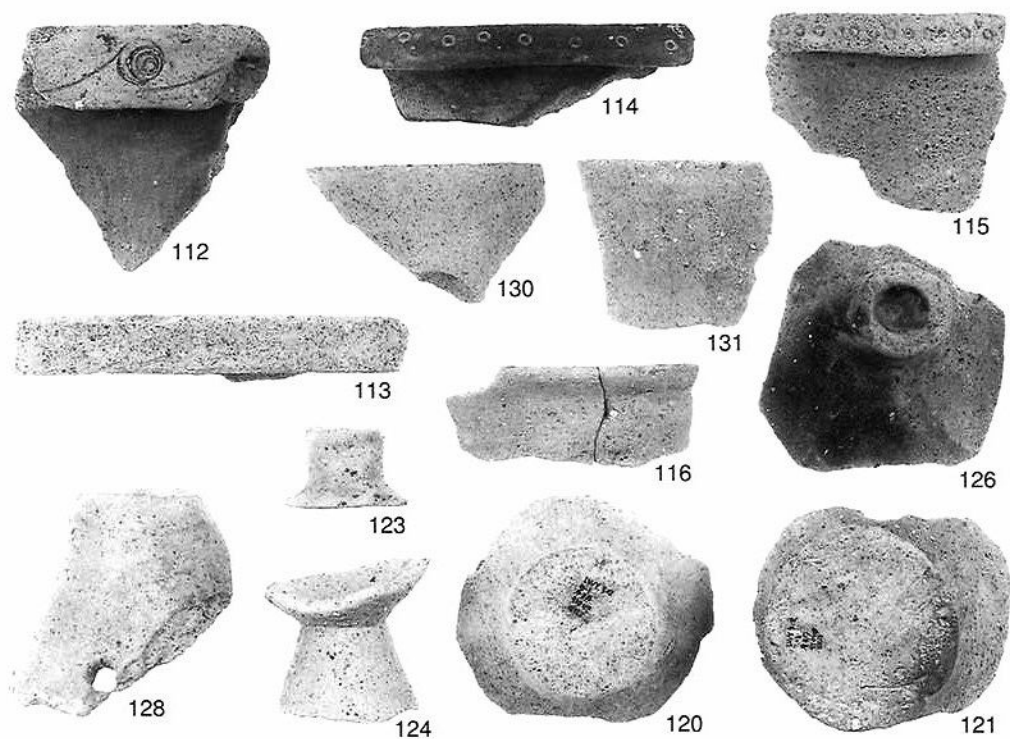
1 4号竖穴住居跡出土弥生土器・土製品



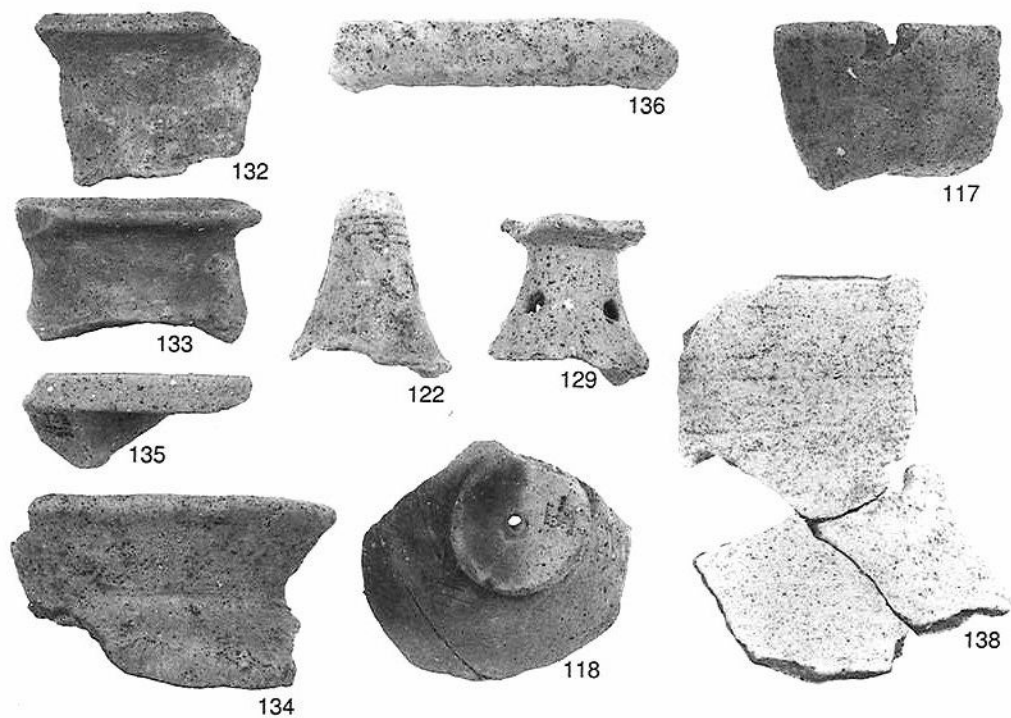
2 1号竖穴住居跡出土弥生土器



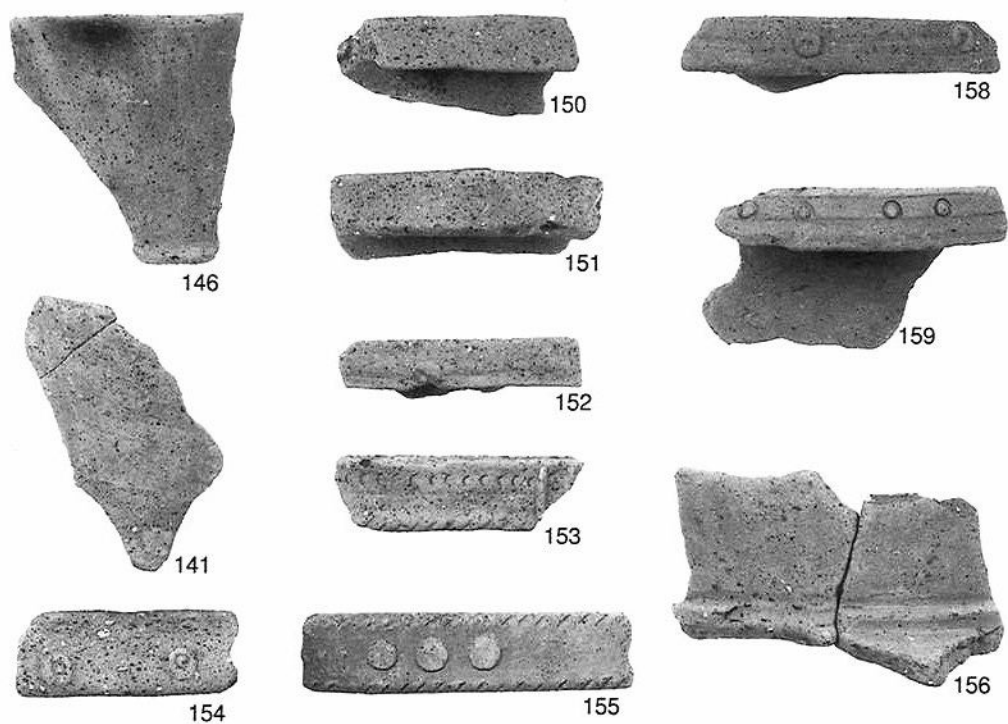
1 6号・7号竪穴住居跡出土弥生土器



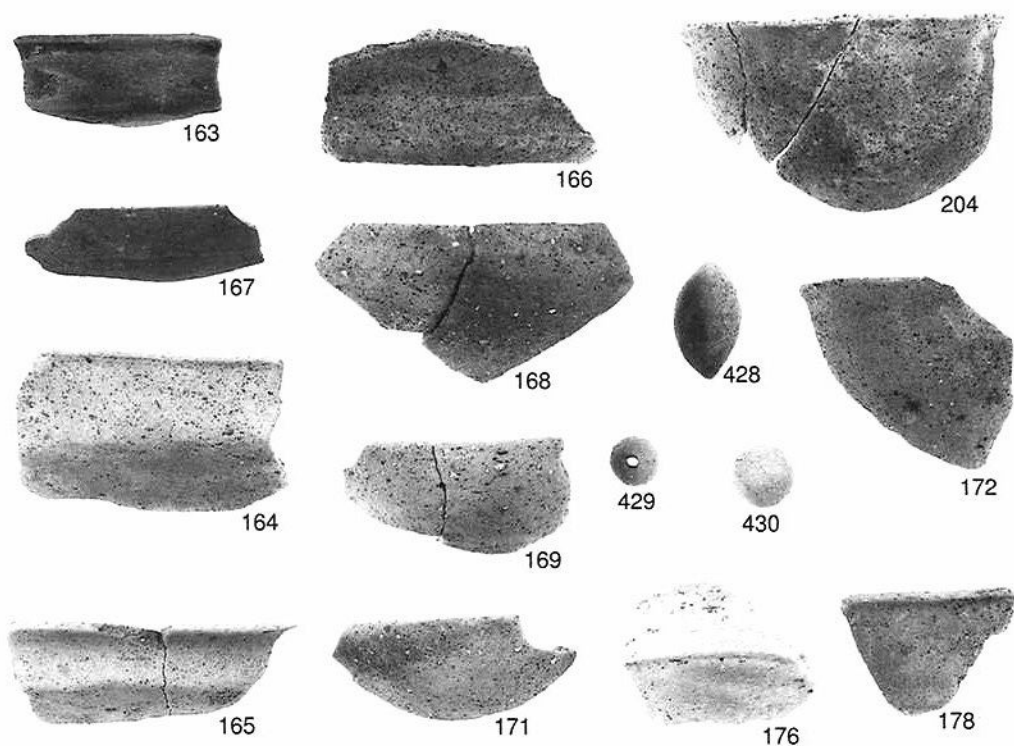
2 B地区・C地区勾金属出土弥生土器



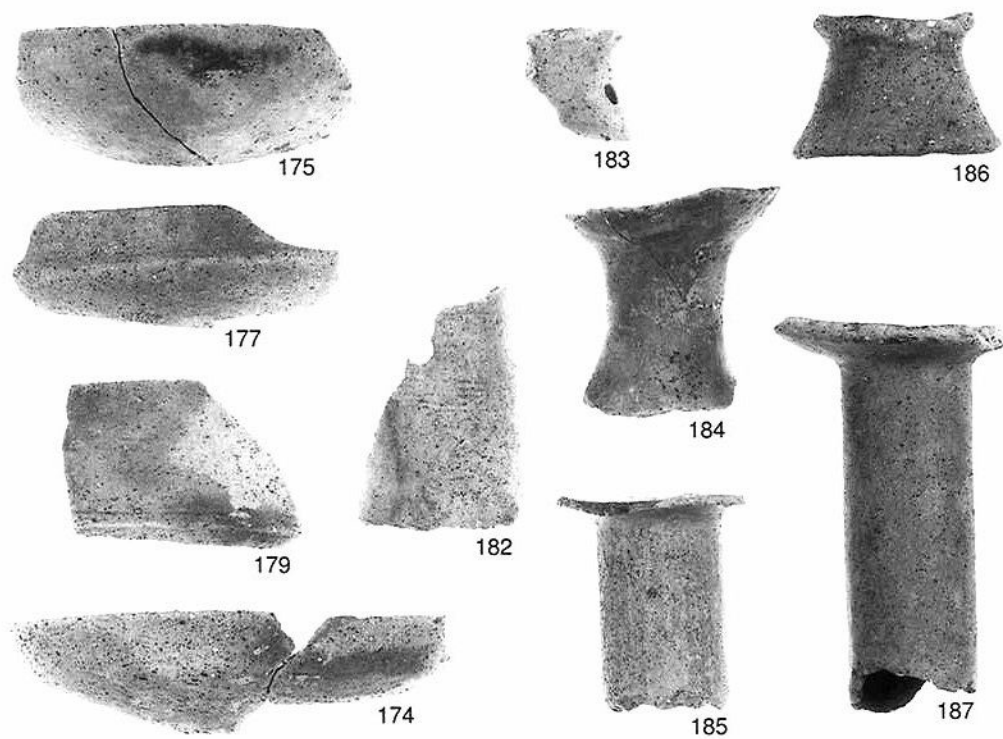
1 C地区包含層出土弥生土器



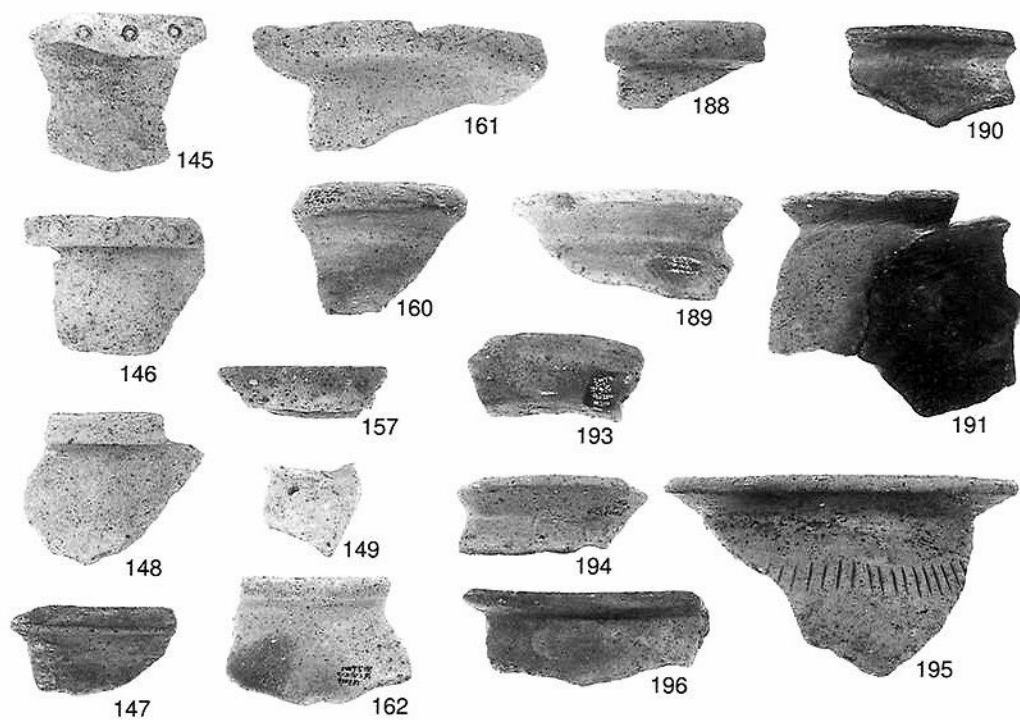
2 C地区包含層出土弥生土器



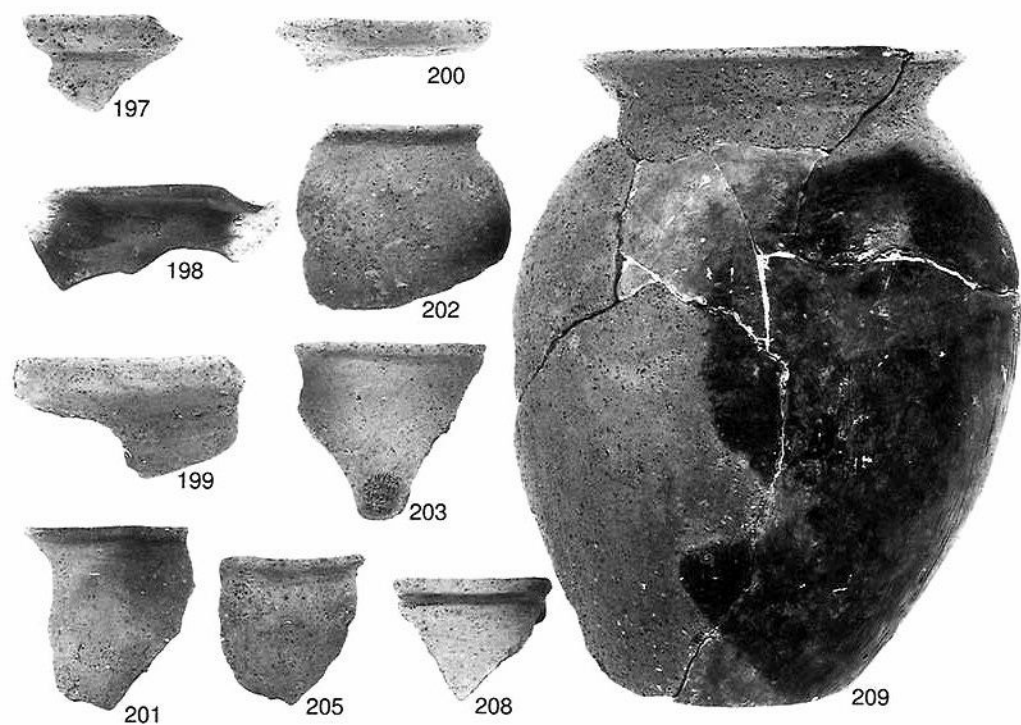
1 C地区包含層出土弥生土器



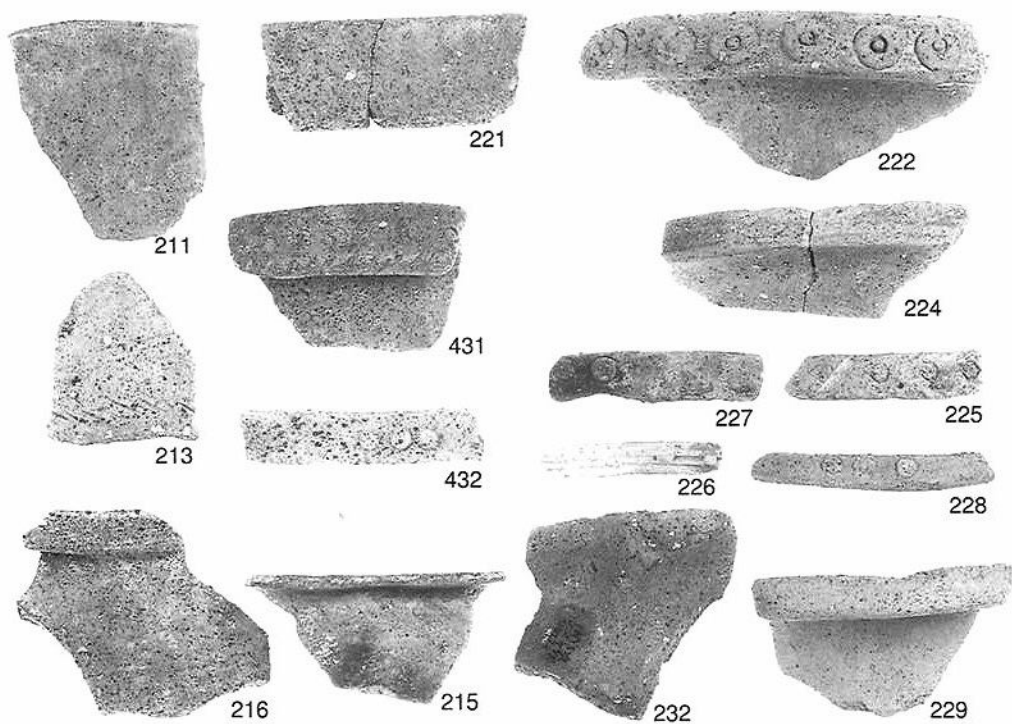
2 C地区勾会層出土弥生土器



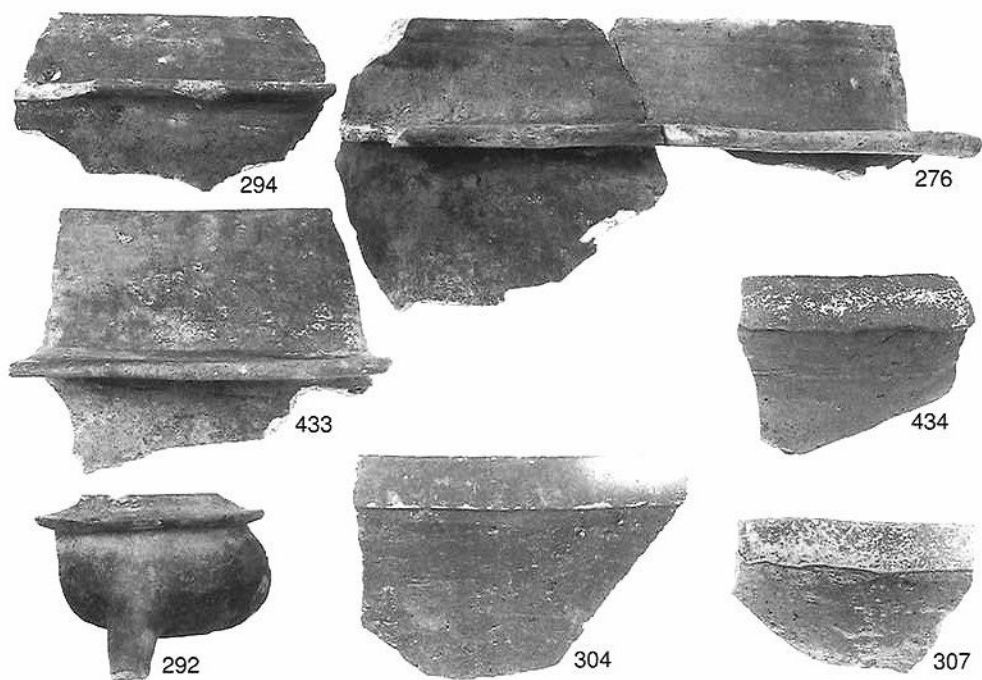
1 C地区包含層出土弥生土器



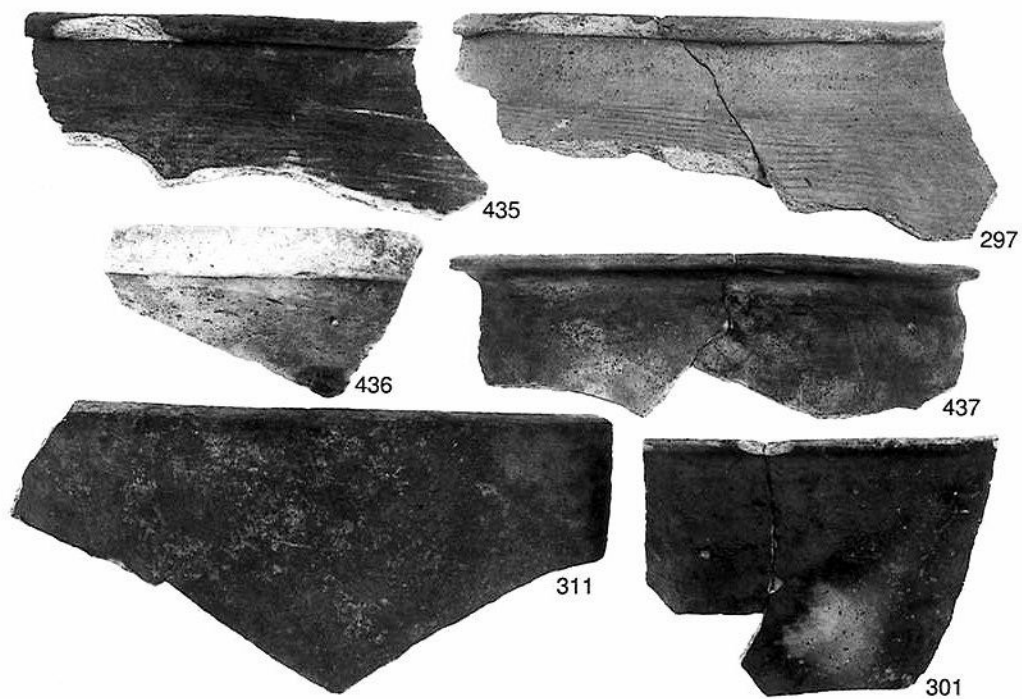
2 C地区包含層出土弥生土器



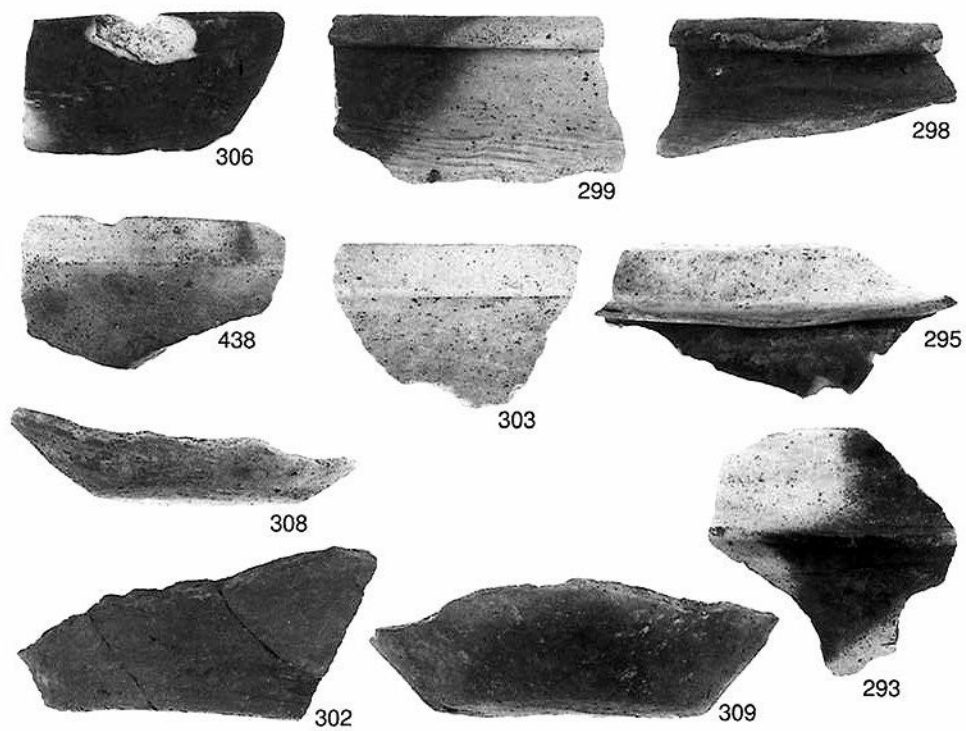
1 D地区包含層出土弥生土器



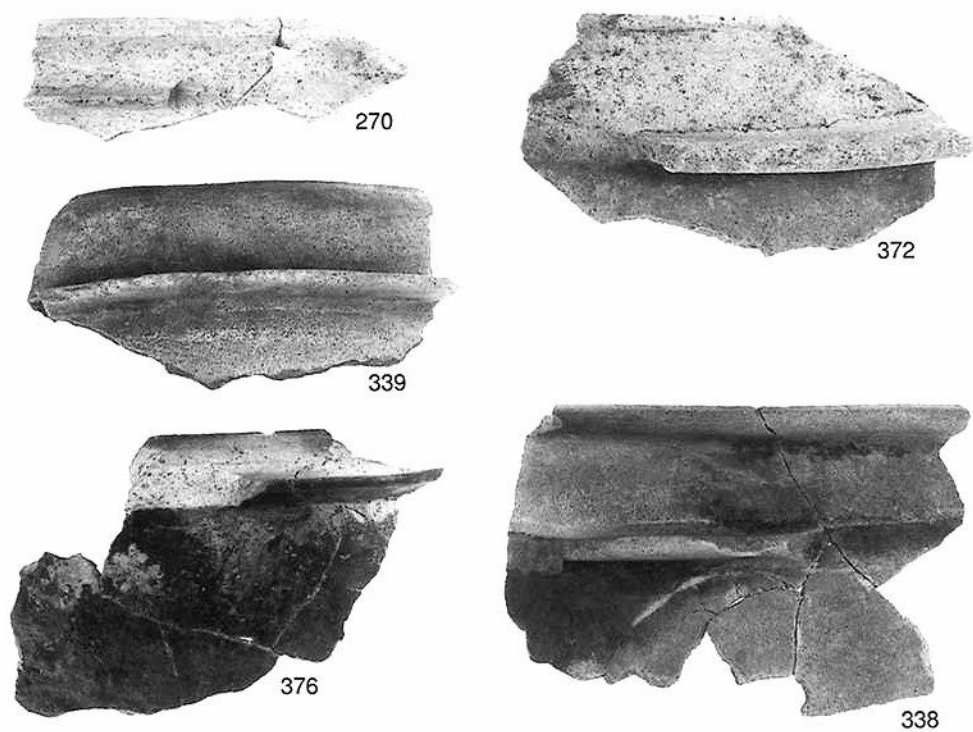
2 C地区匂含層出土瓦器・備前燧



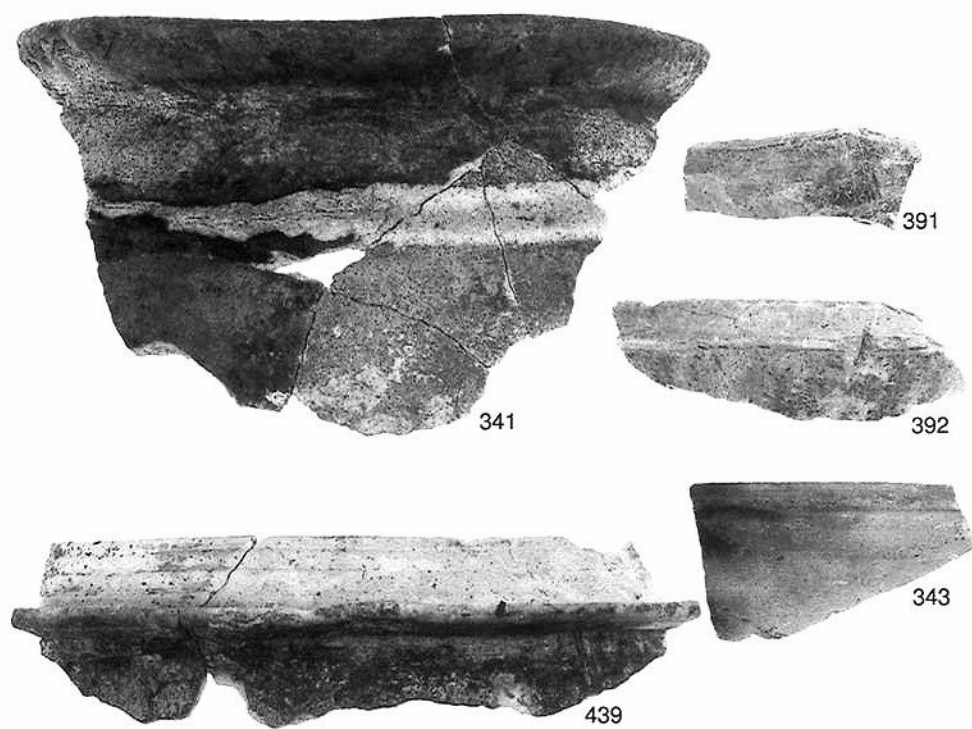
1 C地区出土東播系・瓦器



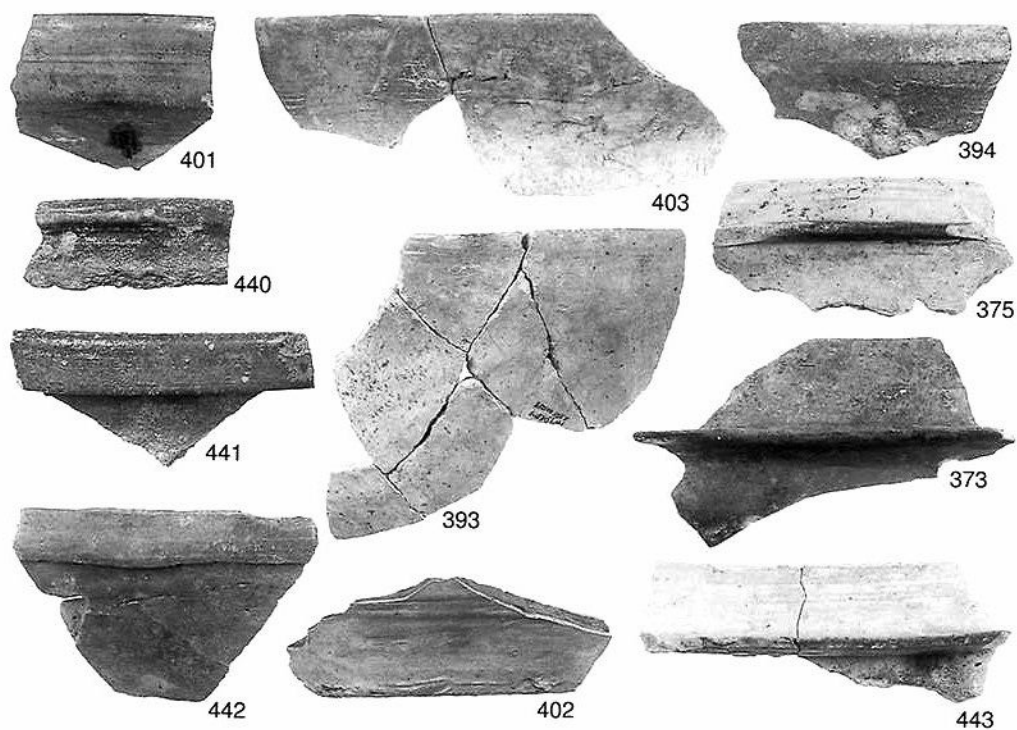
2 C地区出土東播系・瓦器



1 D地区出土土師器・瓦器



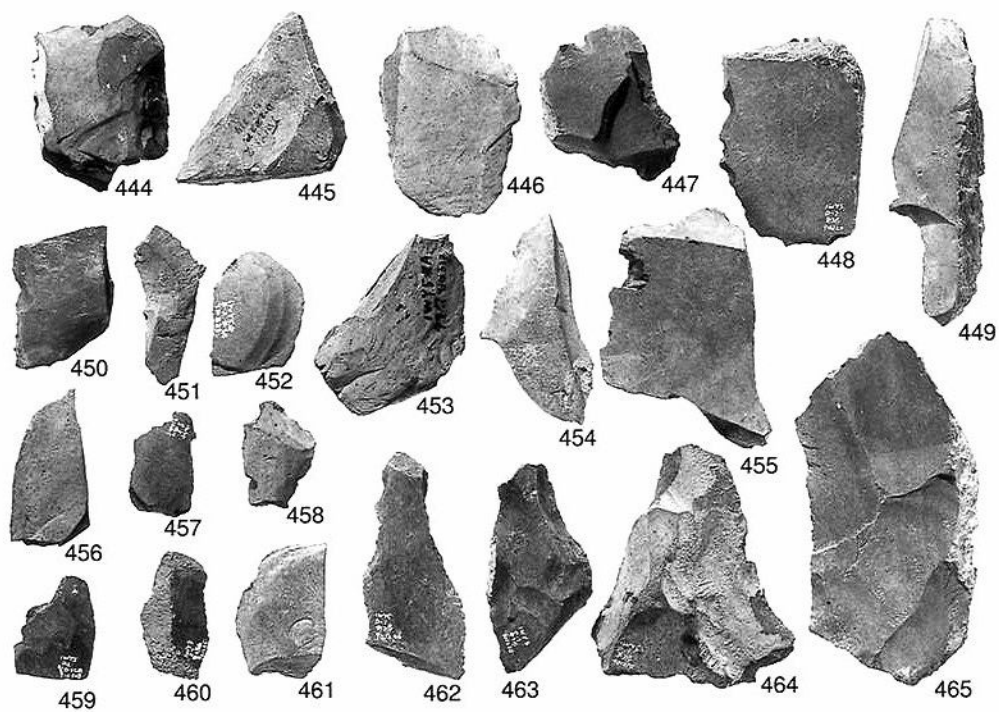
2 D地区出土土師器・瓦器・石鍋



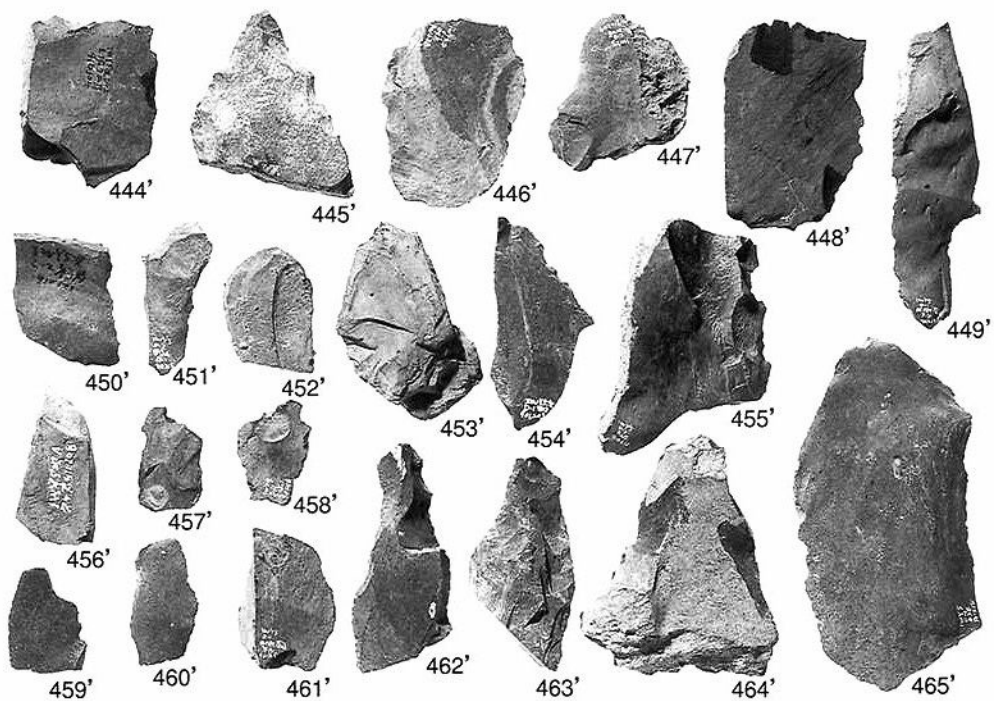
1 D地区出土備前焼・瓦器



2 D地区出土瓦器



1 各地区出土ササカイト片



2 同上(裏面)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いわたきやまいせき						
書名	岩滝山遺跡第5次発掘調査概要						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者名	芋本隆裕						
編集機関	財団法人 東大阪市文化財協会						
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21						
発行年月日	平成11年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査要因
岩滝山遺跡 (第5次調査)	大阪府 東大阪市 六万寺町2038	27227			19901127 } 19910330	約3,000	宅地造成
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
集落跡 寺院跡	弥生後期 鎌倉後期 ～ 室町時代	竪穴住居跡 石垣・井戸 石組園池 掘立柱建物跡 石敷きの道 土坑・溝	弥生土器 土師器・瓦器 瓦・銭貨 鎌倉後期の銅鏡		<ul style="list-style-type: none"> ●弥生後期初頭を中心とする7棟以上の竪穴住居跡を標高67m～85mの高所にて検出 ●中世往生院関係の鎌倉～室町時代の石垣を伴う大規模な整地面 ●石組園池及び池内出土銅鏡 ●石敷きの道や建物跡 		

岩滝山遺跡第5次発掘調査概要

1999.3.31

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

印刷 株式会社 近畿印刷センター